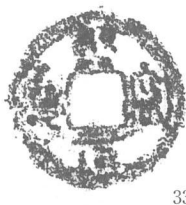
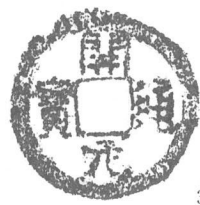




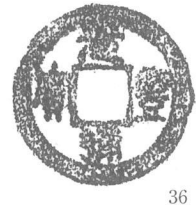
32



33



34



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



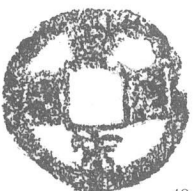
46



47



48



49



50



51



52



54



55



56



57

(實寸)

第143圖 出土古錢拓影圖②



58



59



60



61



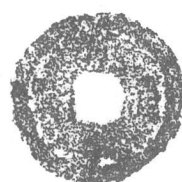
62



64



65



66



67



68



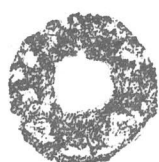
69



70



72



73



74



75



75



76



77

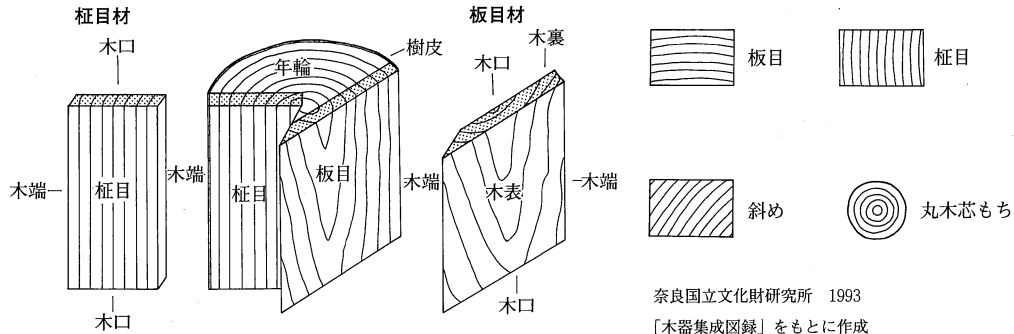
(实寸)

第144图 出土古钱拓影图③

## 第4節 木製品

本節では中世・近世の所産と考えられる木製品について述べる。なお、木製品観察にあたっては下記の凡例に従い木取り及び部分名称を用い、種別の分類は鎌倉市『佐助ヶ谷遺跡』を参考とした。

また、出土木製品は全て赤外線装置により文字資料有無の確認を行ってある。



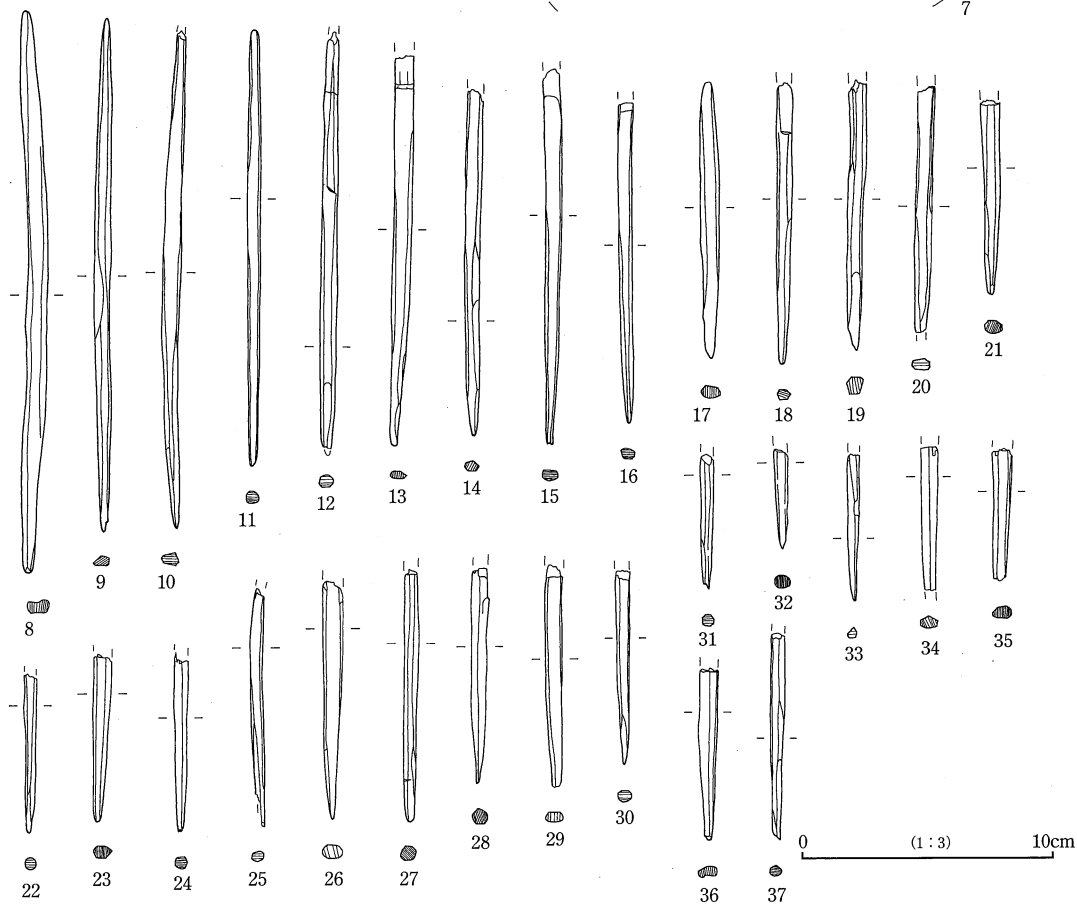
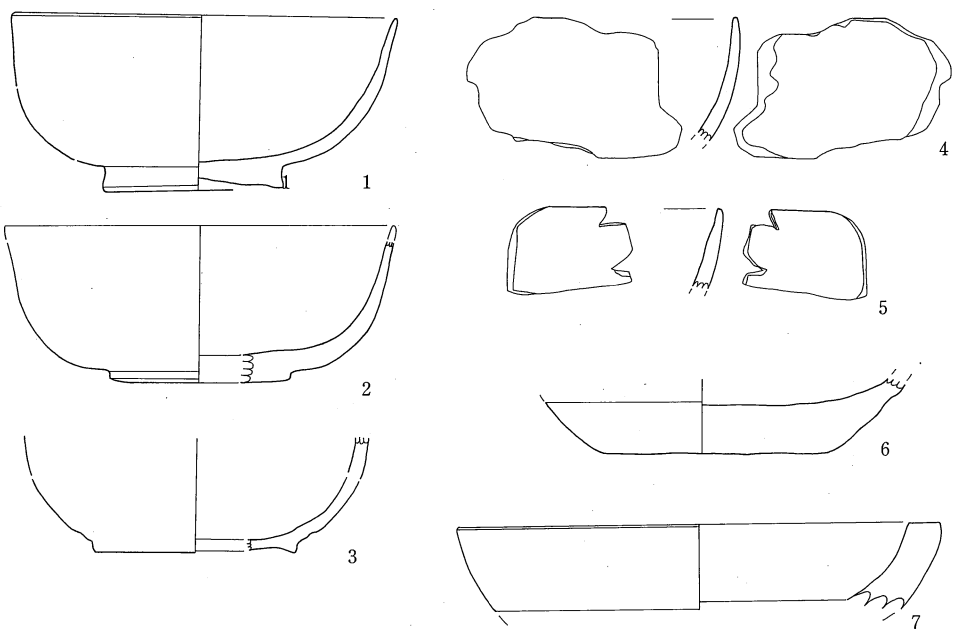
奈良国立文化財研究所 1993  
「木器集成図録」をもとに作成

第145図 木製品凡例図

### ①木製品 (第146～156図、図版百三～百十一)

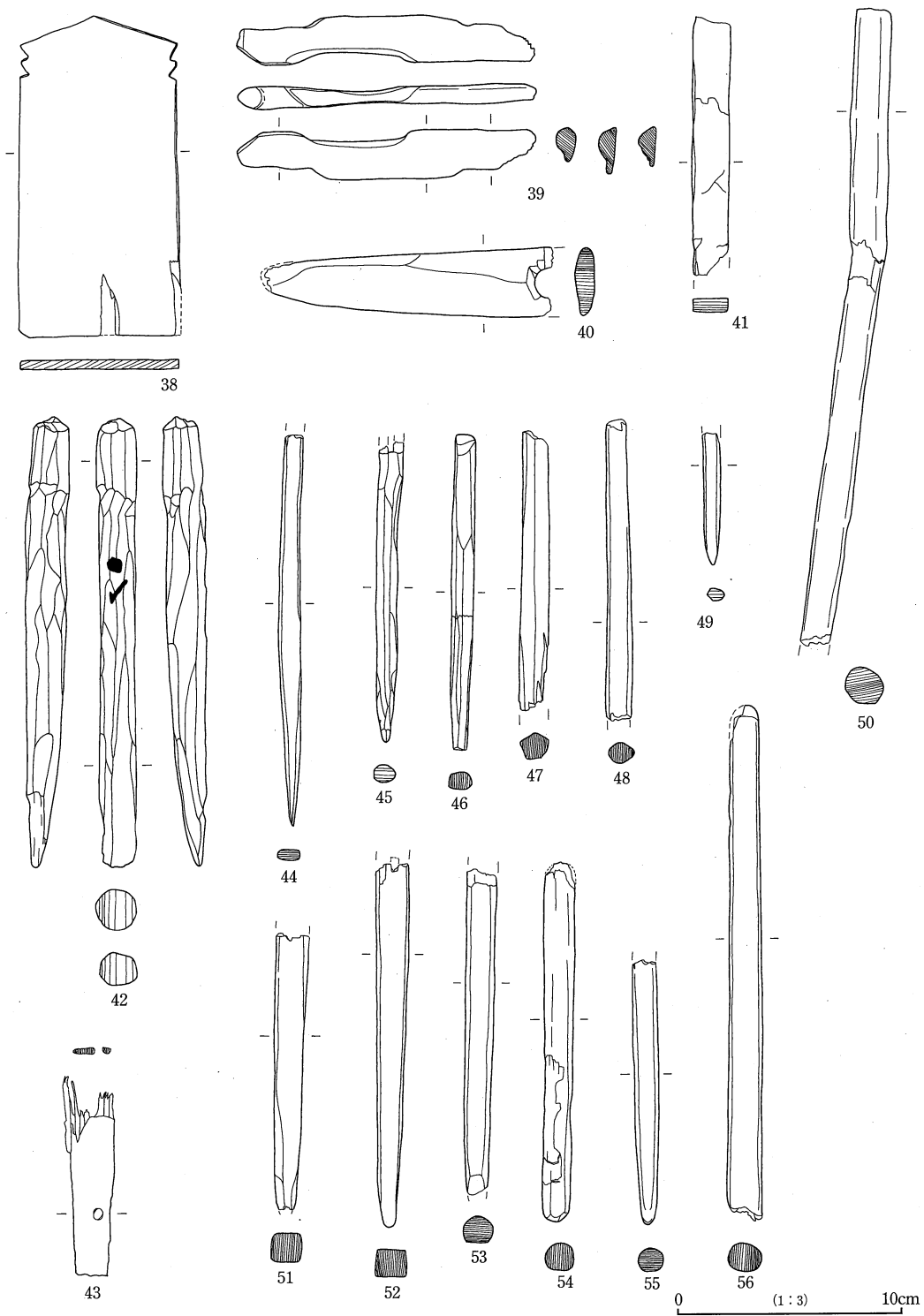
本遺跡からは中世～近世の所産と考えられる木製品が多数出土した。この内、加工痕が明瞭に観察できる個体273点を抽出し、内205点については実測図と写真を掲載、残り68点については小片が多く観察表の記載に止めた。出土位置は「J区埋没谷」の泥炭層中からが最も多く246点で、抽出した遺物の内90%を占める。J区埋没谷の出土範囲は20グリットに及ぶが、その出土範囲はほぼ杭列址の西側低地部であり、特に杭列址の西側に沿って数多くの木製品が出土している(第53図参照)。この事は中世段階においてJ区埋没谷が杭列より東側の台地斜面に添って平坦部があり、それに対して杭列西側は低湿地化し木製品が依存したと考えられる。

出土した木製品の種別と数量は不確実なものも非常に多いが次のように分類した。飲食具として漆椀5点・漆盤1点・鉢1点・箸87点・折敷2点、容器が曲物4点・底板11点・蓋摘み2点、装身具が扇子1点、履物が下駄1点、呪術具が齋串14点、形代が人形1点・鳥か馬1点・刀1点、仏具が卒塔婆1点、調度具が灯明台1点、染・織具が手押木2点、工具として柄1点・木槌1点・へら2点、建築部材として杭56点・井戸材3点・格子4点で、その他が用途不明の加工木である。次に個別に製品を見ていきたい。まず漆椀であるがいずれも黒漆を使用し文様施文は確認されなかった。底部が残存するもの内1と3には小さな高台が削り出されている。また、1と2の底部には不明瞭ではあるが3カ所の刺突された小孔があり轆轤への固定部分か。6は底部のみの残存であるが体部が薄い器厚で立ち上がるため「盤」とした。7は口縁部の面取りが良好に仕上げているため、完結するものと解釈し「鉢」とした。97・105は折敷で、105は経木折敷と考えられる。箸は87点の内残りの良い30点を図示した。ただその内ほぼ完形として捉えられるのは8～11の4本のみであり、全体の実数は不明で

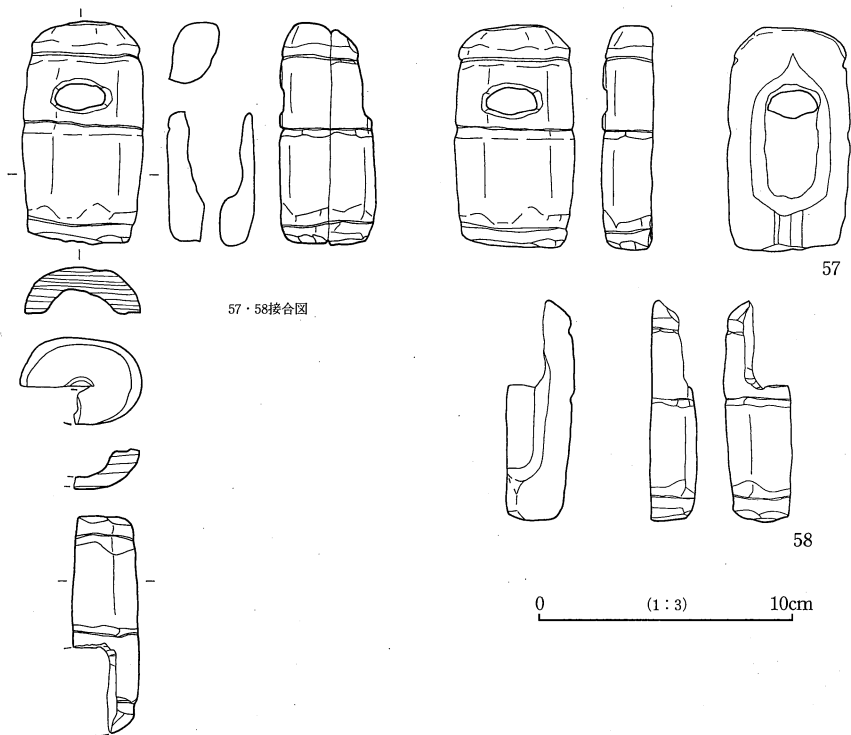


第146图 木製品実測图①



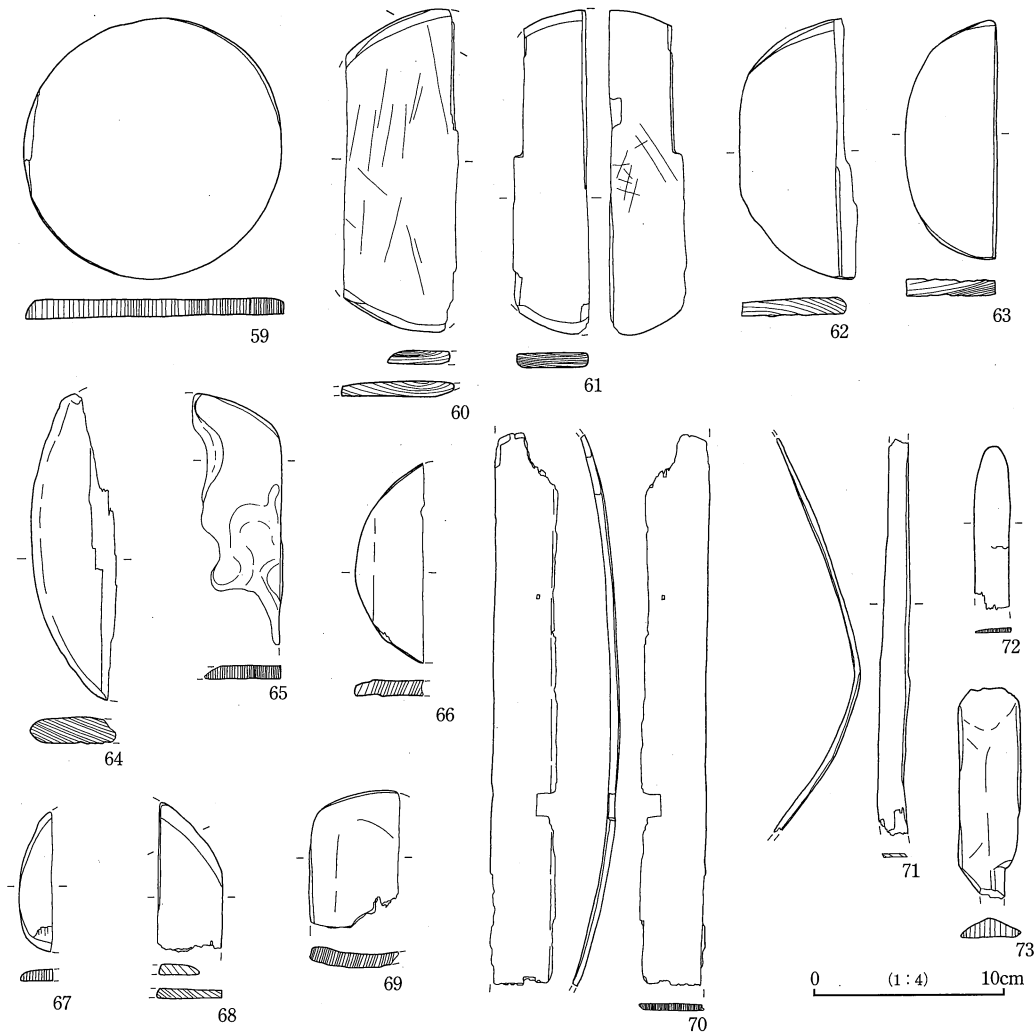


第147图 木製品実測图②



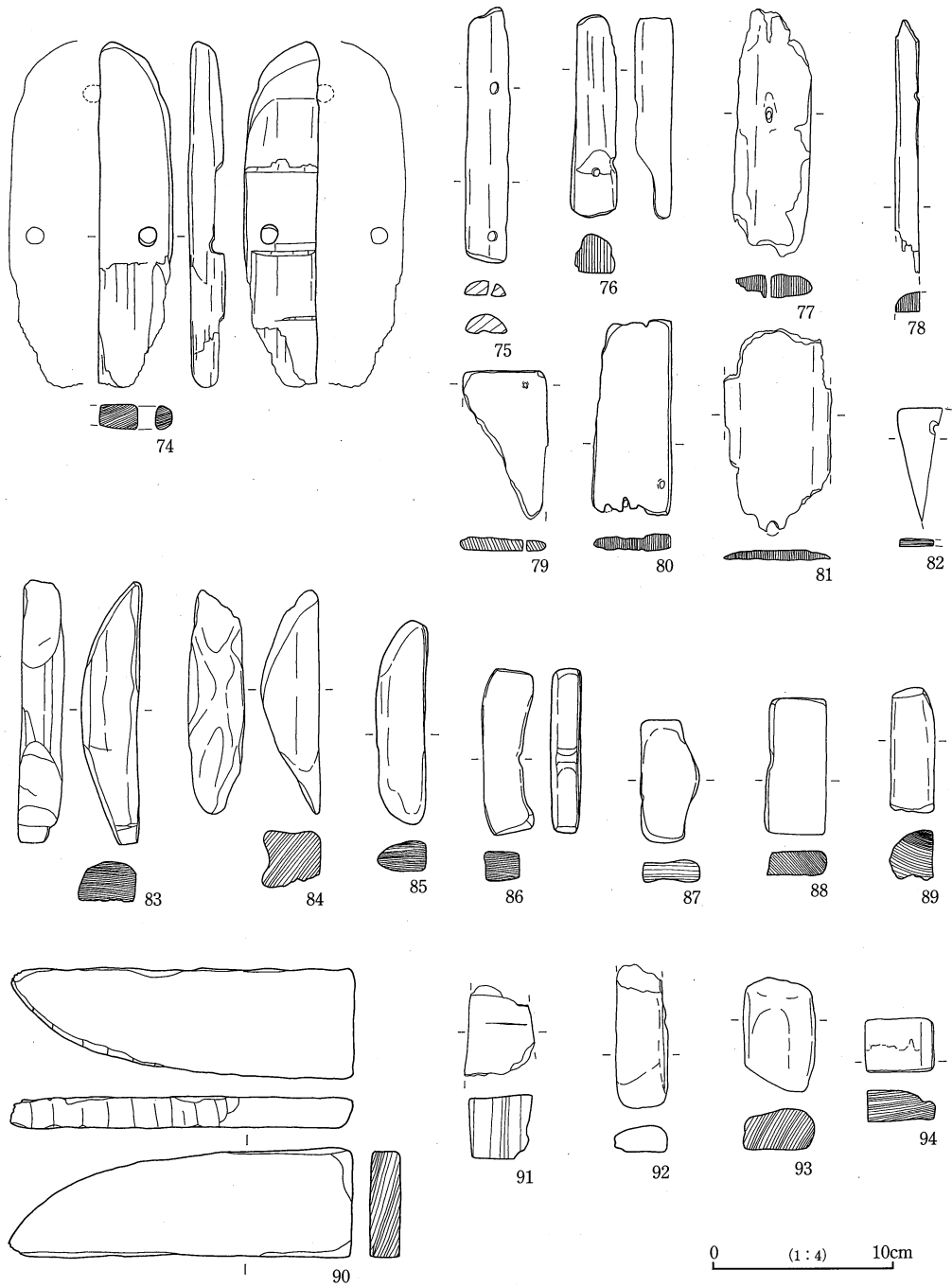
第148図 木製品実測図③

ある。8～11はいずれも両側を削り尖らしてあった。断面形態は8がやや長方形で、9と10は五角形、11はほぼ円形であった。箸の長さは8が22cm、9・10が20cm前後、11が17cmで3種類が4本の中に存在する。38は卒塔婆と考えられ左右2カ所の刻みが施されている。文字は発見されなかった。39は形代の鳥か馬と考えた。ただ中世の鳥形に類例が管見できず疑問も残る。42は人形の形代である。頭部と思われる4cm程の部分には人面と断定できる目や口の表刻は確認できなかったが、胸のあたりに墨痕が確認された。また棒先端は「V」字状に削り出してあった。本品は他の木製品に比べると非常に丁寧な削り出しが行われている。40は不確実であるが刀形か。41・44～56は齋串としたが確証はない。ただ41は本遺跡出土の木製品の中では唯一「人」と考えられる墨書が認められた。これら齋串とした理由は箸に比べていずれも太い事と他の加工木材に比べ削りが丁寧であるという点を考慮した。なお、45・52は頭部に凹状か或いは孔となる加工が見られる。43は孔の位置とその形態から扇子の骨と推定した。ただ、本遺跡からは本品1点のみの出土であり、また使用材がヒノキという事も合わせ考えると他の製品の可能性が高いのかもしれない。57・58はその形態より鳴鏑矢の先端と考えられる。58が欠損しているが本来は2点が合わさり図示した下の方に断面円形の矢本体が延びると考えられる。形態は扁平な楕円形で中程に不整形な孔が穿たれている。内面は船底状に挟られており外側には3本の刻み線が施されている。ただ、本品は外面にもまた矢が直接接する内面にも使い擦れしたような痕跡は無く、楕円形という事も考え合わせる

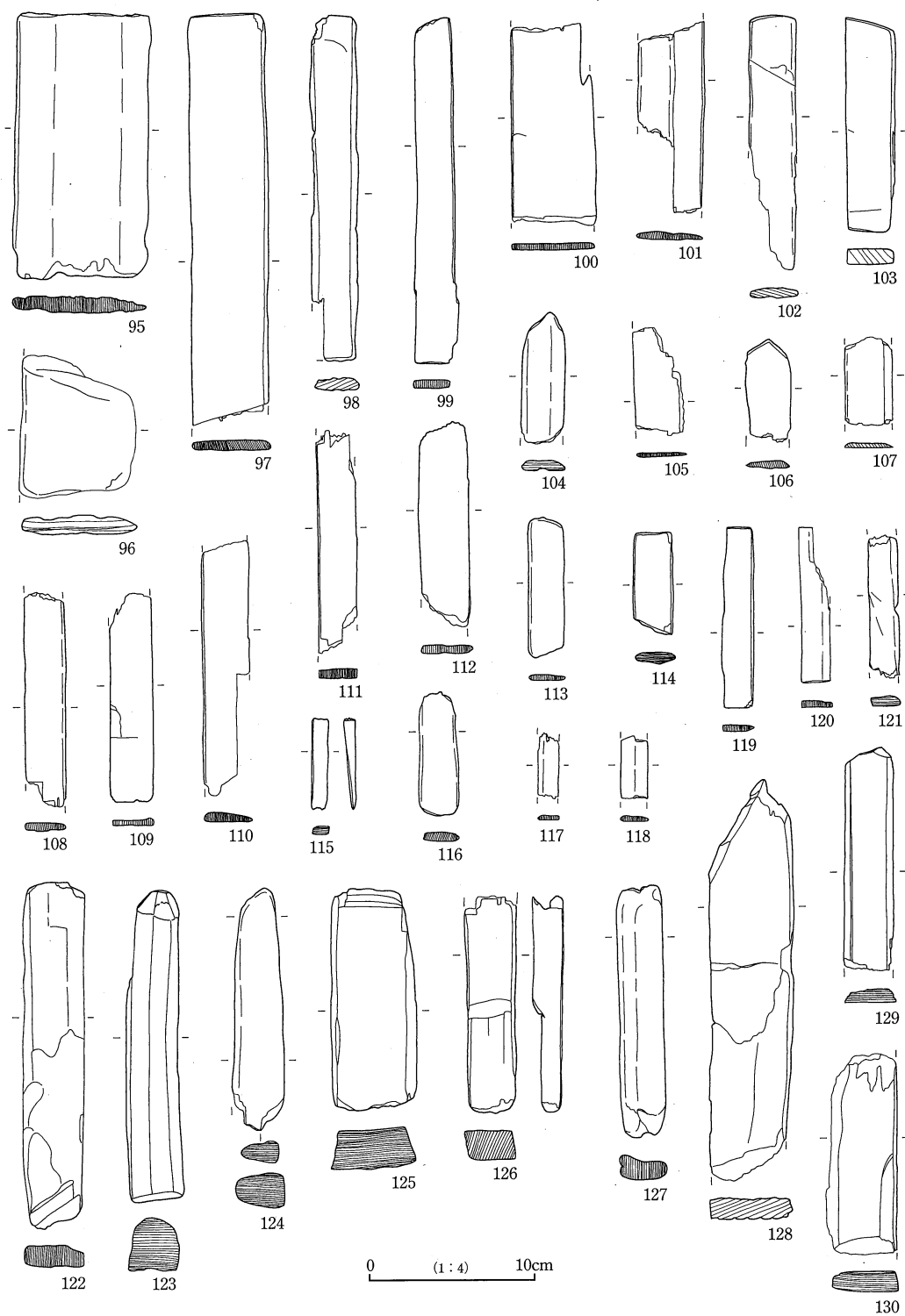


第149図 木製品実測図④

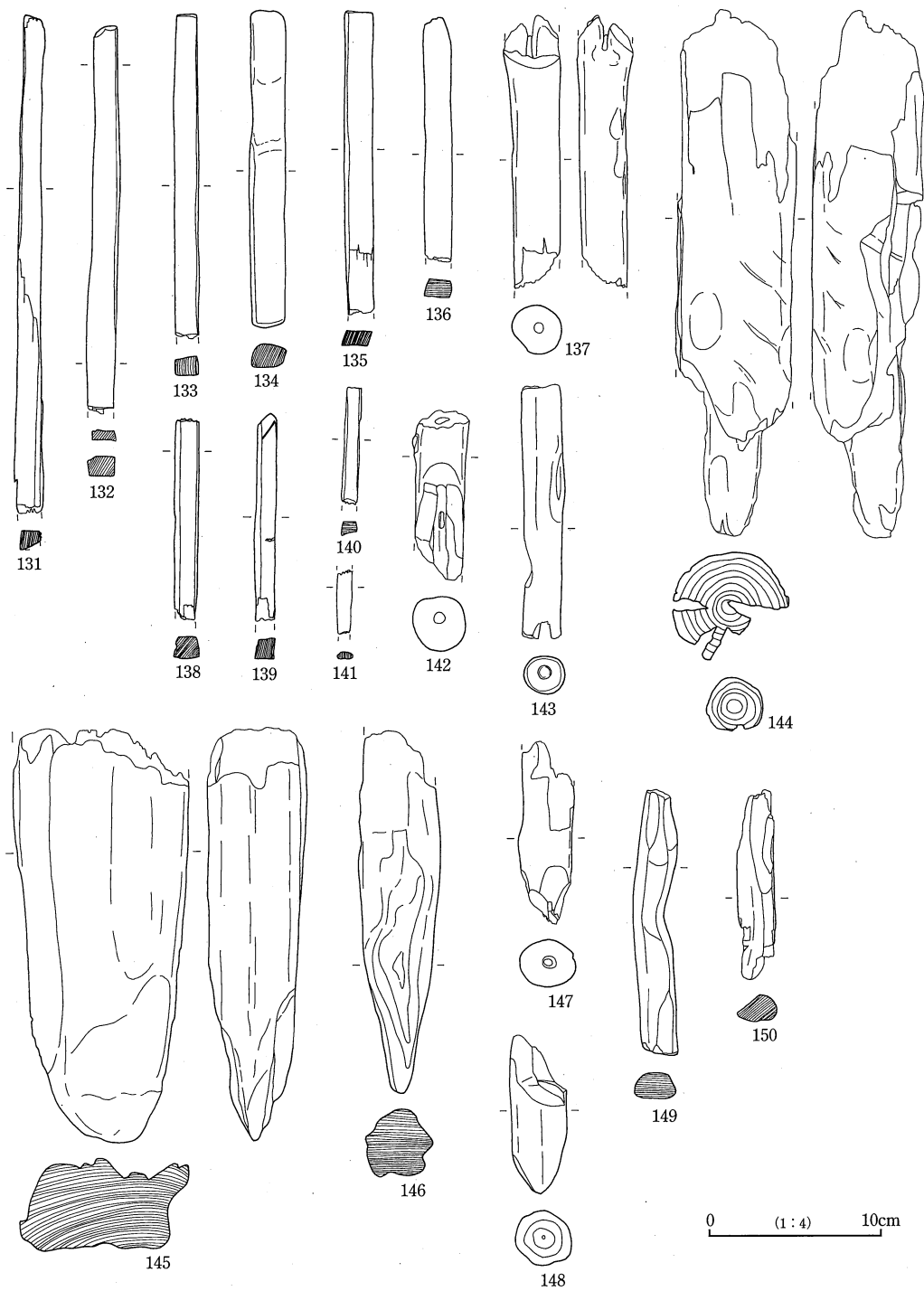
と製作途中の製品だった可能性がある。59～68は曲物等の底板と考えられる。当遺跡の品はいずれも側面に止め具の痕跡が確認できなかった。なお、60と61は表裏ともに無数の刃物傷が観察できた。75・76は蓋の摘み部と考えられる。70・71・100は曲げ物の杵部分の一部と考えられ、曲線が変形していると思われる。74は下駄であり、1/2程が残存していた。歯は一木からの削りだしである連歯式であるが2本とも水平になる程すり減っていた。144は木槌と考えられ柄は欠損していたが、手持ち擦れが顕著であった。83・84は手押木であり直線側は擦れが観察できた。86は灯明台と考えられるが挟りが小さく不確実である。75以降は用途不明の加工木である。個々特徴はあるが種別の同定には至れなかった。ただ、可能性として108・111・119は形態から格子子としての用途が、125が井戸杵の一部として、84が滑車として推定できた。145以降は杭である。145はピット内に立った状態で出土した。長方形の断面形であり、中世ピット群が方形基調であることを裏付ける結



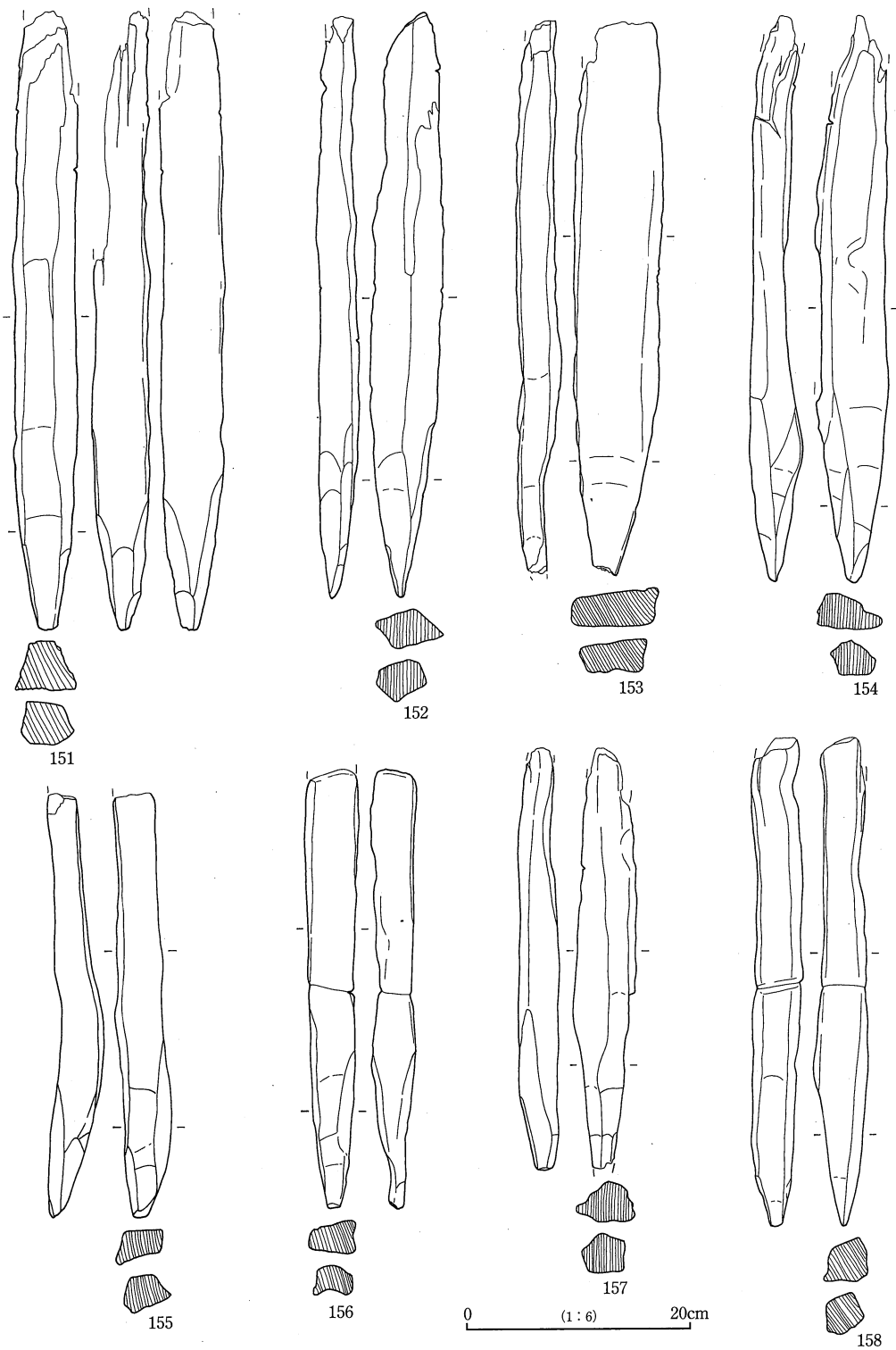
第150図 木製品実測図⑤



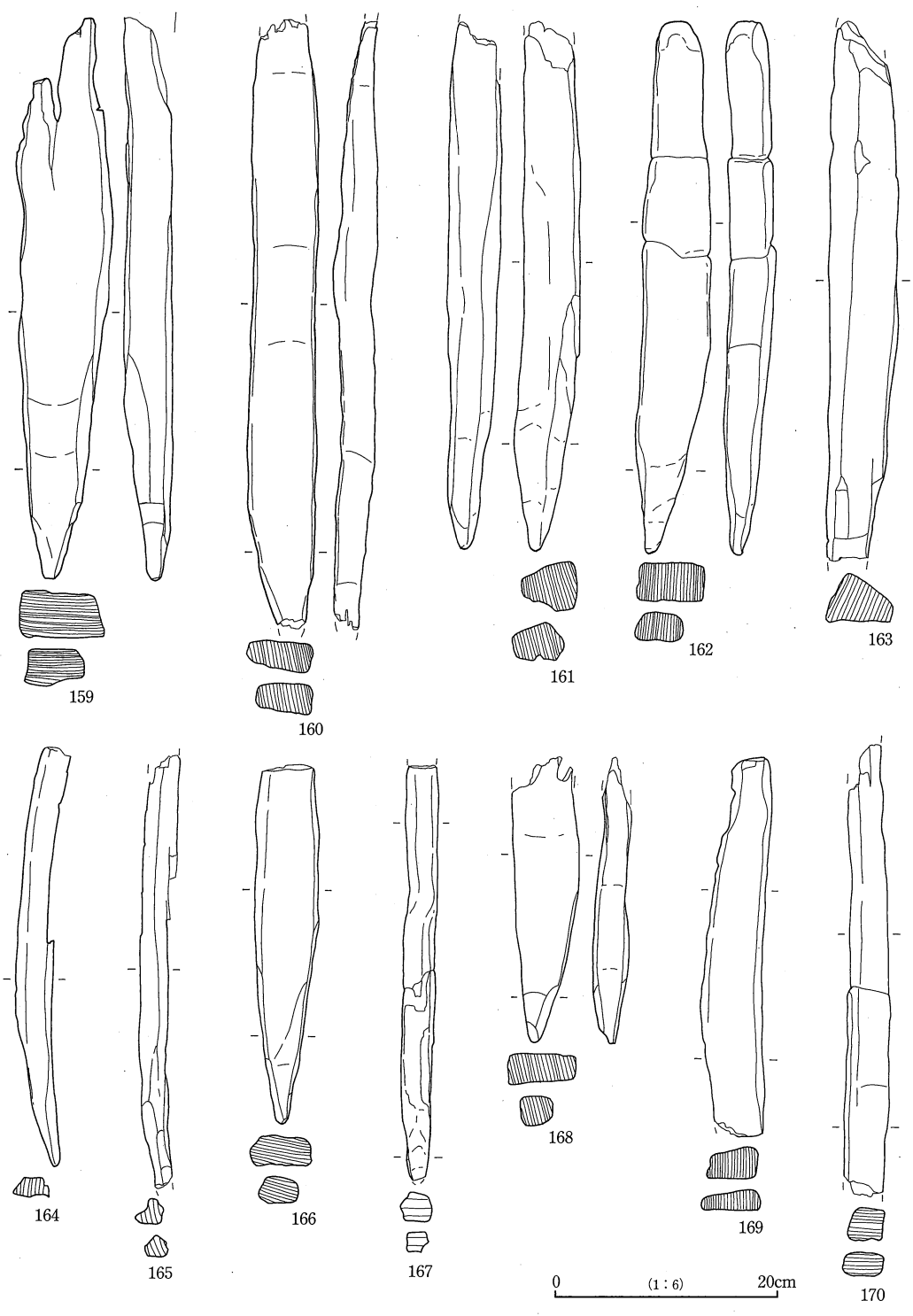
第151図 木製品実測図⑥



第152図 木製品実測図⑦

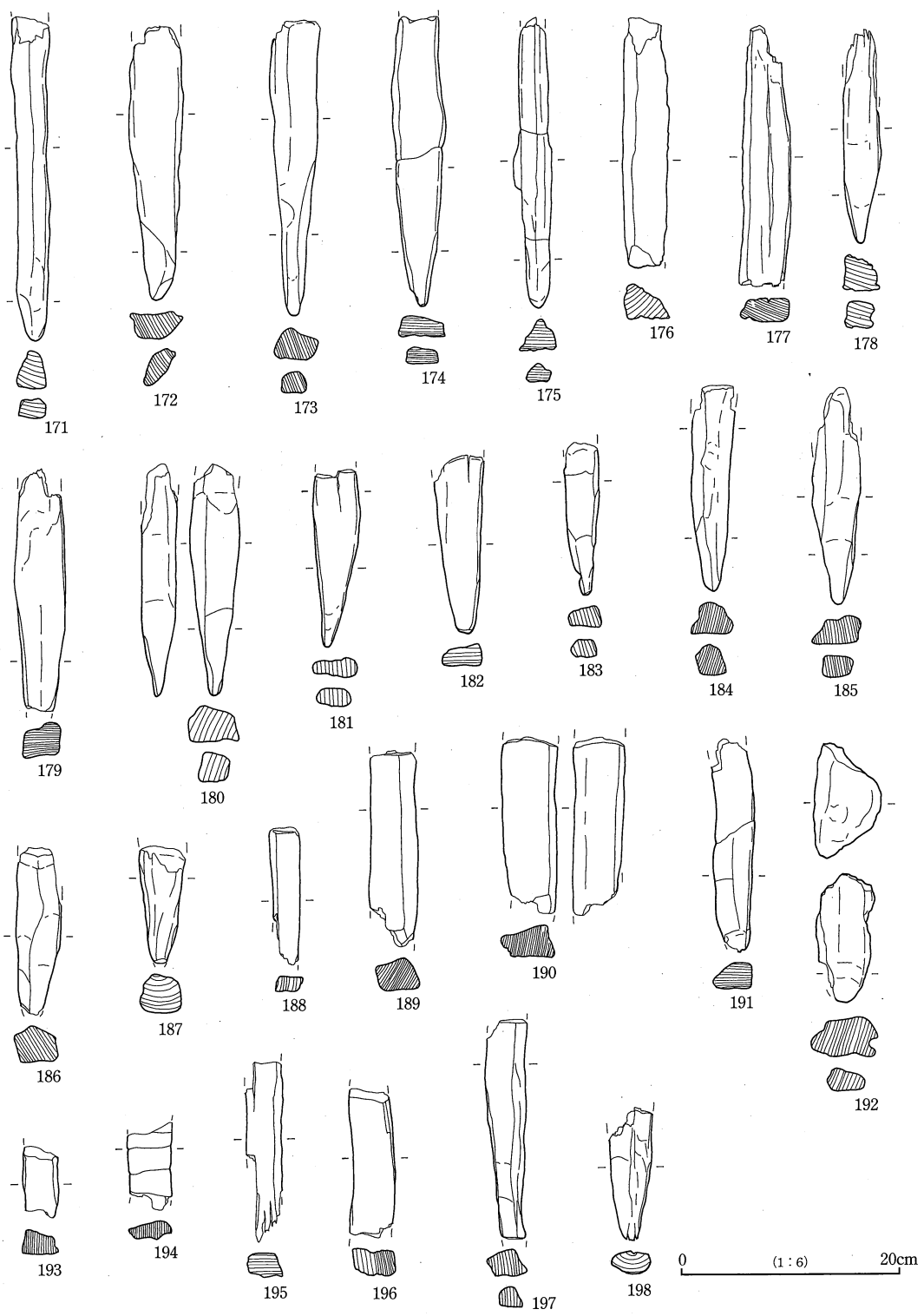


第153图 木製品実測図⑧

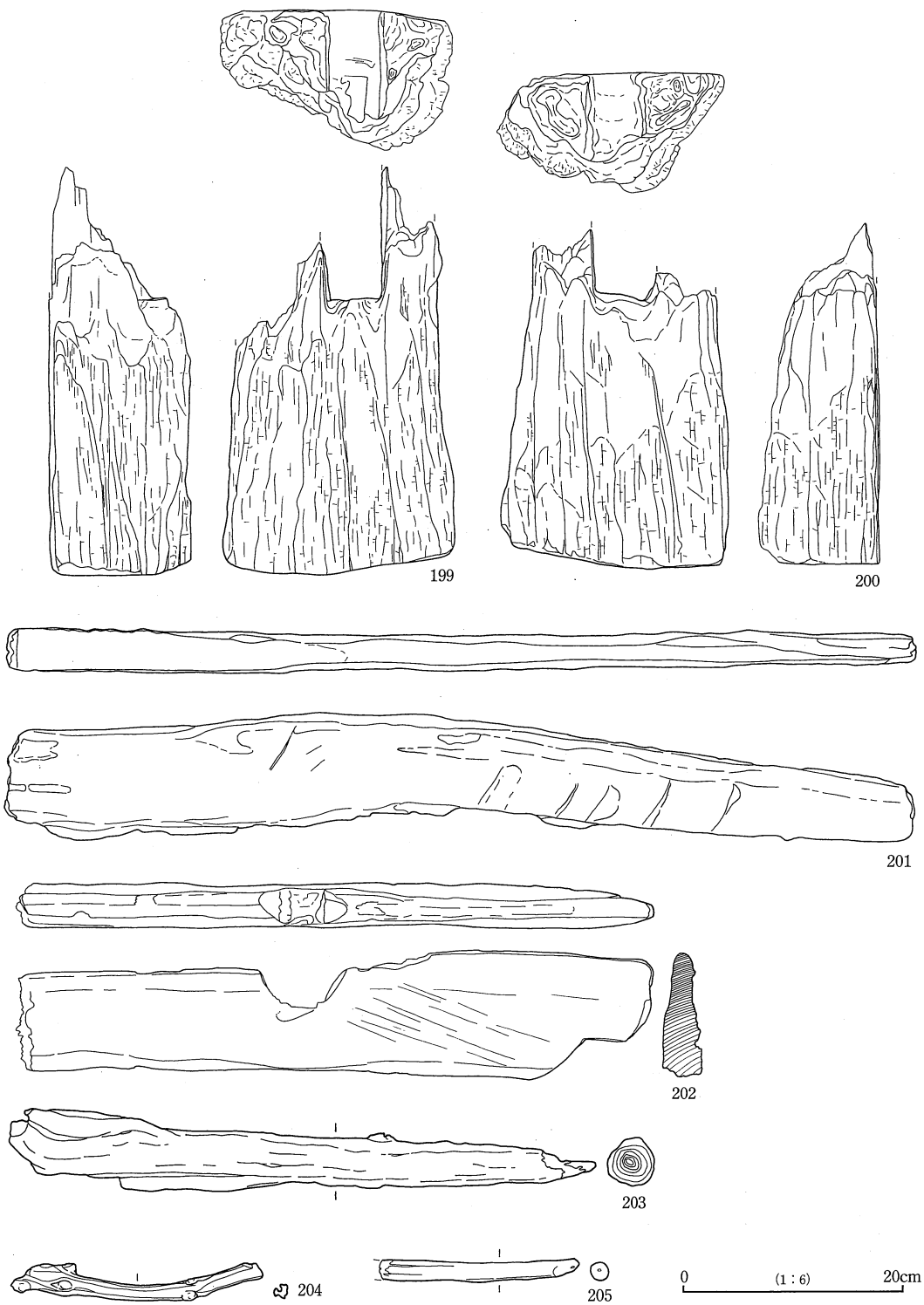


第154図 木製品実測図⑨





第155図 木製品実測図⑩



第156図 木製品実測図①

果となった。その他の杭は杭列址からの出土である。断面形は方形と長方形、数は少ないが円形の三種類があった。形態はいずれも片側先端を鋭角にカットし先端を造り出していた。頭部は残存している物が少なかったが162を見るとほぼ平坦であり、尚かつ杭設置時の行為によると思われる打ち込み痕の様な潰れが観察できた。杭の長さは完存の杭から判断すると40～55cmの長さと考えられる。この杭列址より出土の杭は使用材木がいずれもクリを使用しており、水中での使用を意識した選択と考えられる。199～201はⅡD86号土坑から出土した。199と200は一本の丸木を二つに割り、上部を凹状に削り出している。この凹部に201を橋渡し状にかけて出土した。ⅡD86号土坑はその形態から集水的な井戸址と考えられるが、本製品3点は井戸杵としては形状が異なりその使用方法が不明である。202は集石遺構の礫群に挟まった状態で出土した。中央部に半月状の挟りがあり、表裏に無数の刃物傷が認められた。建築部材と考えられるが詳細は不明である。

以上木製品について概要を述べたが、出土木製品のうち漆椀・箸・下駄・手押木等の確実に種別の確定できる製品は非常に少なかった。最後にこれら木製品の所産時期を考えたい。出土品のうち木製漆椀についてはその形態によりある程度の編年の位置づけが可能となっている。榛名平遺跡出土の椀3点の特徴はいずれも体部の腰がはる。高台は平高台か低い輪高台である。赤漆は見られない。これらの特徴をまず齊藤氏の越後地方木製漆器編年観に当てはめると「Ⅲ群」14世紀頃として捉えられる。また齋木氏からは「全国的に15世紀に入ると椀の高台が高くなる傾向にある。鎌倉周辺の出土例からすると13～14世紀頃と考えられ、また木製品の組成は調理・炊事具や筥等の工具、遊戯具などが欠落している」というご教示を頂いた。以上の事から榛名平遺跡出土の漆器については13～14世紀代の所産と考えられ、その他の木製品もそれに近似する時期として捉えられよう。現在において周辺地域はもちろん長野県内においても稀少な資料であるためあえて位置づけをおこなったが、類似資料の蓄積が望まれる分野である。

番号	出土位置	種別	樹種	法量 (cm)			木取り	遺存状態	備考
				長さ	幅	厚さ			
1	J-ウ-18	漆椀	ケヤキ	口径(15.3)	底径7.2	器高7.0		4/5残存	
2	J-カー19	〃	〃	口径(15.8)	底径(7.2)	器高(6.2)		1/2残存	
3	J-カー19	〃	トチノキ	口径(13.6)	底径(8.0)	器高(4.7)		底部～胴部	
4	J-カー19	〃	ケヤキ	—	—	器高(4.8)		口縁部	
5	J-オー19	〃	〃	—	—	器高(3.2)		口縁部	
6	ⅡM77	漆盤	クルミ属	—	底径(9.0)	—		底部	
7	J-カー19	漆鉢?	ケヤキ	口径(19.4)	—	器高(3.2)		口縁部	口縁部は欠損の可能性も有り
8	ⅡP4637	箸	サワラ	22.1	0.8	0.5		完形	
9	J-ク-20	〃	〃	20.1	0.6	0.4		〃	
10	J-ク-20	〃	〃	<19.4>	0.6	0.4		片側先端欠損	
11	J区埋没谷	〃	〃	17.0	0.5	0.3		完形	
12	N-カー1	〃	〃	<16.3>	0.7	0.7		片側先端欠損	
13	J-カー19	〃	ヒノキ	<15.2>	0.7	0.3		片側欠損	
14	J-エ-19	〃	サワラ	<13.5>	0.5	0.4		〃	
15	N-ク-2	〃	ヒノキ科	<14.6>	0.7	0.4		〃	
16	〃	〃	サワラ	<12.5>	0.6	0.4		〃	
17	J-ク-20	〃	〃	<10.8>	0.7	0.5		片側欠損?	
18	J-オー19	〃	〃	<10.8>	0.6	0.4		片側欠損	

第101表 木製品観察表①

番号	出土位置	種別	樹種	法量(cm)			木取り	遺存状態	備考
				長さ	幅	厚さ			
19	J-キー19	箸	サワラ	<10.4>	0.7	0.7		片側欠損	
20	J-クー20	"	ヒノキ	<9.5>	0.7	0.4		両側欠損	
21	"	"	サワラ	<7.6>	0.8	0.5		片側欠損	
22	J区埋没谷	"	"	<6.3>	0.4	0.4		"	
23	J-クー19	"	"	<6.4>	0.7	0.6		"	
24	J-キー19	"	"	<6.6>	0.6	0.4		"	
25	N-クー2	"	ヒノキ	<9.1>	0.5	0.4		"	
26	J-エー19	"	サワラ	<9.2>	0.7	0.6		"	
27	J-キー19	"	"	<9.8>	0.6	0.6		"	
28	J-クー20	"	"	<8.3>	0.6	0.6		"	
29	"	"	"	<8.6>	0.6	0.4		"	
30	J-カー19	"	"	<7.5>	0.5	0.4		"	
31	J-クー20	"	"	<5.1>	0.6	0.5		"	
32	"	"	"	<3.8>	0.6	0.4		"	
33	"	"	"	<5.7>	0.4	0.4		"	
34	"	"	"	<5.5>	0.7	0.4		両側欠損	
35	J-クー19	"	"	<5.0>	0.7	0.4		"	
36	J-キー19	"	"	<6.6>	0.7	0.4		片側欠損	
37	J-カー19	"	"	<8.1>	0.6	0.4		"	
38	II M77	卒塔婆	"	14.1	7.0	0.4	斜め	ほぼ完形	上部の左右に2カ所の刻み有り。笹塔婆?
39	N-カー1	形代(鳥)?	"	13.2	2.3	1.0	斜め	完形	馬形とも考えられる。
40	J-キー19	形代(刀)?	"	12.5	3.0	0.7	柱目	1/2残存	中央に円形の孔がある
41	J-キー20	斎串?	"	11.4	1.6	0.7	板目	両側欠損	墨書「人」? 形態的には格子部材か。
42	J-オー19	形代(人形)	"	19.8	1.8	1.5		完形	墨痕あり
43	II M77	扇?	ヒノキ	<8.9>	2.1	0.3		欠損	1カ所の孔・黒漆
44	J-クー20	斎串	サワラ	<17.3>	0.8	0.5		片側先端欠損	長方形の面取り。先端が尖る
45	II M77	"	"	<13.5>	1.1	0.9		"	円形に面取り。上部が凹状にカット
46	J-キー19	"	ヒノキ	<14.0>	1.0	0.9		両側欠損	六角形に面取り
47	J区埋没谷	"	サワラ	<12.1>	1.2	1.0		"	六角形に面取り
48	N-キー1	"	"	<13.3>	1.1	0.9		"	五角形に面取り
49	J-キー19	"	"	<5.9>	0.8	0.4		片側欠損	六角形に面取り
50	J-エー19	"	サワラ	<28.4>	径1.5	—	斜め	片側欠損	円形に面取り
51	J-カー19	"	"	<12.1>	1.3	1.3		両側欠損	方形に面取り
52	J区埋没谷	"	"	<16.0>	1.3	1.3		片側欠損	方形に面取り。上部が凹状にカット
53	N-キー1	"	"	<14.4>	1.3	1.1		両側欠損	先端部は片面からのカット
54	J-クー20	"	"	<16.0>	1.2	1.1		片側先端欠損	円形に面取り
55	"	"	"	<11.7>	1.1	1.0		片側欠損	円形に面取り
56	N-カー1	柄?	"	<22.8>	1.4	1.4		両側先端欠損	円形に面取り
57	J-クー20	鳴り鑓矢?	"	4.5	1.7	1.1	斜め	完形	刻線3本。中央に大きな孔
58	"	"	"	4.5	1.4	1.1	斜め	1/2残存	刻線3本。中央に大きな孔
59	II 4号井戸	曲物底板	"	—	径13.5	0.8	柱目	完形	側面に目釘等の痕跡無し
60	N-クー1	"	"	径17.0	<5.8>	0.5	板目	1/4残存	両面に刃物傷あり
61	N-クー2	"	"	径17.0	<3.9>	0.5	板目	1/6残存	両面に刃物傷あり
62	J-キー19	"	"	径13.5	<5.8>	0.5	板目	1/2残存	
63	J-オー18	"	"	<12.5>	<4.5>	0.5	板目	1/3残存	欠損部面丸くすり減っている
64	J-エー18	"	"	<15.8>	<4.5>	1.2	斜め	1/6残存	
65	J-クー20	"	"	<13.3>	<4.5>	0.5	柱目	欠損	使い減りの様な窪みあり
66	J-カー19	"	"	<10.3>	<3.5>	0.7	柱目	1/2残存	
67	II M57	"	"	<7.2>	<1.7>	0.7	柱目	欠損	
68	J-クー20	"	"	<7.8>	<3.4>	0.5	斜め	欠損	丸い部分切っ先状を呈す
69	II M77	へら?	"	<6.8>	<4.8>	0.7	柱目	欠損	
70	II M77	曲物	ヒノキ	<29.0>	<3.2>	0.2	柱目	両側欠損	方形の孔と方形の刻みあり
71	J-キー20	"	サワラ	<21.0>	1.2	0.2			
72	II M77	"	ヒノキ	<8.5>	<1.8>	0.1	柱目	欠損	
73	J-エー19	へら?	サワラ	<11.0>	<3.4>	1.0		片側欠損	三角形に面取り
74	J区埋没谷	下駄	"	<19.0>	<4.0>	1.8	斜め	1/2弱残存	鼻緒間8cm。連筒式下駄
75	J-カー19	蓋つまみ部	スギ	<14.0>	<2.5>	0.9	斜め		2カ所に穿孔
76	J-キー19	蓋つまみ部	サワラ	<11.1>	<2.4>	1.9	柱目	完形?	1カ所に穿孔
77	J-カー19	加工木	"	<13.4>	<4.0>	1.2	柱目	両側欠損	中央に穿孔。焼けている部分あり
78	J区埋没谷	加工木	"	<14.0>	<1.6>	<1.3>		片側欠損	側面に穿孔あり
79	J-キー19	箱底板	"	<8.2>	<4.5>	0.6	斜め	片側欠損	1カ所に穿孔
80	N-カー2	加工木(板材)	"	<10.5>	<4.3>	0.8	柱目		3カ所に穿孔
81	J-エー19	加工木	"	<11.2>	<6.0>	0.3	柱目	片側欠損	1カ所に穿孔
82	II M77	"	"	<6.2>	<2.4>	0.3	板目		1カ所に穿孔。三角の木札?
83	J-キー19	手押木	"	14.5	2.8	2.1		完形	全面加工

第102表 木製品観察表②

番号	出土位置	種別	樹種	法量(cm)			木取り	遺存状態	備考
				長さ	幅	厚さ			
84	N-クー1	滑車	サワラ	12.4	3.3	3.1		完形	全面加工, 曲面は[U]字状に窪み摺れている
85	J-クー20	手押木	〃	11.2	2.8	1.5		完形?	曲面は使い減り状に丸みを持つ
86	N-カー1	灯明白	ヒノキ属	8.8	2.2	1.8		完形	片側面に挟りあり
87	J-クー19	加工木	コナラ属 ツヌギ属	6.7	3.0	1.2	板目	完形	片側面凸状に削り出す
88	II M57	〃	サワラ	7.5	3.2	1.1	斜め	完形	片側面に小さな挟りあり
89	II M77	〃	モミ属	<6.8>	<2.7>	2.2	斜め	完形	面とりの先端焼けている
90	J-クー18	〃	サワラ	18.8	5.8	1.5	板目	完形?	側面丸くカット
91	J-クー19	〃	コナラ属 ツヌギ属	<4.5>	<3.5>	<3.5>	板目?	両側欠損?	焼けている
92	J-クー19	〃	ウコギ属	<8.0>	<2.8>	1.5			先端を[V]字にカット
93	J-クー19	〃	サワラ	<6.2>	<3.8>	2.0	斜め	完形?	先端を[V]字にカット
94	N-クー1	〃	スギ	<2.9>	3.7	<1.8>	板目	完形?	
95	J区埋没谷	加工木(板材)	サワラ	<15.5>	8.0	0.4	柁目	片側欠損	
96	J-クー19	加工木(板材)	クリ	<8.5>	<6.8>	0.7	板目		片側刃物により斜めにカット
97	J-クー19	折敷	サワラ	<24.5>	4.5	0.3	柁目	片側欠損	
98	J-クー18	加工木	〃	<17.0>	2.5	0.5	斜め	〃	
99	J-クー20	格子子	〃	<20.8>	2.1	0.3	柁目		片側使い減りの様に丸くなる
100	II M77	曲げ物	〃	<12.1>	5.0	0.3	柁目	両側欠損	
101	N-クー1	加工木	〃	<11.7>	4.0	0.2	柁目	〃	
102	N-クー1	加工木	〃	<15.3>	2.8	0.3	斜め	片側欠損	片側丸くカット
103	J-クー18	〃	〃	<12.8>	2.8	0.7	斜め		一部に刃物傷あり
104	J-クー19	〃	〃	<7.9>	2.5	0.5	板目	片側欠損	片側先端[V]字状にカット
105	II M77	経木折敷	ヒノキ	<6.5>	3.0	0.2	柁目		
106	J-クー20	加工木	サワラ	<6.2>	2.6	0.3	柁目	片側欠損	片側先端[V]字状にカット
107	J-クー19	〃	トウヒ属	<5.2>	2.9	0.2	斜め	両側欠損	
108	J-クー19	格子子	サワラ	<12.8>	2.3	0.3	柁目	〃	
109	J-クー20	加工木	〃	<12.5>	2.3	0.3	柁目	片側欠損	
110	N-クー1	〃	〃	<15.2>	2.7	0.5	柁目	両側欠損	一部焼けている
111	J-クー18	格子子	〃	<13.2>	2.2	0.3	柁目	〃	
112	J-クー19	加工木	〃	<12.2>	2.8	0.3	柁目	片側欠損	片側丸く使い減り
113	J-クー20	曲げ物底板	〃	<8.3>	2.1	0.3	柁目		両側丸く使い減り
114	〃	加工木	〃	<6.0>	2.4	0.3	板目		
115	J-クー19	〃	〃	<5.3>	0.8	0.7			片側楔状に[V]字にカット
116	J区埋没谷	〃	〃	<7.4>	2.3	0.3			両側丸くカット, 「木札」?
117	J-クー20	〃	〃	<3.6>	1.3	0.2	柁目	両側欠損	
118	〃	〃	〃	<3.7>	1.6	0.1	柁目	〃	片側丸く使い減り
119	J-クー19	格子子	〃	<10.9>	1.9	0.2	柁目		
120	II M77	形代?	〃	<7.3>	1.8	0.3	柁目	片側欠損	
121	J-クー19	加工木	〃	<8.5>	1.6	0.4	板目	両側欠損	側面中央に挟り
122	J-クー20	〃	〃	<20.5>	3.5	1.2	柁目		一部焼けている
123	J-クー20	〃	〃	<18.5>	2.8	3.1	板目		先端面取り加工で丸くする
124	J-クー19	〃	〃	<14.0>	2.5	1.8	板目	片側欠損	先端が切っ先状になる
125	J-クー19	井戸棹?	〃	<12.5>	4.9	2.5	板目		
126	N-クー1	加工木	〃	<12.8>	2.6	1.8	斜め	片側欠損	中程に斜めのカット面, 鋸傷?
127	J-クー18	〃	〃	<15.0>	2.7	1.3	柁目		
128	J-クー20	〃	〃	<24.5>	4.8	1.4	斜め	片側欠損	先端[V]字状カット
129	J-クー19	〃	〃	<13.4>	2.8	0.8	板目	〃	片側先端[V]字状カット
130	J-クー20	〃	〃	<12.0>	3.8	1.3	板目	両側欠損	
131	J-クー19	〃	〃	<29.2>	1.3	1.1		片側欠損	
132	J-クー20	〃	〃	<22.5>	1.5	1.1		〃	
133	J-クー19	〃	〃	<18.8>	1.2	1.0	柁目	〃	
134	II 4号井戸	〃	ヒノキ	18.3	1.9	1.3	柁目		一部焼けている
135	N-クー1	〃	サワラ	<17.5>	1.5	0.8	柁目	片側欠損	
136	J-クー19	〃	〃	<14.0>	1.5	0.8	板目	〃	一部焼けている
137	J-クー19	不明	広葉樹	<15.5>	径3.0	—	丸木	両側欠損	欠損焼けて炭化
138	J-クー19	加工木	サワラ	<11.5>	1.1	1.1	斜め	片側欠損	
139	〃	〃	〃	<12.0>	1.0	1.0		〃	
140	N-クー2	〃	〃	<6.7>	0.8	0.7		〃	
141	〃	〃	スギ	<3.5>	0.8	0.2		両側欠損	
142	J-クー20	不明	ヤナギ属	<9.5>	径3.0	—	丸木	片側欠損	側面に1カ所穿孔
143	J-クー20	〃	ウコギ属	<14.7>	径2.4	—	丸木		
144	J-クー20	杵	コナラ属 ツヌギ属	<30.5>	径6.5	—	丸木	両側欠損	柄の部分手ずれの様なすり減り
145	II P4637	柱	サワラ	<24.0>	<10.0>	5.0	板目	片側欠損	
146	J-クー19	杭	〃	<21.2>	<4.8>	<3.8>	板目	〃	先端2面[V]字状にカット
147	J-クー18	〃	ウツギ属	<10.5>	径2.8	—	丸木	〃	
148	J-クー19	〃	コナラ属 ツヌギ属	<9.5>	径2.5	—	丸木	〃	先端2面[V]字状にカット

第103表 木製品観察表③

番号	出土位置	種別	樹種	法量(cm)			木取り 板目	遺存状態	備考
				長さ	幅	厚さ			
149	N-クー-2	杭	サワラ	<15.5>	2.3	1.5	板目		
150	J区埋没谷	"	"	<10.9>	1.9	1.5			先端を3面に削り出し
151	J-カー18	"	クリ	<27.4>	2.9	2.7		片側欠損	方形
152	"	"	"	<26.1>	3.2	1.8			方形
153	"	"	"	<24.6>	3.8	1.7		両側欠損	長方形
154	"	"	"	<25.2>	3.2	2.3		片側欠損	長方形
155	"	"	"	<18.8>	2.1	1.8		"	方形
156	J-キー19	"	"	<19.5>	2.1	1.8		"	方形
157	J-キー18	"	"	<18.8>	2.6	1.8		両側欠損	方形
158	"	"	"	<21.8>	2.3	2.0		"	方形
159	J-カー18	"	"	<26.7>	3.8	2.0		片側欠損	長方形
160	J-クー19	"	"	<27.3>	2.9	1.7		両側欠損	長方形
161	J-キー18	"	"	<23.7>	2.7	2.3		片側欠損	方形
162	J-キー19	"	"	<23.9>	2.9	2.0		"	長方形
163	J-カー18	"	"	<24.1>	5.8	4.1		両側欠損	長方形
164	"	"	"	<19.0>	3.1	1.5		"	
165	"	"	"	<19.4>	2.3	1.4		両側欠損	
166	"	"	"	<16.2>	5.2	2.5		"	長方形
167	J-エー18	"	サワラ	<18.6>	3.4	2.7		両側欠損	円形
168	J-クー20	"	クリ	<12.8>	5.8	2.5		片側欠損	長方形
169	J-カー18	"	"	<17.0>	5.0	1.9		"	長方形
170	J-キー19	"	"	<20.3>	2.8	2.5		両側欠損	方形
171	"	"	"	<14.7>	3.0	2.7		片側欠損	方形
172	"	"	"	<12.5>	4.5	2.5		"	長方形
173	J-クー19	"	"	<13.5>	3.5	2.7		"	方形
174	J-カー18	"	"	<13.2>	4.8	1.5		"	長方形
175	J-キー19	"	"	<13.2>	3.3	2.5		"	方形
176	"	"	"	<11.4>	4.7	2.8		"	長方形
177	J-カー18	"	"	<11.9>	3.5	2.1		片側欠損	長方形
178	J-クー19	"	"	<9.8>	3.4	3.5		"	方形
179	J-カー18	"	"	<11.1>	4.3	2.4		両側欠損	長方形
180	J-クー19	"	"	<10.5>	4.8	2.7		片側欠損	方形
181	J-キー19	"	"	<7.8>	3.8	1.5		"	長方形
182	J-クー19	"	"	<8.3>	4.0	1.7		"	長方形
183	J-クー20	"	"	<6.8>	2.8	1.4		"	長方形
184	一括	"	—	<9.5>	3.4	2.7		"	方形
185	J-クー19	"	クリ	<10.2>	4.1	2.3		"	長方形
186	J-クー20	"	"	<7.5>	4.1	3.3		両側欠損	方形
187	"	"	クルミ属	<5.3>	4.0	3.5		片側欠損	円形
188	J-カー18	"	クリ	<6.3>	1.4	0.8		"	長方形
189	J-キー19	"	"	<8.9>	2.3	1.5		"	方形
190	J-クー20	"	"	<8.3>	2.6	1.5		両側欠損	長方形
191	"	"	"	<9.8>	1.7	1.2		片側欠損	長方形
192	J-エー19	"	コナラ属 クヌギ属	<11.3>	3.1	1.7		"	長方形
193	J-カー18	"	コナラ属	<3.3>	1.7	1.1		"	長方形
194	J-クー19	"	クリ	<4.1>	2.0	0.8		両側欠損	長方形
195	一括	"	—	<8.4>	1.7	1.2		"	長方形
196	J-キー19	"	クリ	<6.8>	2.0	1.2		"	長方形
197	"	"	"	<10.2>	1.8	1.2		"	長方形
198	J-エー18	"	コナラ属 クヌギ属	<6.2>	2.0	0.9		片側欠損	円形
199	II D86No. 2	井戸材	ヒノキ科	<18.5>	10.2	6.2		"	樹皮あり、凹状に加工
200	II D86No. 1	井戸材	"	<15.3>	10.4	5.3		"	樹皮あり、凹状に加工
201	II D86No. 3	井戸材	"	41.3	5.3	2.0		完形	
202	II 集石遺構	建築部材	サワラ	28.8	5.6	1.8	斜め	完形?	中央に凹状の切り込み
203	J-カー18	杭?	コナラ属 クヌギ属	26.8	径2.3	—	丸木芯 持ち		
204	J-クー19	不明	クリ	11.7	1.2	0.6	丸木芯 持ち		
205	J-キー19	"	"	9.3	0.8	0.9	丸木芯 持ち		
206	J-オー18	箸	ヒノキ属	<9.0>	0.6	0.5		両側欠損	
207	"	"	広葉樹	<6.0>	0.5	0.4		片側欠損	
208	"	"	ヒノキ属	<7.3>	0.7	0.5		両側欠損	
209	"	"	サワラ	<7.0>	0.7	0.4		"	
210	J-カー19	"	ヒノキ属	<10.5>	0.6	0.5		"	
211	"	"	サワラ	<8.6>	0.7	0.4		"	
212	"	"	"	<9.4>	0.7	0.6		"	
213	"	"	"	<9.0>	0.7	0.4		"	

第104表 木製品観察表④

番号	出土位置	種別	樹種	法量(cm)			木取り	遺存状態	備考
				長さ	幅	厚さ			
214	J-カー19	箸	サワラ	<8.0>	0.7	0.5		両側欠損	
215	"	"	"	<7.2>	0.8	0.4		"	
216	"	"	"	<6.8>	0.6	0.4		"	
217	"	"	"	<7.0>	0.5	0.4		"	
218	"	"	"	<6.0>	0.7	0.3		"	
219	"	"	"	<6.0>	0.6	0.5		"	
220	"	"	"	<4.2>	0.6	0.4		"	
221	"	"	"	<6.8>	0.4	0.2		"	
222	"	"	"	<5.7>	0.5	0.3		"	
223	"	"	"	<5.2>	0.4	0.3		"	
224	"	"	"	<5.0>	0.4	0.3		"	
225	"	"	"	<5.3>	0.6	0.4		"	
226	J-キー19	"	ヒノキ	<10.1>	0.6	0.5		"	
227	"	"	サワラ	<9.3>	0.7	0.4		"	
228	"	"	"	<6.5>	0.6	0.4		"	
229	"	"	"	<6.0>	0.4	0.3		"	
230	J-キー20	"	"	<5.8>	0.6	0.4		"	
231	J-クー19	"	"	<8.8>	0.7	0.4		"	
232	"	"	"	<9.0>	0.4	0.3		"	
233	"	"	"	<5.5>	0.4	0.3		"	
234	"	"	"	<3.1>	0.6	0.2		"	
235	J-クー20	"	"	<7.0>	0.7	0.3		"	
236	"	"	"	<5.9>	0.7	0.3		"	
237	"	"	"	<10.0>	0.4	0.4		"	
238	"	"	"	<9.3>	0.6	0.5		片側欠損	
239	"	"	"	<7.2>	0.6	0.4		両側欠損	
240	"	"	ヒノキ	<6.9>	0.4	0.4		"	
241	"	"	サワラ	<7.0>	0.6	0.4		"	
242	"	"	"	<5.7>	0.7	0.5		"	
243	"	"	"	<5.6>	0.6	0.4		"	
244	"	"	ヒノキ	<5.6>	0.4	0.3		"	
245	"	"	スギ	<5.0>	0.7	0.3		"	
246	"	"	ヒノキ属	<5.4>	0.4	0.4		"	
247	"	"	ヒノキ	<5.1>	0.6	0.4		"	
248	"	"	"	<5.0>	0.6	0.3		"	
249	"	"	ヒノキ属	<5.2>	0.6	0.3		"	
250	"	"	サワラ	<4.5>	0.7	0.3		"	
251	"	"	ヒノキ科	<4.4>	0.7	0.3		"	
252	"	"	ヒノキ	<4.2>	0.4	0.4		"	
253	"	"	サワラ	<4.2>	0.4	0.4		"	
254	"	"	"	<3.7>	0.6	0.4		"	
255	"	"	針葉樹	<4.4>	0.6	0.1		"	
256	"	"	サワラ	<4.0>	0.4	0.3		"	
257	"	"	"	<3.3>	0.6	0.3		"	
258	J-クー20	"	サワラ	<3.5>	0.3	0.2		両側欠損	
259	"	"	"	<3.2>	0.4	0.2		"	
260	N-クー2	"	"	<17.8>	0.7	0.7		片側欠損	
261	"	"	"	<6.5>	0.7	0.5		両側欠損	
262	J区埋没谷	"	"	<6.5>	0.6	0.4		"	
263	II M57	加工木	ヨナラ属 ヨナラ属	<11.4>	<3.8>	<2.5>			
264	II M77	加工木	不明	<7.8>	<1.1>	<0.9>			
265	J-エー18	加工木	クリ	<8.0>	<9.9>	<2.5>			
266	J-カー19	不明	サワラ	<21.0>	<7.3>	0.8			
267	"	加工木	"	<15.0>	<6.0>	2.2			
268	J-キー19	不明	クリ	<8.8>	<2.7>	<1.8>			
269	J-クー19	"	サワラ	<12.2>	3.0	1.1			
270	J-クー20	加工木	ヨナラ属 ヨナラ属	<13.5>	2.5	2.0			
271	N-クー2	"	ヨナラ属 クヌギ	<8.0>	6.0	0.1			
272	N-クー2	"	サワラ	<22.5>	<2.7>	<1.8>			
273	J区埋没谷	"	"	<18.0>	9.3	2.0			

第105表 木製品観察表⑤

## 引用・参考文献

### 陶磁器類

- 市川 隆之 1998『金井城跡』「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1」—軽井沢内・御代田町内・佐久市内・  
浅科村内—(財)長野県埋蔵文化財センター
- 小山 岳夫 1991『金井城跡』「佐久市埋蔵文化財調査報告書第1集」佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター
- 小山 岳夫 1986「第2節中世の遺物1・2 土師質土器、内耳土器」『大井城跡(黒岩城跡)』佐久市教育委員会
- 小山 岳夫 1987『下川原・光明寺』「佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第5集」  
佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター
- 森泉かよ子 1999『観音堂遺跡』「佐久市埋蔵文化財調査報告書第70集」佐久市教育委員会
- 森泉かよ子 1993「第9章 第2節 中世遺構からの出土品」『佐久市志 歴史編(二)中世』
- 服部 敬史 1997・1998「内耳土鍋の研究上・下」『土曜考古21・22』土曜考古研究会
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

### 石製品

- 若林 卓 1999『観音平経塚』「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21」—上田市内・坂城町内—  
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 磯部 淳一 1992「群馬県における五輪塔の編年」『高崎市史研究』第2号 高崎市史編さん専門委員
- 佐々木宗昭 1986「第2節中世の遺物 5石臼」『大井城跡(黒岩城跡)』佐久市教育委員会

### 古銭

- 瀧澤 武雄・西脇 康 編 『日本史小百科 貨幣』東京堂出版
- 1996 『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会
- 嶋谷 和彦 1997 「中世出土銭貨研究の現状 —国内模倣銭を中心に—」  
帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集

### 木製品

- 1997『石川条里遺跡』「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15」—長野市内その3—  
(財)長野県埋蔵文化財センター
- 1993『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所
- 1983『草戸千軒町遺跡』—第32次発掘調査概要— 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
- 大三輪達彦・齋木秀雄他 1993『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
- 齋木 秀雄 1997「中世の木製品・漆製品」帝京大学山梨文化財研究所研究報告第8集
- 斉藤 幸恵 1995「越後の木器 —漆器を中心に—」『中世北陸の木製容器』北陸中世土器研究会



## 第V章 考 察

今回の調査では注目或いは問題提示となる中世遺構・遺物が検出された。ここでは本文中で個々に扱った遺構と遺物についての関連を述べながらそれら問題を考え若干の考察としたい。

### (1)中世墳墓群

今回の発掘調査では周辺地域ではあまり調査類例の無い、中世の墳墓群が榛名平遺跡より発見された。墳墓は65基に及びその形態より「火葬墓」「集石土壙墓」「土壙墓」の3つのタイプに分かれた。よってここではこれら3タイプの墳墓の分布や各タイプの被葬者・副葬品等の関係をまとめ、当遺跡の墳墓群の特徴や造墓活動期を探ってみたい。

#### 各タイプの分布

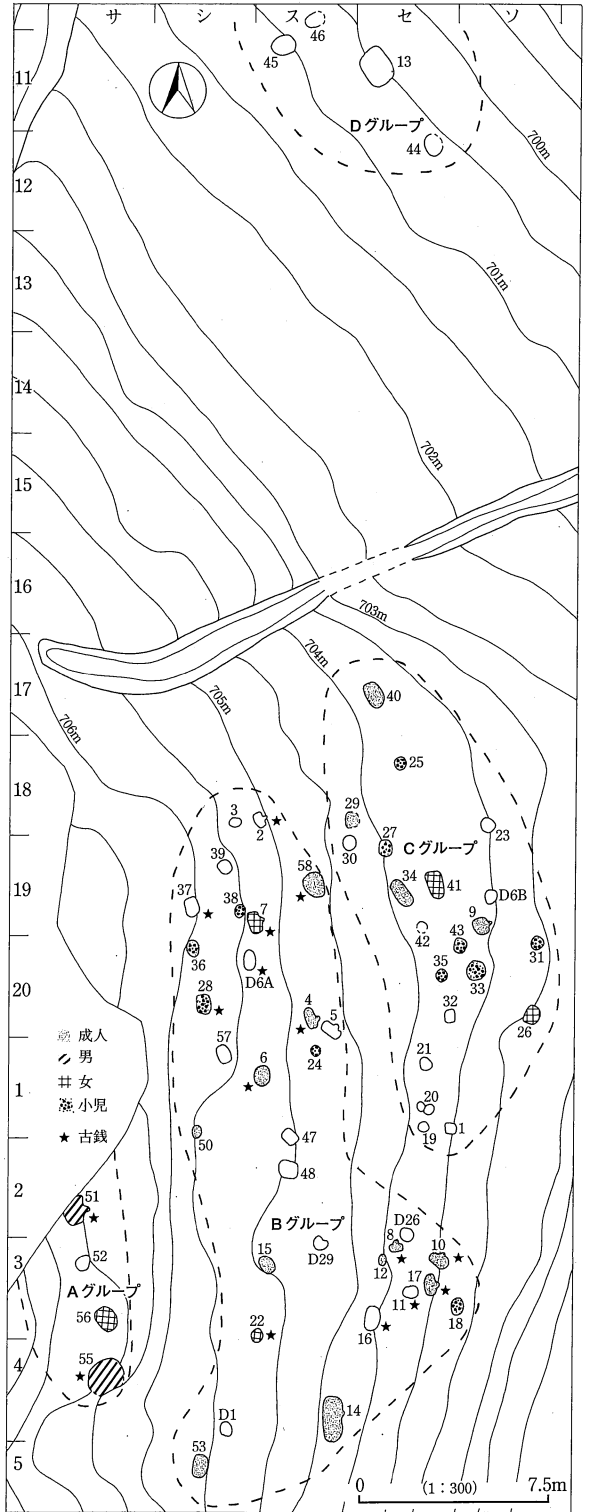
分布は墳墓群が集中的に検出された調査区上段でみると各タイプともに均等に分布している様に見える。ただ微細に見ると標高704~705m付近に墳墓群の分布が薄い部分がある。これを境に斜面谷側には火葬墓があり、その斜面上側に集石土壙墓・土壙墓が広がるという特徴はある。また、これら3タイプが数基ずつ集まってグループを形成している様子も伺える。以後の説明の為仮の名称をここで付けておきたい。立地より海拔707m付近に展開する墳墓群を「Aグループ」、先ほど述べた海拔704~705m付近で東西に分かれる両グループの上側を「Bグループ」、下側を「Cグループ」、その北側を「Dグループ」としておきたい。なお、Bグループは南北二つに細分できると思われる。

#### 各タイプと被葬者

それぞれのタイプと被葬者の関係は、まず火葬墓が15基中で成人等の年齢性別が判明したものが9基あった。内訳は成人9基(男1・女1・不明7)であり子供はいなかった。次に集石土壙墓は26基中14基が判明し、内訳は成人7基(男1・女2・不明4)、子供7基であった。最後に土壙墓は24基中12基が判明し、内訳は成人7基(女3・不明4)、子供5基であった。いずれの墳墓も被葬者の性別年齢不明が多いが、総数の半数近くが判明しているため傾向は指摘できるのではないだろうか。その結果、当遺跡においては火葬墓への子供の埋葬が無いか、もしくは極めて少ない。集石土壙墓の被葬者は数値的には子供が多いが、子供の埋葬土坑をみると小型で円形のピット状のものが多く、石も周りに並べるといよりも蓋状に詰めるものが多いことから集石土壙墓内でのタイプ差も今後検討すべきであろう。なお、集石土壙墓と土壙墓にはそれぞれ火葬骨が検出された墳墓があり、火葬後にそれら土壙墓に収骨埋葬している例として確認できた。よって火葬墓が全て墓として認定しうるのか問題がある。今後は火葬墓と火葬場の見分ける視点が必要であろう。なお火葬骨の埋葬された土壙墓からは溶けた古銭が検出されないことから、火葬段階に供えられていた古銭は収骨時に拾われなかったと推定できる。

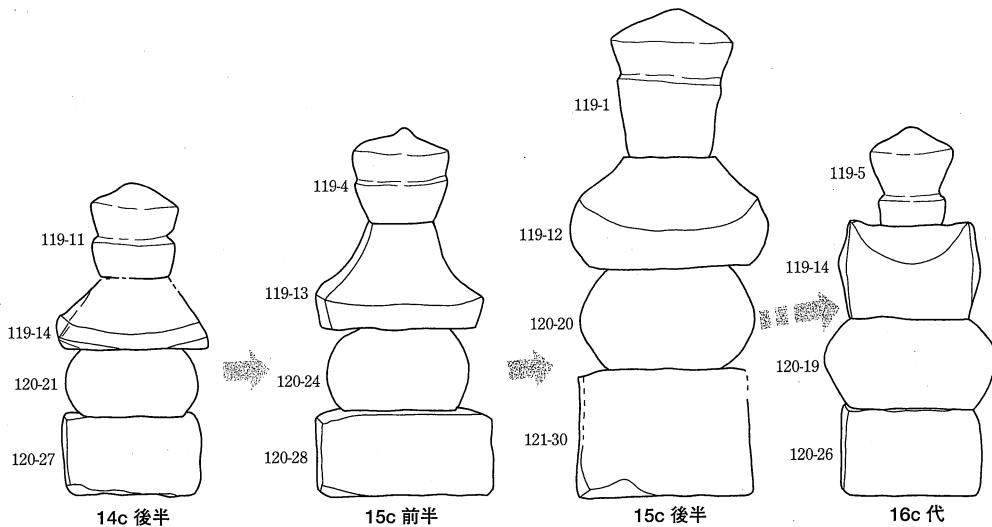
### 各タイプと副葬品

榛名平遺跡で発見された中世墳墓群からは蔵骨器が発見されなかった。蔵骨器としては有機質の木や布が使われていたと考えられる。土器・陶磁器類も唯一ⅢFD13より瀬戸・美濃の茶入れ(15~16世紀)が出土したのみでカワラケ等も皆無であった。このことが当遺跡の中世墳墓の1つの特徴と言えよう。副葬品の中で安定的に出土したのは古銭である。各タイプと古銭出土の関係は、火葬墓が15基中8基(53%)から出土、集石土壙墓が26基中3基(12%)、土壙墓が24基中4基(16%)である。この結果より火葬墓は古銭埋納が多く、他の2タイプについては1~2割弱程しか埋納されず火葬墓に比べて少ない事が解る。このことは何に起因するのであろうか。予想できる事としては各タイプに埋葬される者の階層性或いは貧富の表現とも考えられるが、古銭出土墳墓の分布を考え合わせると事は単純ではなさそうである。分布の状態を第157図に示してある。これによると明らかに分布の偏りがある。「各タイプの分布」の項でも述べたAグループとBグループには古銭が副葬されており、CとDグループには一基も古銭が埋納されていない。また、副葬品ではないが墳墓群と密接な関係がある五輪塔をもう一つの要素として加えてみると、Aグループ周辺には凝灰岩を使用し分類で古い要素を持つⅡ類の空風輪や火輪が集中して出土しており第158図に示した14世紀後半代の五輪塔が建てられていた可能性が非常に高い。次にBグループにはⅢD26号土坑があり、土坑内から15世紀代と考えられるⅣ・Ⅴ類の火輪やⅢ・Ⅰ類の水輪が出土している。これらは



第157図 中世墳墓群位置図

投げ込まれたような状態の出土であったが、周辺には第158図に示した15世紀代の五輪塔が建てられていた可能性が高い。最後にCグループのⅢFD23号墓には空風輪は推定であるが第158図に示した16世紀代とした五輪塔が出土している。これら五輪塔の造営時期をもう一つの要素とすると先の事実把握も含めて以下のような仮説が成り立つ。すなわち「各グループは造墓活動の時間差としてとらえられ、海拔の高い所から墓が造られ始め次第に低い場所に広がり、15世紀代以降は2つのグループに分かれ造墓活動を行った可能性がある。また、榛名平遺跡における中世の墳墓群には陶磁器製の蔵骨器は使われず副葬は古銭のみであり、尚かつ古銭の副葬も16世紀代に入ると行われなくなる。」というものである。ただ、本仮説は模鑄銭の問題を考慮しておらず、Bグループ内の古銭に模鑄銭が含まれていれば16世紀代の可能性が高くなり仮説は成り立たない。よってグループ毎の「階層差」としての可能性も十分にありえる。今後五輪塔・古銭の研究も含め多角的な検討を経れば新たな事実が判明すると思われる。ただ、いずれにしても本遺跡の中世墳墓群は14世紀後半に造墓活動を開始し15世紀に数を増し16世紀と引き継がれるが、「寛永通寶」等の副葬がない事から16世紀末までには造墓活動を停止したと考えられる。なお、当墳墓群の被葬者像については「中世建物址群」の項でまとめて総括したい。



第158図 榛名平遺跡出土五輪塔組合わせ想定図

## (2) 竪穴状遺構と中世建物址群

調査範囲の内、E区とI区からはまとめて土坑や竪穴状遺構・建物址群を検出した。ここではこれら遺構や周辺部からの出土遺物から建物址群の所産時期を推定し、尚かつ竪穴状遺構や建物址の性格について考えてみたい。

### 竪穴状遺構・建物址群と出土遺物

本遺跡からは竪穴状遺構が37基検出された。そのうち出土遺物がありほぼ時期の確定できるも

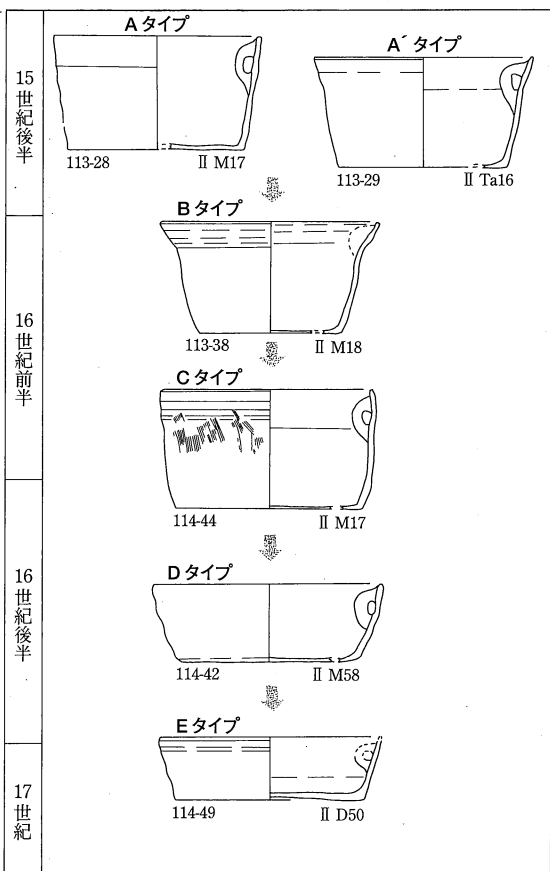
のとしては非常に少なく II Ta16号が土鍋や陶磁器片から15世紀後半と考えられ、また II Ta8号が土鍋から15世紀後半と考えられるが18世紀代の陶磁器類も共に出土しており不確実性が高い。以上の様に竪穴状遺構は共伴する遺物が少なくいずれも時期決定の要素を欠く。また、建物址群についても同じで、各ピットから出土している遺物はいずれも単一であり時期の決定性を欠く。唯一調査時に竪穴状遺構よりピット群のほうが新しいという新旧関係が把握されているのみである。ではこれら遺構についての所産時期についてどのようにとらえたら良いであろうか。まず第1の手がかりとして遺跡全体から出土している陶磁器類から検討してみたい。第160図に示したものは当遺跡出土の陶磁器類の時期別の分布図である。遺物は時期により四段階に区分した。すなわち船載陶磁器類が主体の11世紀末～13世紀代(青)、瀬戸・美濃や古瀬戸が加わる14世紀～16世紀代(緑)、あとは17世紀代(赤)と18世紀以降(橙)である。これら遺物の分布は明らかな偏りが見受けられる。まず、船載陶磁器類はI区の中世遺構群とJ区埋没谷からまとも出土している。次に14～16世紀の遺物はEとI区の中世遺構群と調査区上段の墳墓群に分布の中心がある。次に17

世紀の遺物ははっきりとした分布の傾向は掴めないがやはりEとI区から多く出土している。最後に18世紀以降の遺物については発掘調査範囲全体に広がっていることが分かる。

次に本文中でも若干触れたが土鍋から考えてみたい。本遺跡出土の土鍋については本文中で単一遺構内での同一形態の抽出や形態の変化から、他地域の編年観の援用であるがおおよそ第159図に示したような変遷を想定し、15世紀後半から17世紀初頭の土鍋と位置づけた。これら土鍋はその多くがE区やI区の溝状遺構から出土し、特に II M 17号溝状遺構からは全タイプの土鍋が出土し遺溝としての継続時間の長さを感じさせた。

以上の結果からE区やI区に広がる遺構群にすべての遺物が共通する時代は15世紀～17世紀初頭という事となる。このことから竪穴状遺構より新しいピット群で構成された10の建物址群は15世紀代～17世紀初頭の所産時期が考えられる。次に竪穴状遺構はそれより前の14世紀代を想定しうるか。

ただ竪穴状遺構も建物址群と有機的に結びつきそ



第159図 榛名平遺跡出土土鍋編年試案図



第160図 榛名平遺跡陶磁器出土位置図 (1:2,000)

うなものもあり、概要でふれた「壁際に少ピットを穿ち重複のすくないタイプ」の竪穴状遺構が13～14世紀代にあたると考える。なお、舶載陶磁器がJ区埋没谷から集中的に出土する状況は何らかの意味があると考えますが現段階では不明である。まとめると13世紀代は竪穴状遺構を中心とする中世の遺構群が、続く15世紀代からは溝に囲まれた建物址群に発展しE区やI区を中心に造られたと出土遺物の上からは考えられる。

#### 建物址群の性格

本項では推定復元により提示した10の建物址群の性格について考えてみたい。まず一見して当建物址群がⅡM1・26号溝状遺構を挟んで南北に分かれることが解る。そしてそれぞれに大小の溝状遺構に囲まれた空間に間隔をおいて掘立柱建物址を配している。この二つのエリアのE区側を「北側屋敷地」、I区側を「南側屋敷地」と仮称したい。まず、南側屋敷地から特徴を見ていきたい。南側屋敷地は4つの掘立柱建物址からなる。そのうち最も規模が大きいのは2号建物址群としたもので山側斜面に軒下の排水溝的な「コ」の字状の溝を付帯施設として持っている。4号建物址群は総柱で周辺部に庇か縁側的な遺構を持つお堂的な形態を示す。また、屋敷地の北側には井戸的な性格の遺構と考えられるⅡD119号土坑がある。次に北側屋敷地を見てみたい。北側屋敷地は3つの建物址群からなり、そのうち規模の大きなものは5号建物址群がある。また南側と同じく屋敷地南側には5号建物址群に接するように井戸址的な遺構のⅡD3号土坑がある。これらの状況からこの二つの屋敷地の建物址群は先に示した掘立柱建物址の時期(15～17世紀初頭)の間の一時期の状況を示していると考えられる。なお、本文でも触れたが検出されたピットは膨大な数であり、今回示した建物址群は1つの可能性として提示したものである。約200年間の継続期間を推定すれば立て替えも当然のごとく行われたであろうし、ピットの組み合わせも他の可能性があることを否定するものではない。

以上、建物址群の性格を溝に囲まれた空間に間隔を置いて配置されていること、井戸に伴うこと等の理由から「屋敷地」内の建物址として把握し、その検出位置より南北に二つの屋敷地が併存していたと推定する。では、二つの屋敷地が併存成立していたのはいつ頃であろうか。1つの可能性としてはこの建物址群から南西側台地の上に立地する「中世墳墓群」が1つの糸口となるのではないだろうか。前項でも述べたが墳墓群は15世紀代に二つの墓域に分かれ始め、16世紀代には南北二つのエリアに墓域が完全に分かれる。確かにこの墳墓群の被葬者と建物址群の造営者を直接結びつける考古的資料はない。ただ墳墓群の造墓と建物址群の造営された時期がそれぞれ非常に近似することからみれば、建物址群の造営者あるいは生活者が墳墓群の被葬者と考えるのが妥当ではないだろうか。とすれば、二つの屋敷地が確立するのは墓域が完全に分かれる16世紀代と考えてもあながち的はずれではないように思う。

### (3)まとめ

#### 屋敷地と墳墓群の造営者像

前項までに考察した通り、今回調査された建物址群や墳墓群を造営した人々はどのような人々であろうか。推定の域を出ないが当遺跡検出遺構や出土遺物の特徴をもとに遺跡の立地や当遺跡周辺の歴史的環境も加味し考察を加え最後のまとめとしたい。なお、本文をまとめるにあたり鎌倉考古学研究所 齋木氏には示唆に富んだご教示を多数頂いた。記して感謝申し上げます。

#### 遺 構

- ①掘立柱建物址 溝に囲まれた大型の掘立柱建物址が建物址群を構成する。南北ふたつの「屋敷地」を形成する時期がある。
- ②竪穴状遺構 幾つかのタイプに分かれるが、総じて小形のもののおおい。
- ③墳 墓 群 五輪塔を伴う墳墓群が造営されるが、蔵骨器は有機質の物を使用し陶器類を使用しない。副葬品は古銭のみである。男性・女性・小児の別を問わず1つの墓域に埋葬しているが、埋葬形態は三種類に分かれる。築造は五輪塔の時代観から14世紀後半から始まり15～16世紀代にピークを迎える。造墓の終了は「寛永通寶」等の埋納がないことから16世紀末までには停止していると考えられる。また、墓坑の重複がないことから継続的な供養が考えられる。
- ④溝 状 遺 構 溝底形態はU字形で、深さはいずれも浅く「堀」としての機能というよりは「区画」を目的としている溝と考えられる。

#### 遺 物

- ①陶 磁 器 類 カワラケが少なく土鍋が多い。カワラケは4つのタイプに分類でき、各タイプの所産時期は13～16世紀代の範疇に納まると考えられる。土鍋についてはその形態より15世紀後半～17世紀初頭の時期を想定できる。舶載・国産陶磁器類はいずれも碗・皿類が多く、至高品的な要素の強い壺や瓶子類・水注類といった器種が少ない。時期別の出土数は13～14世紀代の陶磁器類が多く、15～16世紀代になると少なくなる。
- ②石 製 品 白・茶白・石播鉢・搗き臼ともに出土がおおい。ただ、いずれも欠損しているものが殆どで、中には故意的な打ち欠きを予想させるものもあった。
- ③木 製 品 製品として確認されたものは椀や箸・折敷・下駄・形代などであり文字資料や将棋の駒・櫛といったものは発見されなかった。これら木製品は漆椀がその形態より13～14世紀代の所産であることから、その他のものもほぼ同時期の所産と推定した。



## 遺跡の立地

- ①蓼科山麓からのびる台地先端に立地し、前面の沖積地に広がる水田地帯を見下ろせる。
- ②「杓沢の谷」から流れ出る宮川が水田地帯に注ぎ込む水口にあたり、所謂「用水管理権」を行使するには都合の良い場所である。
- ③遺跡内に湧水地点があり「水源祭祀」の対象となりやすい場所である。
- ④遺跡周辺には「坪の内」「御所村」等の小字が残る。

## 歴史的・文獻的環境

- ①平安末期、佐久の武士団は木曾義仲の挙兵に参画するものが多かった。その中の一人、石突次郎は本遺跡の北西方向の石附・平井・五本木地籍あたりに本拠地をおいた在地豪族である。しかし石突氏は治承五年(1181)の「横田川原の戦い」に名前が見える以後は詳細不明となる。ただ地元には「横田川原の戦い」で石突次郎が戦死しその息子が持ち帰ったという品々が保存され、石突氏滅亡後、その部下たちは杓沢や糠尾等に移り住んだという伝承がある。
- ②吾妻鏡の文治二年(1186)二月の条で「院御領佐久伴野庄、八条院御領大井庄」と記される。この「伴野荘」は佐久市南部の片貝川下流域に成立した荘園で、現在の前山・桜井・岸野・野沢等の範囲にあたると考えられている。当遺跡が所在する杓沢は岸野の懸沢郷の一部に含まれる。
- ③吾妻鏡の文治二年(1186)十月の条に小笠原二郎長清が信濃国伴野荘の地頭と記載されている。小笠原氏が実際に伴野荘に居住したのはその子時長か孫の時直の時と考えられ、時直の名が吾妻鏡に現れるのは宝治二年(1248)の由比ヶ浜百番笠懸に射手として登場する。
- ④弘安八年(1285)の霜月騒動により小笠原(伴野)氏没落。
- ⑤元徳二年(1330)に花園上皇は佐久郡伴野荘を京都の大徳寺に寄進。その後鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇が大徳寺に伴野荘の地頭職を寄進する。
- ⑥大徳寺文書「伴野庄内申子細所々事」建武元年(1334)頃の項に「杓沢郷内杓沢在家二字同田畑、杓沢地頭小笠原彦六(孫二郎)鑑妨事……出作して不弁年貢由事」の記載。
- ⑦永徳三年(1386)に小笠原彦六の子長基がその子長秀に所領を譲る書状の中に「壱所信濃国杓沢郷比丘尼浄仙一期之後可知行之」の一項がある。
- ⑧応永七年(1400)の大塔合戦を境に国人層の成長が益々激しくなり、15世紀前半には大井氏の隆盛となる。また、伴野氏と大井氏の抗争が起きる。
- ⑨天文九年(1540)武田信虎佐久郡に侵入し数十城を攻め破り前山城に在陣する。以後武田氏滅亡まで佐久一円は武田氏の支配となる。
- ⑩江戸幕府が開かれた後、慶長十五年(1610)年頃をピークに佐久郡内に大規模な逃散発生、根際も一時亡村状態と伝わる。



これら調査結果から考えると、当遺跡で検出された建物址群や墳墓群は13世紀代に伴野荘内の在地に成長した「土豪」層と呼ばれる階層の人々が造営したものと考えられる。遺跡の立地から考えてこの「土豪」は宮川の水利権を掌握し、宮川からの取水により耕作する水田を所領範囲としていた事が推定される。そして、この「土豪」は13～14世紀代に鎌倉や京都の都市文化であった「はれの器」である青白磁器を持ち、形代を使った祭祀を行い、且つ又、14世紀後半には五輪塔を伴う火葬墓を造営する事ができた階層の人々と考えられる。ただ、陶磁器類は盤や瓶といった至高品がなく、木製品に関しても装身具や遊戯具といったものは見あたらない。このことは当遺跡が鎌倉・京都文化の直接的な受け手ではなく、「何処かの地」に一旦受け入れられた文化の二次的な伝播地であったと仮定できる。そして、その文化を伝播させた担い手は当時鎌倉との強い結びつきがあった小笠原伴野氏であり、「何処かの地」とは伴野氏の居館、現在の前山城周辺が伴野館跡が考えられるのではないだろうか。

そして、15～16世紀になっても当遺跡からは硯や武器・武具などの出土を見ないし、逆に陶磁器類は減少する。また屋敷地を囲む溝も「堀」としての機能は弱いように思われる。このことはこの「土豪」がその後武装し武士化していくのではなく、ある程度の屋敷地を構えるようになっても農耕に主眼をおく「有力農民層」的な成長に止まっていたことを予想させる。またこの事実は、逆に15～16世紀にわたる中世後期が佐久平にとって激動の時であり、度重なる戦乱により「領主」層や「国人」層の入れ替わりが激しく行われているにも関わらず当遺跡の住人が一カ所に居を構えて生活しえたのは、支配する側が変わっても「年貢賦課」さえ果たせばあまり戦乱の影響を受けない階層、いわゆる「在家」的な性格に近い人々であったとも考えられる。そして、屋敷地の終末段階であろう17世紀初頭に佐久郡内では相次ぐ歴史的な動乱の中で大規模な農民の逃散が発生、その混乱の収まりとともに近世の幕開けとなる事実がある。戦国末期の農村レベルでの混乱と遺跡の終息が重なる事実は非常に興味の引かれるところであり、関連を想定しても良いように思われる。

以上、調査段階から仮定の上での仮説と言うように事実認定の誤認部分も多いように思われる。確かに指摘されるまでもなく、当遺跡で調査された中世遺構群が血縁的繋がりのある人々によって400年近くの長きに渡り営まれてきた事を証明する考古学的資料は乏しい。特に、13～14世紀代の出土遺物と15～16世紀代の遺物とでは明らかに質的变化があり1つの画期を想定しても良い。しかし、例えば居住者が入れ替わっているとしても、出土遺物の内容から導き出された「住人」の性格の結論までは変わるものではないと考える。まとめるにあたり用語上で中世全般にわたっての「国人」や「土豪」「有力農民層」「在家」といった語句を筆者なりの理解のまま使用し不適切な箇所もあるかもしれない。今後は周辺地域の他遺跡との比較検討を行うことによって推論の補強を行う必要があるとともに文献資料からの位置づけも重要であろう。それにもまして、遺構・遺物個々の整理に関しても足りない部分も多く今後の同類資料の蓄積をまって再考としたい。

## 参考文献

- 1989 井出 正義 「歴史編中世」『岸野村誌』 岸野村誌刊行会
- 1993 「小特集 一ノ谷遺跡の諸問題」『月刊 歴史手帖』第21巻12号
- 1992 「村の墓・都市の墓」—中世考古学及び隣接諸学から—  
第3回「考古学と中世史研究」シンポジウム 帝京大学山梨文化財研究所
- 1995 「中世の火葬」—その展開と地域性— 東国歴史考古学研究所・帝京大学山梨文化財研究所
- 1994 市川 隆之 「中世後半期の溝・濠を巡らせる遺跡について」『中部高地の考古学Ⅳ』  
長野県考古学30周年記念論文集
- 1996 宮脇 正実 「中世四宮荘北条における居館と用水」『長野県の考古学』  
（勸）長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ（勸）長野県埋蔵文化財センター  
『日本史広辞典』日本史広辞典編集委員会編 山川出版社  
『佐久市志』歴史編(二)中世
- 1993 石井 進・荻原 三雄編 『中世社会と墳墓』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集
- 1991 石井 進・荻原 三雄 『中世の城と考古学』 新人物往来社
- 1990 峰岸 純夫 他 「中世居館」散村から集村へ『季刊 自然と文化』
- 1990 「中世末から近世のまち・むらと都市」第27回埋蔵文化財研究集会

### I. はじめに

佐久市大字根岸榛名平に所在する榛名平遺跡から出土した古墳時代人骨1体・中世人骨55体・江戸時代人骨1体・時代不明の人骨9体の合計66体につき、佐久市教育委員会から鑑定を依頼されたので、ここにその結果を報告する。

### II. 人骨の出土状況

出土した人骨は全体的に保存状態は悪く、火葬による変形を受けているものを含んでいる。そのため、性別や年齢を同定できるものは限られている。

### III. 人骨の所見

鑑定を行った人骨群について以下に記載する。なお、歯式はアルファベットは残存する乳歯を、アラビア数字は残存する永久歯を、○は歯槽開放を、●は歯槽閉鎖を、×は欠損のための状況不明を、( ) は未萌出の歯を示している。

#### (1)NHN 地区 1号土墳墓 (江戸)

性別不詳の11歳前後の小児1個体分であると推定される。保存状態が悪く、遊離歯が2個残存するだけである。歯式を次に示す。

××××××××		××××5×××
××××××××		×××××6×(8)

歯の咬耗は  $\left[ \begin{array}{c} 5 \\ 6 \end{array} \right]$  にわずかに見られ、齶蝕は認められない。

この個体は歯の咬耗度から11歳前後の小児であると推定される。

#### (2)NHN 地区 H13遺構出土人骨 (弥生後期)

性別不詳の小児1個体分であると推定される。保存状態が悪く、遊離歯が1個残存しているだけである。歯式を次に示す。

××××××××		×××××6××
××××××××		××××××××

歯の咬耗はほとんど見られず、齶蝕は認められない。この個体は歯の咬耗度から小児であると推定される。

### (3)NHN 地区 P98遺構出土人骨（古墳）

性別不詳の小児1個体分であると推定される。保存状態が悪く、遊離歯が2個残存するだけである。歯式を次に示す。

××6×××××	××××××××
××6×××××	××××××××

歯の咬耗はほとんど見られず、齶蝕は認められない。この個体は歯の咬耗度から小児であると推定される。

### (4)NHN 地区 F-キー-13出土人骨（時代不明）

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。小児、成人の判定はできない。保存状態は劣悪であり、触圧するだけで小骨片に破砕する状態である。四肢骨片が少数残存している。上肢骨・下肢骨：骨表面の劣化から部位の識別が不可能である四肢骨片が数片残存する。この個体の性別、年齢の特定は不可能である。

### (5)NHN 地区 J-ク-20出土人骨（時代不明）

性別年齢不詳の成人1個体分であると推定される。出土人骨は火葬骨であり、頭蓋冠片だけが残存している。頭蓋：左右不詳の頭頂骨と思われる骨片（4×3.2cm大）が単一で残存する。この個体は頭頂骨の厚さから成人であると推定される。

### (6)NHN II 地区 OT 2 遺構出土人骨（近世？）

性別年齢不詳の小児1個体分であると推定される。保存状態が悪く、少数の頭蓋冠片と四肢骨片が残存している。頭蓋：頭蓋冠片が数片残存する。下肢骨：左脛骨体部が残存する。その外、部位の特定できない四肢骨片が総重量にして約50g残存する。この個体の頭蓋冠片は比較的薄く、脛骨体も細いことから小児であると推定される。

### (7)NHN II 地区 P4346遺構出土人骨（中世？）

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。小児、成人の判断はできない。保存状態が極めて悪く、部位の同定不可能な小骨片が2片（1.7cm大、1.3cm大）残存するだけである。この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

(8)NHN II 地区 E 区出土人骨 (時代不明)

性別年齢不詳の成人1個体分であると推定される。保存状態が劣悪で腐食がはげしく、残存骨片は小骨片状である。

頭蓋：右下顎骨の筋突起から関節突起までを含む小骨片がある。

上肢骨：左右不詳の橈骨頭と思われる小骨片が残存する。

下肢骨：左右不詳の寛骨臼片、中足骨片、指骨の基節骨片が残存する。

この個体は下顎枝、指骨の基節骨の大きさから、成人であると推定される。

(9)NHN II 地区 D24土坑出土人骨 (古代)

性別不詳の熟年期成人1個体分である。保存状態が劣悪で腐食がはげしく、触ると破損する。

頭蓋片・歯・四肢骨片が残存する。

頭蓋：頭蓋冠片が残存する。

歯式は次に示す。

8 7 6 5 4 3 × ×	× × × 4 5 6 7 8
× 7 × 5 4 3 2 ×	× × × 4 5 × 7 ×

歯の咬耗度は、Martin の 1～3 度である。齶蝕は  $\overline{8}$ 、 $\overline{7}$ 、 $\overline{7}$  に認められる。なお、 $\overline{8}$   $\overline{5}$   $\overline{4}$   $\overline{3}$  |  $\overline{4}$   $\overline{5}$   $\overline{6}$   $\overline{7}$   $\overline{8}$ 、 $\overline{5}$   $\overline{4}$   $\overline{3}$   $\overline{2}$  |  $\overline{7}$  は遊離歯である。

上肢骨：左右不詳の上腕骨体片が残存する。

その他：部位不明の四肢骨片が多数残存する。

この個体は歯の咬耗度から熟年期であると推定される。

(10)NHN II 地区 D83土坑出土人骨 (時代不明) (写真1)

熟年期男性1個体分であると推定される。保存状態は比較的良好であり、次の部位が残存している。

頭蓋：前頭骨の眉弓付近の骨片と左右上顎骨の前頭突起・歯槽突起が残存する。また、遊離歯が5本残存する。

歯式を次に示す。

× × × × × × 2 1	× 2 × 4 × × × ×
× × × × × 3 × ×	× × × × × × × ×

歯の咬耗度は Martin の 3 度である。齶蝕は認められない。

脊椎：胸椎片6片と腰椎片5片、仙骨が残存する。第5腰椎と仙骨の棘間靭帯が糖衣状の骨化を呈している。

上肢骨：肩甲骨は左は関節窩・烏口突起・外側縁を欠損し、右は烏口突起を欠損する。上腕骨は右が残存する。橈骨は、左右共に残存する。尺骨は左は上端が欠損し、右は下端が欠損する。外に中手骨2本、指骨の基節骨4本、中節骨1本、末節骨1本残存する。

下肢骨：寛骨は左は大坐骨切痕部が残存し、右は恥骨肢、上及び下前腸骨棘部が欠損する。外に左大腿骨体部が残存する。

この個体は眉弓が比較的突出していること、寛骨の大坐骨切痕が狭いことから男性であると推定され、歯の咬耗度から熟年期成人であると推定される。

#### (11)NHNⅢ地区 榛名平1号墳 [旧OT3] 出土人骨 (古墳時代)

老年期男性1個体分であると推定される。保存状態が劣悪であり、頭蓋・脊柱・四肢骨が残存しているが、多数の小骨片になっている。

頭蓋：頭蓋冠片が数片ある。顔面頭蓋としては右上顎骨の歯槽突起・前頭突起部、左右不詳の上顎骨の切歯付近の歯槽片、後鼻棘を含む口蓋骨片、右下顎の筋突起が残存している。

なお、右上顎の第一、第二小白歯の歯槽は閉鎖している。

脊椎：椎骨片が少量残存する。

下肢骨：左右不詳の大腿骨の骨体部が残存する。

その他：部位の不明な四肢骨片が多量に残存する。

#### (12)NHNⅢ地区 FD1 遺構出土人骨 (中世)

年齢不詳の1個体であると推定される。小児、成人の判定はできない。出土人骨は火葬骨であり、保存状態は悪く、四肢骨片だけが残存する。

下肢骨：中足骨近位端と思われる小骨片が残存する。

その他：四肢骨片が多数残存し、総重量にして約20g存在する。

この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

#### (13)NHNⅢ地区 FD2 遺構出土人骨 (中世)

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。小児、成人の判定はできない。出土人骨は火葬骨であり、保存状態は悪く、四肢骨片だけが残存する。

頭蓋：頭蓋冠片と思われる小骨片(4cm大)があるだけである。

その他：部位不明の四肢骨片が多数残存しており、総重量にして15g存在する。

この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

(14)NHNⅢ地区 FD 3 遺構出土人骨 (中世)

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。小児、成人の判定はできない。保存状態が極めて悪く、小骨片が約20g残存している。これらの小骨片は部位は不明である。

この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

(15)NHNⅢ地区 FD 4 遺構出土人骨 (中世)

性別年齢不詳の成人1個体分であると推定される。出土人骨は火葬骨であり、保存状態は悪いが、骨格のさまざまな部位が残存している。

頭蓋：左右不詳の頭頂骨片と頭蓋冠と思われる小骨片が残存する。その外に右上顎骨の頬骨突起付近、下顎骨のオトガイ棘付近の骨片が認められる。歯は歯根が14根と同定不可能な歯冠片が残存する。

脊椎：頸椎と思われる椎体片が4個、棘突起片が1個認められる。

胸郭：左右不詳の肋骨が5片残存する。

上肢骨：左上腕骨の三角筋粗面を含む骨体片と右上腕骨体片が認められる。その外に指骨の基節骨の近位端が残存し、末節骨が5個認められる。

その他：部位不明の四肢骨片が多数残存する。また復元・同定不可能な小骨片が総重量にして約220g存在する。

この個体は上腕骨の大きさや頭頂骨の厚さなどから成人であると推定される。

(16)NHNⅢ地区 FD 5 遺構出土人骨 (中世)

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。小児、成人の判定はできない。保存状態が極めて悪く、0.5～1cm大の部位不明の小片が4片残存するだけである。

この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

(17)NHNⅢ地区 FD 6 遺構出土人骨 (中世)

熟年期成人1個体分であると推定される。保存状態が極めて悪く、歯、頭蓋片、大腿骨片を残存するだけである。

歯式を次に示す。

8 7 6 5 4 3 2 1	××3 4 5×7 8
×●6 5 4 3 2×	××3 4 5 6×8

歯牙の咬耗度は Martin の 1～3 度であり、齶蝕は 5 4 | 7 8 、 | 6 に認められる。なお、  
1 7 6 3 2 1 | 5 7 8、 | 2 4 5 6 は遊離歯である。

脊 椎：環椎の歯突起から左の上関節突起までが残存する。

下肢骨：左大腿骨の骨頭から骨体部までが残存する。

この個体は歯の咬耗度から熟年期であると推定される。

#### (18)NHNⅢ地区 FD 7 遺構出土人骨 (中世)

年齢不詳の成人女性 1 個体分と推定される。出土人骨は火葬骨で保存状態は悪いが、部分的に焼けていない小骨片が混在する。

頭 蓋：下顎骨の切歯部の歯槽片が 5 根認められる。

脊 椎：椎体片、棘突起片が数個認められる。

胸 郭：肋骨が 4 本認められる。左右は不詳である。

上肢骨：左肩甲骨関節窩付近、左上腕骨体部、指骨の末節骨が認められる。

下肢骨：右寛骨大坐骨切痕付近、左右不詳の大腿骨頭、右大腿骨恥骨筋線付近、左右膝蓋骨が認められる。

その他：部位不明の四肢骨片が多数残存する。また、復元・同定不可能な小骨片が総重量にして 350 g 存在する。

この個体は大腿骨頭、上腕骨、寛骨の大きさから成人であり、大坐骨切痕が広いことから女性であると推定される。

#### (19)NHNⅢ地区 FD 8 遺構出土人骨 (中世)

性別年齢不詳の成人 1 個体分と推定される。出土人骨は火葬骨で保存状態は極めて悪く、良く焼け変形縮小が著しく、大部分が小片状を呈している。

頭 蓋：頭蓋冠片と思われる小骨片 (1 cm 大) があるだけである。

上肢骨：上腕骨体片が数個 (最大 4 cm 大)・前腕骨体片が多数 (最大 4 cm 大) が認められる。これらはいずれも左右不詳である。

下肢骨：大腿骨としては骨体片が多数 (最大 8 cm 大) 残存し、粗線を含む骨片 (6 cm 大) もある。外に大腿骨頭片と内側顆あるいは外側顆の一部を含む骨片も認められる。脛骨は前縁を含む骨体片 (最大 6 cm 大) がある。腓骨体片 (5 cm 大) が認められる。指骨の末節骨片が認められる。これらはいずれも左右不詳である。



その他：部位不明の四肢骨片が多数残存する。また復元・同定不可能な小骨片が総重量にして約220g存在する。

この個体は四肢骨の太さなどから性別は不詳であるが成人であると推定される。

#### (20)NHNⅢ地区 FD9 遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の1個体分と推定される。成人、小児の判定はできない。出土人骨は火葬骨であり保存状態は悪く、頭蓋片、四肢骨片だけが残存する。

頭蓋：前頭骨の前頭稜付近、下顎体片が認められる。その外に頭蓋冠片が数片と歯根片が2根存在する。

上肢骨：指骨の末節骨が認められる。左右は不詳である。

下肢骨：栄養孔を含む左腓骨体片が認められる。

その他：部位不明の多数の四肢骨片が総重量にして約50g残存する。

この個体は火葬骨であるため、変形・縮小が激しく、性別、年齢の推定は不可能である。

#### (21)NHNⅢ地区 FD10遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の成人1個体分であると推定される。出土人骨は火葬骨であり保存状態は極めて悪く、変形縮小し、頭蓋片と四肢骨片だけが残存する。

頭蓋：頭蓋冠片が数片、右側頭骨の内耳孔を含む錐体片、右頬骨が認められる。外に下顎の歯槽部、右の筋突起が残存する。歯は歯根片が4根残存する。

上肢骨：手根骨1個、手の指骨と思われる小骨片が残存するが左右不詳である。

下肢骨：中足骨と思われる小骨片、指骨の末節骨が残存する。

その他：四肢骨片が多数認められる。

この個体は足の指骨の末節骨の大きさから成人であると推定される。

#### (22)NHNⅢ地区 FD11遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の1個体分と推定される。成人、小児の判定はできない。出土人骨は火葬骨であり保存状態は極めて悪く、頭蓋片と四肢骨片が残存するだけである。

頭蓋：頭蓋冠片が数片、内耳孔を含む左右側頭骨の錐体部が残存する。

上肢骨：左橈骨の手根関節面を含む骨片、左右不詳の尺骨と思われる骨体片（9.5cm大）が残存する。

その他：四肢骨片が多数認められる。

この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

(23)NHNⅢ地区 FD12遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の成人1個体分と推定される。出土人骨は火葬骨であり保存状態は極めて悪いが、次の部位の骨片が残存している。

頭蓋：頭蓋冠片が50g残存している。左上顎骨の前頭突起部と下顎骨の右の筋突起が残存している。外に歯根片が1根、第臼歯の歯冠片が認められる。

脊椎：軸椎と外の椎骨片が少数残存している。

上肢骨：左上腕骨体下部片、左右不詳の橈骨頭片、左尺骨の滑車切痕が認められる。また、手根骨が1個、中手骨が1個、末節骨が1個、末節骨以外の指骨が2個存在する。

下肢骨：左右不詳の大腿骨の膝蓋面を含む骨片が残存する。

その他：大腿骨か上腕骨の骨頭片と四肢骨片が多数残存している。

この個体は上腕骨の大きさから成人であると推定される。

(24)NHNⅢ地区 FD13遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の1個体分と推定される。成人、小児の判定はできない。出土人骨は火葬骨であり保存状態は極めて悪く、四肢骨片だけが多数残存する。

下肢骨：大腿骨粗線部分と思われる小骨片（4cm大）が認められるが、左右は不詳である。

その他：部位不明の四肢骨片が多数残存し、総重量にして約60g存在する。

この火葬骨は収縮がはげしく、性別、年齢の推定は不可能である。

(25)NHNⅢ地区 FD14遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の成人1個体分と推定される。出土人骨は火葬骨で保存状態は極めて悪く、良く焼け変形縮小が著しく、大部分が小片状を呈している。上肢骨片および下肢骨片だけが残存する。

上肢骨：左上腕骨の小結節稜周辺部と左右不詳の橈骨頭が残存する。

下肢骨：左右不詳の大腿骨の遠位端関節面部、右脛骨の下関節面部が残存する。足根骨が3個存在する。

その他：詳細な部位の不明な四肢骨片が多数残存する。

この個体は上腕骨の大きさから成人であると推定される。

(26)NHNⅢ地区 FD15遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の成人1個体分であると推定される。出土人骨は火葬骨で保存状態は極めて悪く、良く焼け変形縮小が著しく、大部分が小片状を呈している。

頭蓋：頭蓋冠片が総重量にして70g残存する。下顎骨の左関節突起、歯根片が5根、歯冠片が

2個認められる。

脊椎：椎骨片が少数残存する。

胸郭：肋骨片が少数残存する。

その他：上腕骨か大腿骨の骨頭片と部位不明の四肢骨片が多数残存する。

この個体は下顎骨の関節突起の大きさより成人であると推定される。

#### (27)NHNⅢ地区 FD16遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の1個体分と推定される。成人、小児の判定はできない。出土人骨は火葬骨で保存状態は極めて悪く、良く焼け変形縮小が著しく、大部分が小片状を呈している。頭蓋片と大腿骨片が残存する。

頭蓋：前頭骨の頬骨突起部、左側頭骨の頬骨突起部、右側頭骨の後頭縁部が認められる。その外に部位不明の頭蓋冠片が認められる。

下肢骨：左大腿骨の粗線の内唇および外唇が左右に広がる部位（8 cm大）が認められる。

その他：部位不明の多数の四肢骨片が総重量にして約35 g存在する。

この火葬骨は収縮がはげしく、性別、年齢推定は不可能である。

#### (28)NHNⅢ地区 FD17遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の成人1個体分であると推定される。出土人骨は火葬骨であり保存状態は極めて悪く、良く焼け変形縮小が著しい。

頭蓋：頭蓋冠片が数片、内耳孔を含む左側頭骨の錐体部が残存する。外に歯根片が2根残存する。

脊椎：椎骨片が数個残存する。

胸郭：肋骨片が数片残存する。

上肢骨：上腕骨体と思われる骨片、中節骨が2個、末節骨が1個、末節骨以外の指骨が7個認められる。

下肢骨：左右不詳の大腿骨の遠位端関節面の骨片と左大腿骨の小転子付近の数片の骨片が認められる。外に右膝蓋骨、右脛骨の下関節面付近が残存する。

その他：大腿骨か上腕骨かいずれかの骨頭片、四肢骨片が多数存在する。

この個体は大腿骨の大きさから成人であると推定できる。

#### (29)NHNⅢ地区 FD18遺構出土人骨（中世）

性別不詳の8歳前後の小児1個体分と推定される。保存状態が悪く、頭蓋片、遊離歯、四肢骨

片のみが残存している。このうち四肢骨片は焼骨であり、変形縮小している。

頭蓋：左側頭骨の錐体部から外耳道周辺（5×2.5cm）が認められる。外には遊離歯と小骨片が認められるだけである。

歯式を次に示す。

$$\begin{array}{c|c} (5) & \\ \hline \begin{array}{c} \times \times 6 e(4) \times \times \times \\ \times(7) 6 e(4) C 2 1 \end{array} & \begin{array}{c} 1 2(3) \times e 6(7) \times \\ \times \times 3(4) e 6 \times \times \end{array} \\ \hline (5) (3) & (5) \end{array}$$

歯の咬耗度は Martin の 1 度である。齶蝕は  $\begin{array}{|c|c|c|} \hline e & e & e \\ \hline \end{array}$  に認められる。

その他：部位不明の四肢骨片が多数残存する。これらの骨片は焼骨片であり、総重量にして 20 g 存在する。

歯の萌出状態からこの人骨は 8 歳前後であると推定される。

### (30)NHNⅢ地区 FD20遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の 1 個体分であると推定される。成人、小児の判定はできない。出土人骨は火葬骨で保存状態は極めて悪く、頭蓋底とみられる小片が残存するのみである。

頭蓋：蝶形骨の左の正円孔を含む骨片（2.5cm 大）が認められる。

この個体は火葬骨であるため、収縮がはげしく、性別、年齢推定が不可能である。

### (31)NHNⅢ地区 FD21遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の 1 個体分であると推定される。成人、小児の判定はできない。保存状態は極めて悪く、頭蓋片と四肢骨片の一部が残存しているだけである。

頭蓋：前頭骨の前頭鼻骨縫合周辺、左側頭骨の頬骨突起、外耳孔周辺が認められる。その外に頭蓋冠片が多数残存する。

上肢骨：上腕骨体片と思われる小骨片（4 cm 大）、上腕骨頭片と思われる小骨片が残存するだけである。いずれも左右不詳である。

下肢骨：大腿骨体片と思われる小骨片（3.5cm 大）、中足骨体片と思われる小骨片が残存する。いずれも左右不詳である。

この個体の性別、年齢推定は不可能である。

(32)NHNⅢ地区 FD22遺構出土人骨（中世）

熟年期女性1個体分であると推定される。保存状態は悪いが、頭蓋片・上肢骨片・下肢骨片が残存している。

頭蓋：脳頭蓋は頭蓋冠片の外、前頭骨は眼窩面を含む部位が残存し、左右側頭骨は内耳孔を含む錐体部および下顎窩と頬骨突起を含む部位、蝶形骨は卵円孔と棘孔を含む部位が残存する。後頭骨は斜台部分が認められる。顔面頭蓋は上顎骨の口蓋突起、下顎骨片が残存する。

歯式を次に示す。

8 7 6 5 4 3 × ×	× 2 3 4 5 6 7 ×
8 7 6 5 4 × × 1	× 2 × 4 5 6 7 ×

歯の咬耗度は Martin の1～3度である。齶蝕は 7 に認められる。また 8 は矮小歯である。なお、4 3、2 3 4、8 7 6 5 4、4 5 6 7 は遊離歯である。

上肢骨：左鎖骨、三角筋粗面を含む右上腕骨体部片が残存し、指骨は基節骨が1個、中節骨が1個残存する。

下肢骨：大坐骨切痕・寛骨臼を含む右寛骨片が残存する。大腿骨は右は骨頭から骨体部が残存し、左は遠位端付近の骨体片が残存する。脛骨は左右の骨体片が残存する。

この人骨は歯の咬耗度から熟年期であり、寛骨の大坐骨切痕が広いことから女性であると推定される。

(33)NHNⅢ地区 FD23遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。成人、小児の判定はできない。保存状態は極めて悪く、6～7mmの小骨片が2片残存するだけである。これらの小骨片の部位は不明であり、性別、年齢の判定は不可能である。

(34)NHNⅢ地区 FD24遺構出土人骨（中世）

性別不詳の6歳前後の小児1個体分であると推定される。保存状態は極めて悪く、若干の頭蓋片と歯が残存するだけである。

頭蓋：右側頭骨錐体片が残存する。d 以外は遊離歯である。

歯式を次に示す。

××6 e d c b×	a b c d e 6××
××6 e d c b×	a b c d e 6××

咬耗はわずかに見られる。齶蝕は認められない。

この個体は歯の萌出状態より6歳前後の小児であると推定される。

(35)NHNⅢ地区 FD25遺構出土人骨（中世）

性別不詳の3歳前後の小児1個体分であると推定される。保存状態が極めて悪く、遊離歯が数個残存するだけである。

頭蓋： d  は歯冠上面観が三角形状を呈する異常歯である。

歯式を次に示す。

×××× d ×× a	a × c d ××××
××××× c ××	×× c ××(6)××

咬耗はわずかに見られる。齶蝕は認められない。

残存歯からこの人骨は3歳前後の小児であると推定される。

(36)NHNⅢ地区 FD26遺構出土人骨（中世）

熟年期女性1個体分であると推定される。出土人骨は比較的保存状態が良好であり、次の部位が残存している。

頭蓋：ほぼ完形の左右の側頭骨がある。後頭骨は後頭平面を含む部位と左後頭窩を含む部位が認められ、左頬骨片が残存する。また、下顎骨がある。

歯式を次に示す。

× 7 × × × × × ×	1 2 × × 5 × × ×
● ● ● 5 × × × ×	× 2 3 ● ● ● ● ●

歯の咬耗度は Martin の 1～3 度である。  7 | 1 2 5  は遊離歯である。齶蝕は  7 | 5 、 5 |  に認められる。

脊椎：頸椎は環椎の上下関節窩を含む部位、軸椎の歯状突起を含む部位、第6、第7頸椎が残存している。また、第1胸椎が残存する。

上肢骨：上肢帯は左の鎖骨と肩甲骨が残存する。外に中手骨が2個、指骨の末節骨以外のものが2個、末節骨が1個残存する。これらはいずれも左右不詳である。

下肢骨：下肢帯は左寛骨の大坐骨切痕を含む部位が残存する。大腿骨は左の骨頭から骨体部まで、右の骨頭と骨体部、左右不詳の下端部片が残存する。脛骨は右の骨体片だけが残存している。その外、左右不詳の中足骨が残存している。

この個体は歯の咬耗度から熟年期であり、寛骨の大坐骨切痕が広いことから女性であると考えられる。

(37)NHNⅢ地区 FD27遺構出土人骨（中世）

性別不詳の小児1個体であると推定される。保存状態が劣悪であり、遊離歯が2個残存するだけである。

頭蓋：  $\overline{6}$  の歯根は腐食している。一方、  $\overline{3}$  は歯冠形成途上にある。歯式を次に示す。

×××××3××	××××××××
××6×××××	××××××××

歯の咬耗は歯冠が腐食しかかっているため断定はできないが、  $\overline{6}$  はほとんど咬耗が認められない。また、齶蝕は認められない。

この個体は残存歯より小児であると断定される。

(38)NHNⅢ地区 FD28遺構出土人骨（中世）

性別不詳の5歳前後と1歳前後の小児2個体分であると推定される。保存状態が極めて悪く、遊離歯と頭蓋片が若干残存しているだけである。

頭蓋：頭蓋片は左右側頭骨の錐体部と右後頭骨の後頭顆付近だけが残存する。歯は遊離歯が残存するが、未萌出のものを含んでいる。また、  $\overline{6}$  が2個体分認められる。

歯式を以下に示す。

第一の個体

(4)3)	(4)5)
××(6)e d c(2)1)	(1)2)× d e(6)××
××(6)e d c(2)1)	(1)2)c d e(6)××
(5)4)3)	(3)4)

第二の個体

××××××××	××××××××
××××××××	×××××(6)××

歯の咬耗度は第一の個体が Martin の 1 度である。齶蝕は  $\frac{e}{e}$ 、 $\frac{e}{e(6)}$  に認められ、第二の個体には認められない。

第一の個体は歯の萌出状況から 5 歳前後、第二の個体は (6) の歯根形成が認められないことから 2 歳以下の小児であると推定される。

(39)NHNⅢ地区 FD29遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の成人 1 個体分である。保存状態は極めて悪く、頭蓋冠、側頭骨錐体部、椎骨と思われる骨片が含まれているが、腐食・劣化がはげしく十分な鑑定は不可能である。

この個体は劣化した骨片だけが残存しているため、十分なことは言えないが、頭蓋冠片の厚さから成人と推定される。

(40)NHNⅢ地区 FD31遺構出土人骨（中世）

性別不詳の 4 歳前後の小児 2 個体分である。この人骨は保存状態が劣悪であり、複数の歯だけが残存する。これらの歯の歯根部分は腐食して部分的にしか残存していない。

頭蓋：2 個体分の遊離歯が残存する。これらの歯は歯根形成され萌出しているものと、未萌出のものがある。

歯式を次に示す。

第一の個体

(2)

××(6)e d(3)(2)(1)	× b c d e ×××
××(6)e d(3)(2)(1)	(1)× c d e(6)××

(3)

第二の個体

××× e ××××	××× d e ×××
××× e ××××	××× d e ×××



歯の咬耗度は両個体の乳歯にわずかに見られる。2 個体共に齶蝕は認められない。

第一の個体は歯の萌出状況から 4 歳前後の小児であり、第二の個体は歯の咬耗度から 4 歳前後の小児であると推定される。

(41)NHN III 地区 FD33 遺構出土人骨 (中世)

性別不詳の 8 歳前後の小児 1 個体分であると推定される。保存状態が極めて悪く、頭蓋片と遊離歯だけが残存する。

頭 蓋：右側頭骨の錐体片と複数の遊離歯が残存する。歯は歯冠表面が腐食しているものもある。歯式を以下に示す。

$$\begin{array}{r|l} & (3) \\ \times\times\times\times\times\times\times\times & \times b c d e 6 \times \times \\ \hline \times\times\times\times\times\times\times 1 & 1 \times (3) d e 6 \times \times \end{array}$$

歯の咬耗はわずかに見られ、齶蝕は認められない。

この個体は歯の萌出状況より 8 歳前後の小児であると推定される。

(42)NHN III 地区 FD34 遺構出土人骨 (中世)

性別不詳の熟年期成人 1 個体分である。保存状態が極めて劣悪であり、触ると碎片化する。頭蓋片・遊離歯・四肢骨片が残存している。

頭 蓋：左側頭骨の錐体片、右側頭骨の外耳道から側頭鱗の一部および頭蓋冠片が残存する。歯は同定可能な遊離歯が 2 個、破碎して同定不可能な歯冠片が 1 片残存する。

歯式を次に示す。

$$\begin{array}{r|l} \times \times 6 \times \times \times \times \times \times & \times \times \times \times \times \times \times \times \\ \hline \times \times \times \times \times \times \times \times & \times \times \times \times \times 6 \times \times \end{array}$$

歯の咬耗度は Martin の 2 度であり、齶蝕は認められない。

この個体は歯の咬耗度から熟年期成人であると推定される。

(43)NHN III 地区 FD35 遺構出土人骨 (中世)

性別不詳の 2 歳前後の小児 1 個体分である。この人骨は保存状態が劣悪であり、単一の歯が残存するだけである。

頭 蓋：遊離歯が単一で残存している。この歯に齲蝕は認められない。

歯式を次に示す。

××××××××		××××××××
××××××××		××××(e)×××

この個体は e が咬耗していないことと歯根形成の程度から 2 歳前後の小児であると推定できる。

#### (44)NHNⅢ地区 FD36遺構出土人骨（中世）

性別不詳の 2 歳前後の小児 1 個体分である。保存状態が劣悪であり、複数の歯が残存するだけである。

頭 蓋：遊離歯が複数残存している。これらの遊離歯は歯根が残存していない。

歯式を次に示す。

×××(e)(d)(c)××		×(b)×(d)(e)×××
×××(e)(d)(c)(b)(a)		×(b)×(d)(e)×××

歯の咬耗は見られない。齲蝕は認められない。

この個体は歯冠形成の程度から 2 歳前後の小児であると推定される。

#### (45)NHNⅢ地区 FD38遺構出土人骨（中世）

性別不詳の 3 歳前後の小児 1 個体分であると推定される。保存状態が劣悪であり、頭蓋の一部と複数の歯が残存するだけである。

頭 蓋：左右側頭骨の錐体部と複数の遊離歯が残存している。

歯式を次に示す。

(1) (1)

××(6)××c b a		a × c d e(6)××
××(6)e d c b ×		××c × e ×××

歯の咬耗はわずかに見られる。齲蝕は認められない。

この個体は歯の萌出状況から 3 歳前後の小児であると推定される。

#### (46)NHNⅢ地区 FD40遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の成人 1 個体分であると推定される。保存状態が悪く、下肢骨片が残存するだけ

である。

下肢骨：大腿骨体と思われる骨片が2片認められるが、左右は不詳である。

この個体は大腿骨片の大きさから成人であると推定される。

#### (47)NHNⅢ地区 FD41遺構出土人骨（中世）（写真2・3）

熟年女性1個体分であると推定される。保存状態は比較的良好であり、下記の部位が残存している。

頭蓋：顔面部上半が欠損しており、骨質は脆弱である。

歯式を以下に示す。

8 7 6 5 4 3 2 1		1 2 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 × 1		× 2 × 4 × 6 7 8

歯の咬耗度は Martin の 1～3 度であり、齶蝕は認められない。

脊椎：頸椎が2個、胸椎が6個、腰椎が5個、第一仙椎が残存している。

上肢骨：右肩甲骨は烏口突起から関節窩の部分が残存する。橈骨は右の骨体片、左の骨体から手根関節面までが残存する。尺骨は左右共に骨体片だけが残存する。外に、手根骨は右の有頭骨、舟状骨、大菱形骨、左右不詳の月状骨が見られ、中手骨は左右不詳のものが4本認められる。指骨は左右不詳の基節骨が1個、末節骨以外の指骨が1個残存している。

下肢骨：寛骨は左右あり、上前腸骨棘、大坐骨切痕・寛骨臼から坐骨結節を含む骨片が残存している。大腿骨は左右共に大転子と外側顆が破損した状態で残存している。膝蓋骨は左だけが認められる。脛骨は左右残存しているが、右は外側面が欠損している。足根骨は左の踵骨、距骨、舟状骨、内側楔状骨、中間楔状骨、右の踵骨、距骨、舟状骨が残存している。

この個体は歯の咬耗度から熟年女性であり、寛骨の大坐骨切痕が広いことから女性であると考えられる。

#### (48)NHNⅢ地区 FD42遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。成人、小児の判定はできない。保存状態は極めて悪く、最大1cm大の小骨片が7片だけ残存する。これらの小骨片の部位は不明であるが、頭蓋骨片と思われる小片を含んでいる。

この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

#### (49)NHNⅢ地区 FD43遺構出土人骨（中世）

性別不詳の4歳前後の小児1個体分であると推定される。保存状態が劣悪であり、複数の歯が

残存するだけである。

頭蓋：遊離歯が複数残存している。

歯式を次に示す。

$$\begin{array}{c|c} \times\times\times e d \times\times\times & \times\times\times\times e(6)\times\times \\ \hline \times\times\times e \times\times\times\times & \times(2)\times\times\times(6)\times\times \end{array}$$

歯の咬耗はわずかに見られる。齶蝕は認められない。

この個体は  $\overline{6}$ 、 $\overline{26}$  の歯根形成の程度から4歳前後の小児であると推定される。

#### (50)NHNⅢ地区 FD44遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。成人、小児の判定はできない。出土人骨は火葬骨であり、保存状態が極めて悪く、小骨片が少量残存しているだけである。これらの小骨片の部位は不明である。

この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

#### (51)NHNⅢ地区 FD45遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の成人1個体分であると推定される。出土人骨は火葬骨であり、保存状態が極めて悪く、四肢骨片が約5g残存するだけである。詳細な部位の同定は不可能である。

この個体は四肢骨片の骨質の厚さから成人であると推定される。

#### (52)NHNⅢ地区 FD46遺構出土人骨（中世）

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。成人、小児の判定はできない。出土人骨は火葬骨であり、保存状態が極めて悪く、四肢骨片が数片、小骨片が約20g残存するだけである。これらの骨片の詳細な部位は不明である。

この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

#### (53)NHNⅢ地区 FD50遺構出土人骨（中世）

性別不詳の熟年期成人1個体分であると推定される。保存状態は極めて悪く、頭蓋片の一部が残存しているだけである。

頭蓋：頭蓋冠片（最大3×2cm大）が多数認められる。外耳孔および内耳孔を含む右側頭骨片と内耳孔を含む左側頭骨片がある。外には遊離歯と小骨片が認められるだけである。

歯式を次に示す。

××6×××2×	×××4××××
××××××××	×××××6××

残存歯は全て遊離歯である。歯の咬耗度は Martin の 2 度である。齶蝕は認められない。

この人骨は歯の咬耗度から熟年期であると推定される。

#### (54)NHNⅢ地区 FD51遺構出土人骨(中世)

年齢不詳の成人男性 1 個体分であると推定される。出土人骨は火葬骨であり、保存状態は悪く、変形縮小し断片化しているが、次の部位が残存している。

頭蓋：前頭骨の眉弓付近、右側頭骨錐体部の内耳孔付近が残存する。前頭骨の眉弓の発達著しい。外に下顎体片が残存する。

歯式を次に示す。

××××××××	××××××××
××××××××	○○3456○○

なお  $\overline{3456}$  は歯冠は認められず歯根部だけが残存している。

脊椎：椎骨片が総重量にして約 50 g 存在する。

胸郭：左右不詳の肋骨片が 4 片残存する。外に胸骨と思われる骨片が認められる。

上肢骨：右肩甲骨の鳥口突起、関節窩付近が残存する。上腕骨は左は上腕骨滑車部が残存し、右は骨体部から上腕骨滑車部が残存する。橈骨は左右とも手根関節面を含む骨体部が 5 cm 程度残存する。尺骨は左右ともに近位端付近の滑車切痕付近、遠位端の骨体部から茎状突起付近が残存する。外に手根骨 6 個、中手骨 9 本、指骨の基節骨 8 本、中節骨 5 本、末節骨 3 本が残存するが、そのうち基節骨に圧迫骨折の治癒痕が認められる。

下肢骨：大腿骨は右は骨頭・大転子を含む骨体部が 14 cm 程度と遠位端関節部が 11 cm 程度残存し、左は遠位端関節部が 7 cm 程度残存する。脛骨は左右ともに上関節面部と下関節面部が残存する。腓骨は右の腓骨頭が残存する。外に左右膝蓋骨、左踵骨、距骨が認められ、足根骨 2 個、中足骨 5 本、基節骨 2 本が残存する。

この個体は眉弓の発達が強いことから男性であると推定される。

(55)NHNⅢ地区 FD53遺構出土人骨（中世）

性別不詳の熟年期成人1個体分であると推定される。保存状態が悪く、頭蓋片、四肢骨片が残存するだけである。

頭蓋：頭蓋冠片（最大5cm大）が数片、右側頭骨の内耳孔付近が認められる。外に下顎骨が残存している。

歯式を次に示す。

8 7 × 5 4 3 × ×	1 × 3 4 × × 7 8
× 7 6 5 4 × × ×	× × × 4 5 6 7 ×

歯の咬耗度は Martin の1～3度である。 8 7 5 4 3 | 1 3 4 7 8、 5 4 は遊離歯である。

齶蝕は 8 7 5 4 に認められる。

脊椎：第二頸椎の歯突起片が認められる。

下肢骨：右脛骨の栄養孔付近、左脛骨の内果部が残存している。

その他：詳細な部位の特定できない四肢骨片が数片残存している。

この個体は歯の咬耗度から熟年期であると推定される。

(56)NHNⅢ地区 FD55遺構出土人骨（中世）

熟年期男性1個体分であると推定される。保存状態が極めて悪く、頭蓋片が残存するだけである。

頭蓋：脳頭蓋としては前頭骨、左側頭骨、後頭骨が、顔面頭蓋としては上顎骨、下顎骨が認められる。遊離歯が残存する。

歯式を次に示す。

× × 6 5 4 3 2 ×	× 2 × × × 6 × ×
8 7 6 ○ ● 3 2 1	1 2 3 × × × × ×

歯の咬耗度は Martin の1～3度である。3 2 | 2 6、8 7 は遊離歯である。3 に齶蝕が見られる。

この個体は眉上弓から前頭結節にかけての形状から男性であると推定され、矢状縫合の後半部分と人字縫合のラムダ付近の内板が骨結合していることと歯の咬耗度から熟年期であると推定される。

(57)NHNⅢ地区 FD56遺構出土人骨（中世）

壮年期女性1個体分であると推定される。保存状態が極めて悪く、触るだけで碎片化しやすい。

頭蓋片・上肢骨片だけが残存している。

頭蓋：左右の頭頂骨が矢状縫合で結合した状態で残存する。外に遊離歯が残存する。

歯式を次に示す。

8 × × × × × × × ×		1 × × × × × × × ×
× × × × × × × ×		× × × × × × × ×

咬耗度は Martin の 1 度である。齶蝕は 1 に認められる。

上肢骨：右尺骨体部片、左右不詳の橈骨体部片、中手骨、指骨の基節骨 4 本、中節骨 4 本が認められる。

下肢骨：右寛骨の大坐骨節痕付近、右大腿骨の恥骨筋線から栄養孔付近までの骨体部片、左大腿骨の骨体部片が残存する。

この個体は歯の咬耗度から壮年期であり、寛骨の大坐骨切痕が広いことから女性であると推定される。

#### (58)NHNⅢ地区 FD57遺構出土人骨（中世）

熟年期女性 1 個体であると推定される。保存状態が悪く、頭蓋片・上肢骨片・下肢骨片だけが残存する。

頭蓋：右側頭骨の外耳孔付近、左側頭骨の乳突部から、外耳孔付近、下顎骨の左の下顎孔付近が残存する。外には遊離歯が認められる。

歯式を次に示す。

× × 6 × × × × × ×		× × 3 × × × 7 ×
× × × × × × × ×		× × × × 5 × × ×

咬耗度は Martin の 3 度である。齶蝕は 6 に認められる。

上肢骨：右上腕骨の内側上顆・上腕骨滑車付近が残存する。

下肢骨：左の大腿骨頸から骨体部までの内側部骨片、左右不詳の大腿骨粗線付近が残存する。

この個体は歯の咬耗度から熟年期であり、乳様突起の発達が弱いことから女性であると推定される。

#### (59)NHNⅢ地区 FD58遺構出土人骨（中世）

性別不詳の壮年期成人 1 個体であると推定される。出土した人骨は保存状態が悪く、骨表面が脆弱で触るだけで剥離する。断片的であるが、ほぼ全体にわたって残存する。

頭蓋：頭蓋冠片が数片残存する。その外には、側頭骨は左右の錐体片、左の下顎窩が認められ、蝶形骨は大翼、前床突起部が残存する。外に下顎骨が認められる。歯はすべて遊離歯である。

歯式を次に示す。

××654×21	×234×××8
××××××××	×2××56××

歯の咬耗度は Martin の 1～2 度である。齶蝕は 48 と 56 に認められる。

脊椎：軸椎の歯突起のみが残存する。

上肢骨：左尺骨の滑車切痕を含む上端、左右不詳の橈骨体部片が残存する。外には指骨の基節骨と思われる小骨片が残存するだけである。

下肢骨：左右の寛骨の耳状面と寛骨臼を含む骨片、左大腿骨体片、左大腿骨頭と思われる骨片、左脛骨の上端部片が残存する。

この個体は咬耗度より壮年期であると推定される。

#### (60)NHNⅢ地区 D1 土坑出土人骨 (中世)

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。成人、小児の判定はできない。出土人骨は保存状態が極めて悪く、最大1.3cmの小骨片が少数残存するだけである。これらの小骨片は部位不明である。

この個体の性別、年齢推定は不可能である。

#### (61)NHNⅢ地区 D26土坑出土人骨 (中世)

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。小児、成人の判定はできない。出土人骨は火葬骨で保存状態が極めて悪いが、焼けていない小骨片が混在する。これらの小骨片は総重量にして10g存在する。

この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

#### (62)NHNⅢ地区 H29遺構出土人骨 (弥生後期)

性別年齢不詳の1個体分であると推定される。小児、成人の判定はできない。出土人骨は火葬骨であり、保存状態は悪く、小骨片が3片残存しているだけである。

下肢骨： 左右不詳の大腿骨頭と思われる小骨片 (約3cm大) が残存している。

この個体の性別、年齢の推定は不可能である。

#### (63)NHNⅣ地区 FD2 遺構出土遺物 (中世)

性別不詳の4歳前後の小児2個体分である。保存状態は悪く、頭蓋と一部の四肢骨が残存しているだけである。



頭蓋：左右側頭骨の錐体片、後頭骨の底部付近、蝶形骨の左の眼窩面・大翼の正円孔付近が残存する。左上顎骨片と下顎骨左半部が残存する。

歯式を次に示す。

第一の個体

(3)4

××××××××	×× c d e(6)××
××××××××	×× c d e(6)××

第二の個体

××××××××	(1)×(3)×××××
××××××××	××(3)×××××

第二の個体は遊離歯が残存するだけである。歯の咬耗度は第一の個体の乳歯は Martin の 1～3 度であり、第二の個体は Martin の 0 度である。齲蝕は 2 個体共に認められない。

下肢骨：左右不詳の大腿骨体片と思われる破片が認められる。

第一の個体は歯の萌出状況から、第二の個体は歯根形成の程度から共に 4 歳前後の小児であると推定される。

#### IV. まとめ

榛名平遺跡からは少なくとも合計 66 個体の人骨が出土している。古墳時代人骨は成人 1 個体(男性)である。中世人骨は成人 23 個体(男性 2 個体、女性 6 個体、不詳 15 個体)、小児 15 個体、年齢不詳 17 個体の合計 55 個体であり、江戸時代人骨は小児 1 個体である。外に時代不明の人骨は成人 4 個体(男性 1 個体、女性 0 個体、不詳 3 個体)、小児 3 個体、年齢不詳 2 個体の合計 9 個体である。

病的所見は歯の異常として NHN III 地区 FD22 遺構出土人骨の 8 の矮小歯および同地区 FD 25 遺構出土人骨の d の歯冠上面観が三角形状を呈する異常歯が挙げられる。その外、圧迫骨折が同地区の F D 51 遺構出土人骨の手の基節骨に認められ、NHN II 地区の D83 土坑出土人骨の第 5 腰椎と仙骨の棘間靭帯に糖衣上の骨化が認められた。齲蝕は中世人骨では III FD 6、FD18、FD22、FD26、FD28、FD53、FD55、FD56、FD58 の 9 個体に、時代不明の人骨では D24 に見られる。中世人骨で歯式の判明している個体数は 25 個体であるため、齲蝕歯所有者率は 36% である。

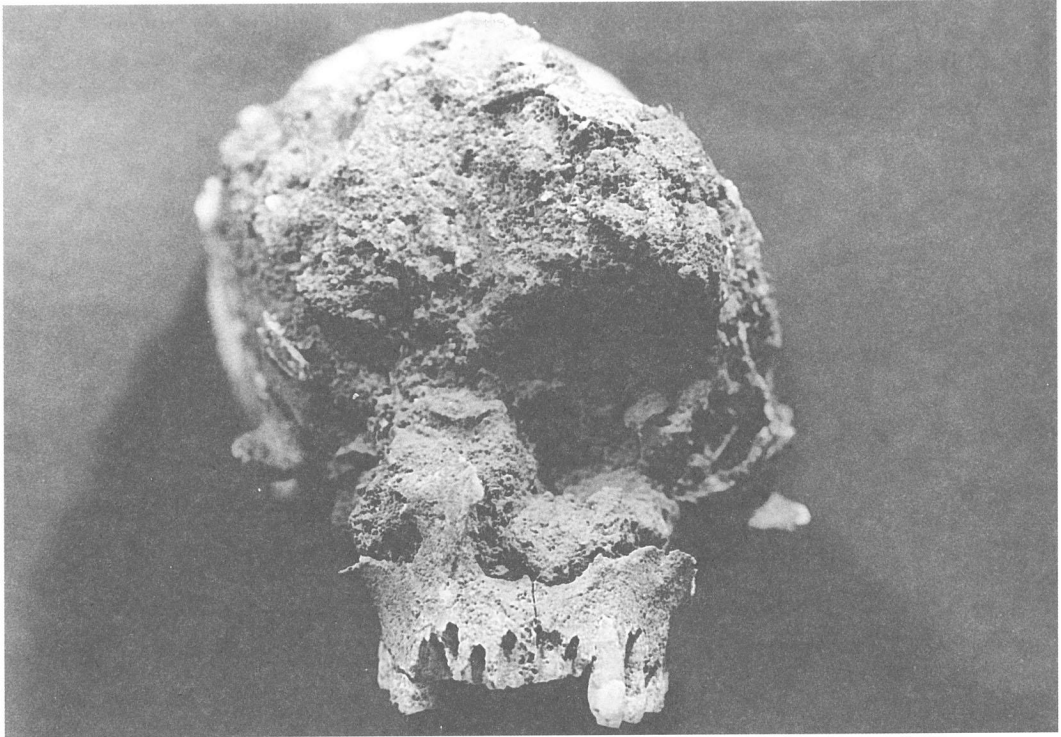


写真2 ⅢFD41出土の熟年期女性人骨の頭蓋骨正面観

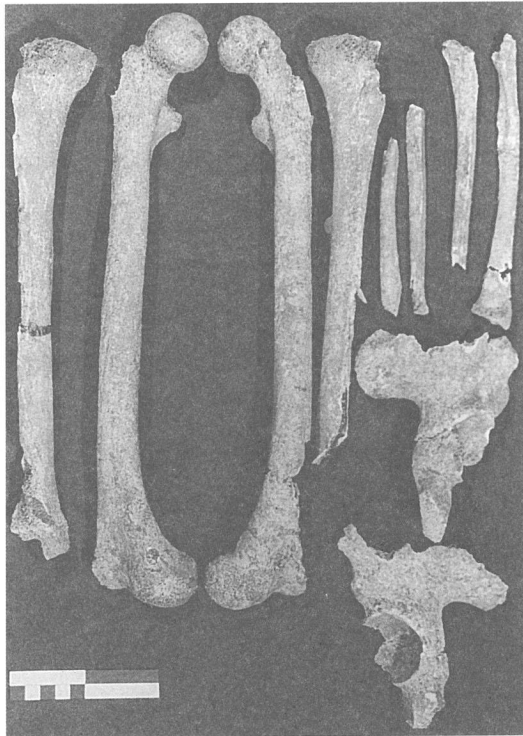


写真3 ⅢFD41出土の人骨主要四肢骨片

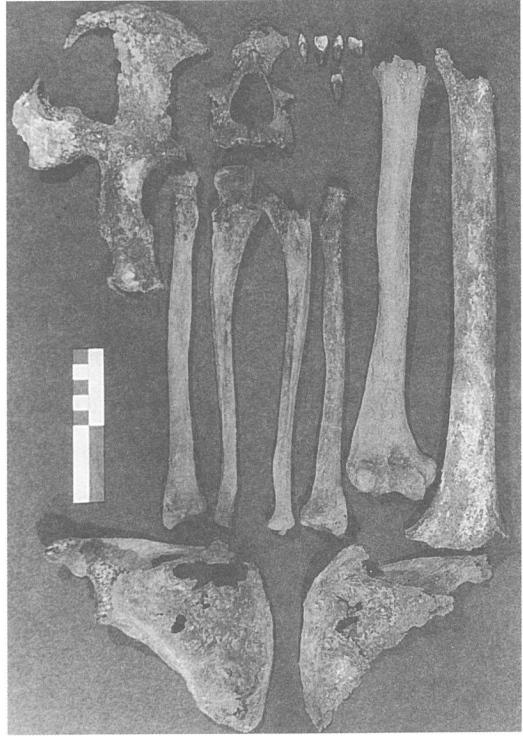


写真1 ⅡD83出土人骨の主要骨片

II M57からは保存長65.7+mmのウマ(*Equus caballus*)の上腕骨と右上顎第3後臼歯が出土している。両者とも藍鉄鉱に置換されていて、藍色に変色している。

上顎第3後臼歯は歯冠高が71.0+mmあり、歯髓腔が開放していることから、5-6才の若い個体と思われる。馬格は日本在来馬並みであろう。

II M16・17からはウマの中足骨片が10数片出土しているが、最大保存長37.1+mmと破片化していて、詳細はわからない。

II Ta1では歯冠高が52.0+のウシの上顎第3後臼歯と歯冠高64.3mmのウマの上顎臼歯が出土しているが、詳細はわからない。

J-19ではウマの右第3前臼歯が出土している。推定年齢は7-8才の壮令馬である。おそらく在来馬ほどの馬格であろう。

F-19では、5-6才の若い個体の右上顎第2後臼歯が出土している。咬耗は僅かしか進んでいない。

J-19ではウマの上顎第2前臼歯が1本出土している。歯冠高から推定される年齢は5-7才の若い壮令馬である。馬格は在来馬程度であろう。

L-4ではマグロの椎体が1個出土している。前後長は46.3+mm、椎体径は48.4+×52.2mmである。前端または後端が上下方向に切断されている。

III区内では出土地点は不明であるが、数片の焼骨が検出されている。最大保存長は8.2mmで、詳細は不明である。

III区 FD49では、ウマの全身骨格が出土した。

ほぼ円形の土壌に体軸を南北に、四肢および顔を西に向けて埋存していたことが出土時のスケッチによってわかる。

現時点では骨格は細片化していて、体高を推定できる完存部位あるいは復元可能な部位はなく、体高を算出することは不可能であるが、おそらく日本の在来馬なみの大きさであったろう。

歯の咬耗が進み、歯冠エナメル質の消失しているものや、歯冠部が咬耗し尽くされ、近心根、遠心根に分離している歯もあり、かなりの老齢馬である。

雌雄は不明である。

馬歯計測表

遺跡名 榛名平遺跡

上顎臼歯

		地点名	J-カー19	J-イー19	F-ウー19	II M57
		左右	右		右	右
		歯種	第2前臼歯	第3前臼歯	第2後臼歯	第3後臼歯
歯冠近遠心径	咬合面		36.8	28.3	26.8	26.7
〃	歯根から3cm		35.8	26.2	25.6	26.0
歯冠頬舌径	咬合面		24.1	22.0+	24.6	22.3
〃	歯根から3cm		23.0	23.9	25.3	24.8
原錐幅	咬合面		8.5		16.3	10.5
〃	歯根から3cm		7.3	9.9	17.0	9.9
歯冠高	頬側		59.8	61.9	77.9	71.0+
〃	舌側		55.4	59.8	72.4	63.6+
咬合面の傾斜			115.0	88	65	80
中附錐幅	咬合面		6.4	4.4	2.8	3.4
〃	歯根から3cm		4.7	4.3	4.0	4.2
備考					咬耗僅か	藍鉄鉱生成

(単位mm)

参考・引用文献

Levine M(1982)The use of crown height measurements and eruption-waer sequences to age horse teeth. In Wilson B., Grigson C. and Payne S. eds. Ageing and sexing Animal Bones from Archaeological Sites. Bar British Series 109,223-250.

西中川駿・松元光春(1991)遺跡出土骨同定のための基礎的研究—特に在来種および現代種の骨、歯の計測値の比較—「遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」、平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究)研究成果報告書。164-188.

野村晋一(1986)「概説馬学」。新日本教育図書株式会社、東京。

## I. 榛名平遺跡出土木材の樹種同定

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材でそれぞれ特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的には概ね属レベルでの同定が可能である。なお、木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の高い森林植生を推定することが可能である。考古学においては木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

### 2. 試料

試料は、榛名平遺跡より出土した、中世とされる漆椀7点を含む木製品218点と、杭材41点の合計259点である。

### 3. 方法

カミソリを用いて、試料から新鮮な木材の横断面（木口）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本的三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種の同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

### 4. 結果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

#### a. モミ属 *Abies* マツ科

図版1

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常

緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

b. トウヒ属 *Picea* マツ科

図版 2

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平両樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部に正常な垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なトウヒ型で、1分野に3～6個存在する。放射仮道管の有縁壁孔対の断面は、壁孔縁の先端が角張っているもの、壁孔縁に鋸歯状の突起をもつものが多く孔口も小さい。

接線断面：放射組織は単列で1～20細胞高であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりトウヒ属に同定される。トウヒ属にはアカエゾマツ、エゾマツ、トウヒがあり、アカエゾマツとエゾマツは北海道に自生し、トウヒは関東山地、中部山岳地、大台ヶ原に自生する。寒冷な亜高山帯ないし亜寒帯に分布する常緑針葉樹である。

c. スギ *Cryptomeria japonica* D. Don. スギ科

図版 3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

d. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

図版 4

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布

する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

e. サワラ *Chamaecyparis pisifera* Endl. ヒノキ科 図版5・6・7

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型とスギ型の間隔的な型のもが多く、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりサワラに同定される。サワラは岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ30m、径1mに達する。材は木理通直、肌目緻密であるが、ヒノキより軽軟でもろいが、広く用いられる。

f. ヒノキ属 *Chamaecyparis*

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔は1分野に2個存在するが、分野壁孔の型が不明瞭なものはヒノキ属とした。

g. ヒノキ科 *Cupressaceae*

横断面、放射断面、接線断面共にヒノキ科の特徴を示し、分野壁孔の型及び1分野に存在する個数が不明瞭なものはヒノキ科とした。

h. 針葉樹 *conifer*

横断面：観察することは困難であった。

放射断面：観察することは困難であった。

接線断面：仮道管と単列の同性放射組織が存在する。

本試料は、極めて薄いヘラ状の形状をしており、横断面及び放射断面の観察は困難であったので、針葉樹の同定にとどまる。

i. ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図版8

横断面：小型で放射方向にややのびた丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に2～3複合し、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性

である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

j. クルミ属 *Juglans* クルミ科

図版9

横断面：大型で丸い道管が、単独あるいは2～数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が、短接線状に1列に並ぶ傾向を示す。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はほとんどすべて平伏細胞からなるが、ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。材は耐朽、保存性は低い、狂いが少なく靱性に富んでいて、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

k. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

図版10・11

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

l. コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科

図版12

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。



以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強韌で弾力に富み、建築材などに用いられる。

m. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版13・14

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強韌で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

n. ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 図版15

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらんでいる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強韌で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

o. ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科 図版16

横断面：ごく小型で角張った道管が、単独ないし接線方向に2～3個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本ほどである。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。鞘細胞のあるものが多く、高

さは極めて高い。

以上の形質よりウツギ属に同定される。ウツギ属には、ウツギ、ヒメウツギ、ウラジロウツギなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の低木である。

p. トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図版17

横断面：小型でやや角張った道管が、単独ないし放射方向に2～数个複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する。

以上の形質よりトチノキに同定される。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmに達する。材は軟らかく緻密であるが耐朽、保存性がなく、容器などに用いられる。

q. ウコギ属 *Acanthopanax* ウコギ科 図版18

横断面：やや小型の道管が、複合しながら接線方向に規則的に長く配列する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。道管側壁の壁孔は大型で交互状である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、1～10細胞幅である。

以上の形質よりウコギ属に同定される。ウコギ属には、ミヤマウコギ、ヤマウコギ、ケヤマウコギなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の低木である。

r. 広葉樹 broad-leaved tree

横断面：道管が存在する。

放射断面：道管と放射組織が存在する。

接線断面：道管と放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。

s. 不明 unknown

本試料は完全に炭化しており、観察する為には試料を割折することが必要である。割折すれば試料を破壊してしまうので、観察にいたらなかった。

## 5. 考察

同定の結果、サワラが163点と極めて多く、次にクリが37点と続く。サワラは地域的に使われる主要木材と考えられる。クリは杭材に多く、耐水性、耐朽・保存性の高いことから使用されたと考えられる。漆碗はケヤキが主であるが、縄文時代以降現在まで伝統的に木地に用いられる樹種である。他は温帯域を主に生育する樹木が少数ずつ用いられている。以上から、榛名平遺跡の中世の木材はサワラ材が選択的に用いられ、当時の地域的な木材利用の一端が明らかになった。

### 参考文献

- 佐伯浩・原田浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 20-48.  
 佐伯浩・原田浩 (1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p. 49-100.  
 島地謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.  
 長野県埋蔵文化財センター (1999) 更埴条里・屋代遺跡遺跡群, p. 239-288.

表1 榛名平遺跡出土木材の樹種同定結果

番号	試料 (出土位置)	樹種 (和名/学名)
64	J-エー18	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
63	J-オー18	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
66	J-カー19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
62	J-キー19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
132	J-キー20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
71	J-キー20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
65	J-クー20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
68	J-クー20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
60	N-クー1	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
61	N-クー2	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
38	II M77号溝状遺構	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
67	II M57号溝状遺構	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
59	II 4号井戸址	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
70	II M77号溝状遺構	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
86	J-カー21 泥炭層	ヒノキ属 <i>Chamaecyparis</i>
39	J-カー21 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
40	J-キー19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
106	J-クー20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
74	J区埋没谷一括	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
134	II 4号井戸址	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
52	J区埋没谷一括 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
78	J区埋没谷一括 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
47	J区埋没谷一括 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
133	J-カー19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
136	J-カー19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.

番号	試料 (出土位置)		樹種 (和名/学名)
51	J-カー19 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
131	J-カー19 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
138	J-カー19 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
139	J-カー19 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
56	N-カー1 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
135	N-カー1 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
53	N-キー1 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
48	N-キー1 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
55	J-ク-20	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
54	J-ク-20	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
140	N-コ-2 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
141	N-コ-2 泥炭層	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
50	J-エ-19 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
45	II M77号溝状遺構	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
42	J-オ-19 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
8	I-エ-8	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
26	J-エ-19 泥炭層	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
14	J-エ-19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
206	J-オ-18	ヒノキ属	<i>Chamaecyparis</i>
207	J-オ-18	広葉樹	broad-leaved tree
208	J-オ-18	ヒノキ属	<i>Chamaecypari</i>
209	J-オ-18	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
18	J-オ-19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
13	J-カー19	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
37	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
30	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
210	J-カー19	ヒノキ属	<i>Chamaecypari</i>
211	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
212	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
213	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
214	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
215	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
216	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
217	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
218	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
219	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
220	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
221	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
222	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
223	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
224	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
225	J-カー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
12	N-カー1	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
46	J-キー19	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
19	J-キー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
27	J-キー19	サワラ	<i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
226	J-キー19	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.

番号	試料 (出土位置)	樹種 (和名/学名)
227	J-キ-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
49	J-キ-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
24	J-キ-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
36	J-キ-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
228	J-キ-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
229	J-キ-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
230	J-キ-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
23	J-ク-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
35	J-ク-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
231	J-ク-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
232	J-ク-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
233	J-ク-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
234	J-ク-19	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
9	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
10	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
44	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
17	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
21	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
28	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
20	J-ク-20	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
29	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
235	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
33	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
236	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
34	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
31	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
32	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
237	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
238	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
239	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
240	J-ク-20	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
241	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
242	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
243	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
244	J-ク-20	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
245	J-ク-20	スギ <i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
246	J-ク-20	ヒノキ属 <i>Chamaecyparis</i>
247	J-ク-20	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
248	J-ク-20	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
249	J-ク-20	ヒノキ属 <i>Chamaecyparis</i>
250	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
251	J-ク-20	ヒノキ科 <i>Cupressaceae</i>
252	J-ク-20	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
253	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
254	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
255	J-ク-20	針葉樹 conifer
256	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.

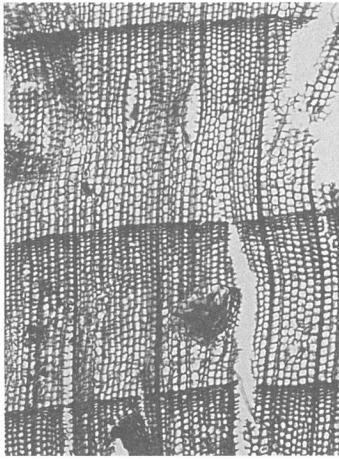
番号	試料 (出土位置)	樹種 (和名/学名)
257	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
258	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
259	J-ク-20	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
16	N-ク-2	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
15	N-ク-2	ヒノキ科 <i>Cupressaceae</i>
25	N-ク-2	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
260	N-ク-2	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
261	N-ク-2	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
11	J区埋没谷一括	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
22	J区埋没谷一括	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
262	J区埋没谷一括	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
100	II M77号溝状遺構	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
69	II M77号溝状遺構	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
105	II M77号溝状遺構	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
72	II M77号溝状遺構	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
82	II M77号溝状遺構	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
43	II M77号溝状遺構	ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
127	J-エ-18 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
111	J-エ-18 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
103	J-エ-18 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
73	J-エ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
112	J-エ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
81	J-エ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
98	J-オ-18 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
96	J-オ-19 泥炭層	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
107	J-オ-19 泥炭層	トウヒ属 <i>Picea</i>
97	J-カ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
108	J-カ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
124	J-カ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
129	J-カ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
122	J-カ-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
130	J-カ-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
109	J-カ-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
80	N-カ-2 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
79	J-キ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
121	J-キ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
119	J-キ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
104	J-キ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
115	J-キ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
114	J-キ-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
113	J-キ-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
41	J-キ-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
102	N-キ-1 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
110	N-キ-1 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
101	N-キ-1 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
99	J-ク-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
117	J-ク-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.

番号	試料 (出土位置)	樹種 (和名/学名)
118	J-ク-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
116	J区埋没谷一括 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
95	J区埋没谷一括 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
88	II M57号溝状遺構	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
263	II M57号溝状遺構	コナラ属コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
264	II M77号溝状遺構	不明 unknown
89	II M77号溝状遺構	モミ属 <i>Abies</i>
147	J-エ-18 泥炭層	ウツギ属 <i>Dutzia</i>
265	J-エ-18 泥炭層	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc
87	J-エ-19 泥炭層	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
148	J-エ-19 泥炭層	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
91	J-エ-19 泥炭層	コナラ属コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
137	J-オ-19 泥炭層	広葉樹 broad-leaved tree
93	J-カ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
75	J-カ-19 泥炭層	スギ <i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
77	J-カ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
266	J-カ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
267	J-カ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
83	J-キ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
125	J-キ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
76	J-キ-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
92	J-キ-19 泥炭層	ウコギ属 <i>Acanthopanax</i>
268	J-キ-19 泥炭層	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc
142	J-キ-20 泥炭層	ヤナギ属 <i>Salix</i>
94	N-キ-1 泥炭層	スギ <i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
269	J-ク-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
143	J-ク-20 泥炭層	ウコギ属 <i>Acanthopanax</i>
128	J-ク-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
123	J-ク-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
126	J-ク-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
270	J-ク-20 泥炭層	コナラ属コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
84	N-ク-1 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
126	N-ク-1 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
149	N-ク-2	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
271	N-ク-2	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
272	N-コ-2 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
150	J区埋没谷一括 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
273	J区埋没谷一括 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
144	J-オ-20 泥炭層	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
145	II P4637	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
146	J-ク-19 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
202	集石遺構	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
200	II D86号土坑 No.1	ヒノキ科 Cupressaceae
199	II D86号土坑 No.2	ヒノキ科 Cupressaceae
201	II D86号土坑 No.3	ヒノキ科 Cupressaceae
120	II M77号溝状遺構	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
57・58	J-ク-20 泥炭層	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.

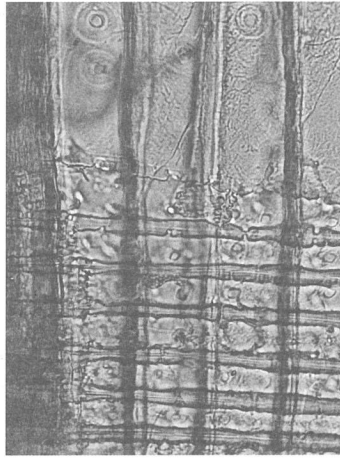
番号	試料 (出土位置)	樹種 (和名/学名)
1	J-ウ-18	ケヤキ <i>Zelkova serrata</i> Makino
5	J-オ-19 泥炭層	ケヤキ <i>Zelkova serrata</i> Makino
2	J-カ-19	ケヤキ <i>Zelkova serrata</i> Makino
4	J-カ-19	ケヤキ <i>Zelkova serrata</i> Makino
3	J-カ-19	トチノキ <i>Aesculus turbinata</i> Blume
7	J-カ-19	ケヤキ <i>Zelkova serrata</i> Makino
6	II M77号溝状遺構	クルミ属 <i>Juglans</i>
153	杭1	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
164	杭2-1 165 杭2-2	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
179	杭3-1 188 杭3-2	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
152	杭4	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
155	杭5	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
169	杭6-1-1 177 杭6-1-2-1	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
203	杭6-2-1 193 杭6-2-2	コナラ属コナラ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>
159	杭7	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
166	杭9	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
151	杭10	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
174	杭11	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
154	杭12	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
163	杭13	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
157	杭14	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
158	杭15	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
161	杭17	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
181	杭18-1 171 杭18-2 196 杭18-3	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
162	杭19	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
175	杭20	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
189	杭21-1 205 杭21-2	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
156	杭22-1 176 杭22-2	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
170	杭23	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
172	杭24-1 179 杭24-2	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
182	杭25-1 204 杭25-2	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
173	杭27	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
178	杭28	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
180	杭29-1 194 杭29-2	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
160	杭30	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
185	杭31	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
168	杭32	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
191	杭33	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
190	杭35	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
186	杭39	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
187	杭40	クルミ属 <i>Juglans</i>
183	杭42	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
90	II 杭1	サワラ <i>Chamaecyparis pisifera</i> Endl.
167	II 杭2	クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.
198	II 杭4	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
192	II 杭10	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>



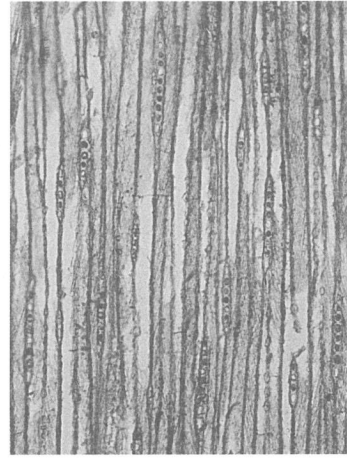
榛名平遺跡出土木材の顕微鏡写真 I



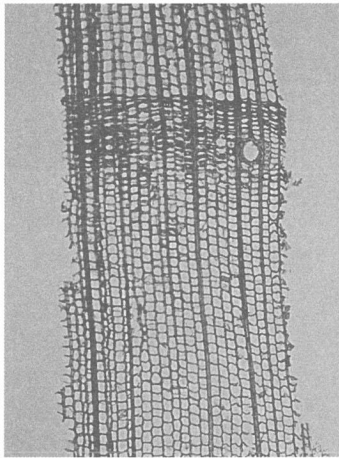
横断面 ————— : 0.5mm  
1. 173 NHN II M77 モミ属



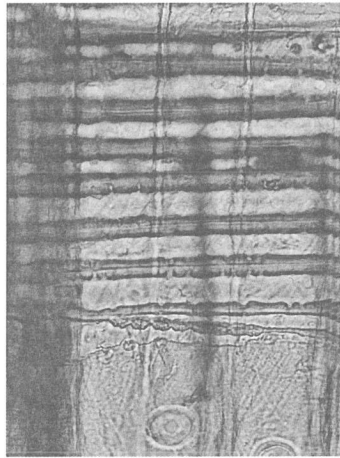
放射断面 ————— : 0.05mm



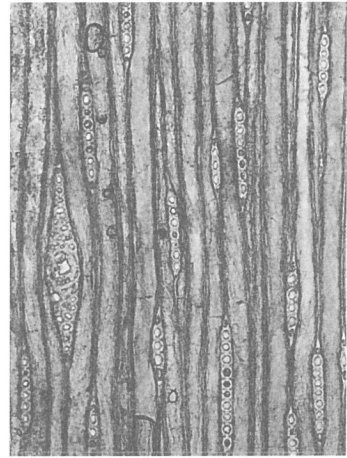
接線断面 ————— : 0.2mm



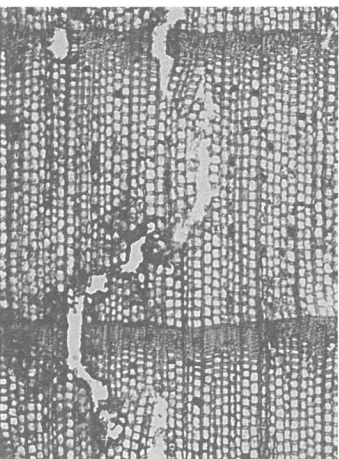
横断面 ————— : 0.5mm  
2. 145 NHN J-オー-19 泥炭層



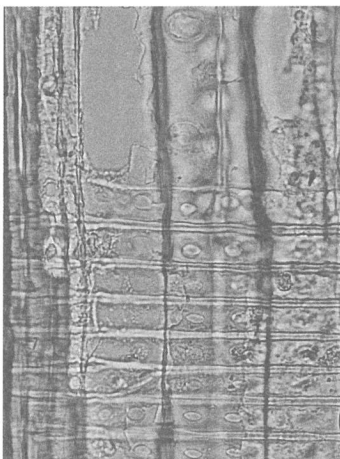
放射断面 ————— : 0.05mm  
トウヒ属



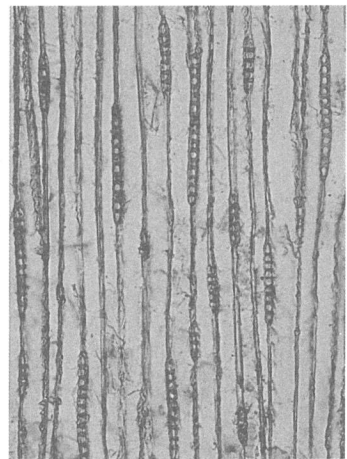
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm  
3. 37 NHN 泥炭層 スギ

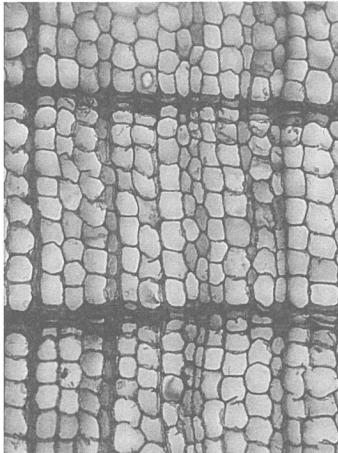


放射断面 ————— : 0.05mm

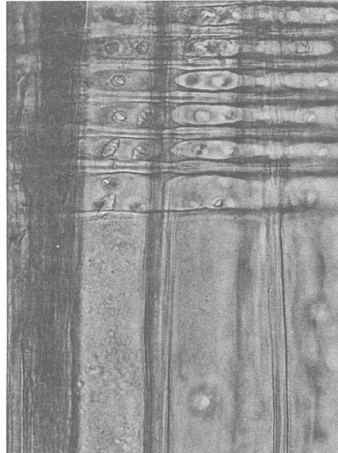


接線断面 ————— : 0.2mm

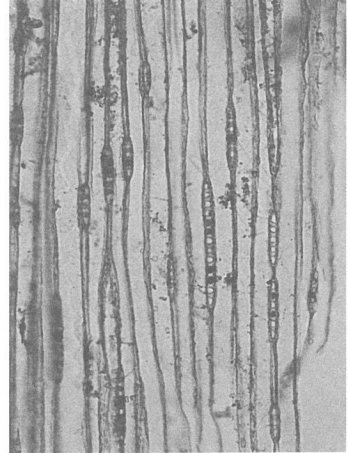
榛名平遺跡出土木材の顕微鏡写真 II



横断面 ————— : 0.2mm

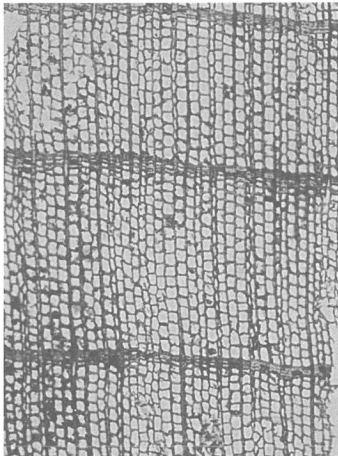


放射断面 ————— : 0.05mm

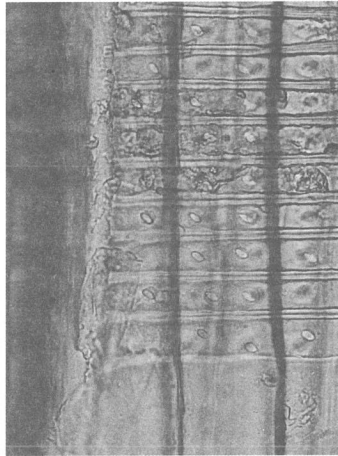


接線断面 ————— : 0.2mm

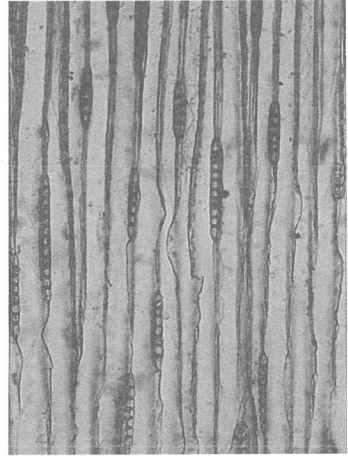
4. 14 NHN II M77 曲物 ヒノキ



横断面 ————— : 0.2mm



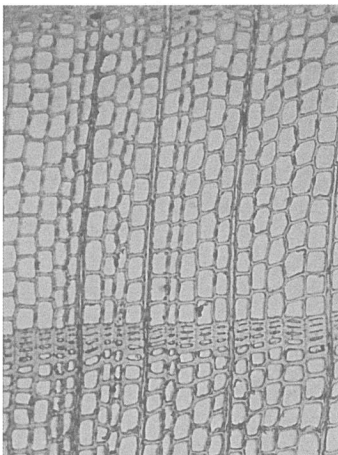
放射断面 ————— : 0.05mm



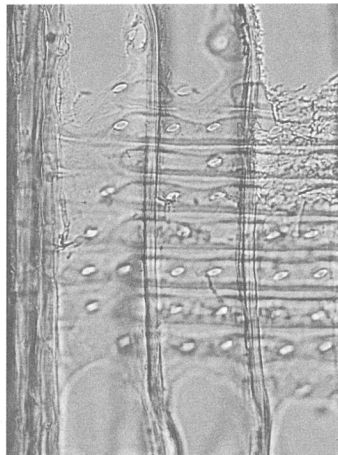
接線断面 ————— : 0.2mm

5. 17 NHN J-キー-19 泥炭層

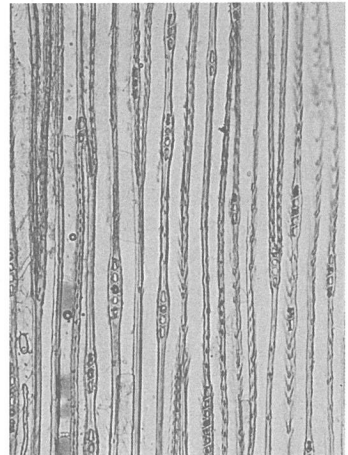
サワラ



横断面 ————— : 0.2mm



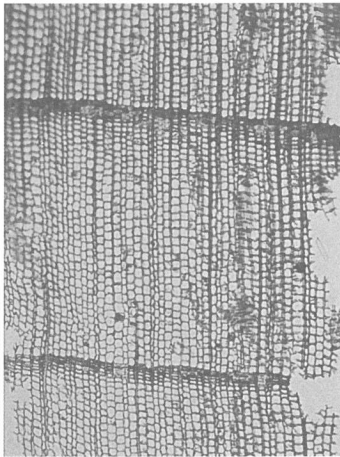
放射断面 ————— : 0.05mm



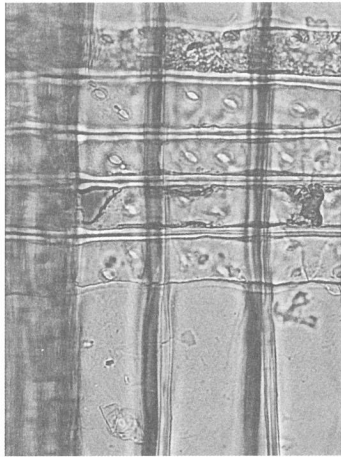
接線断面 ————— : 0.2mm

6. 22 NHN J区埋没谷一括 泥炭層 サワラ

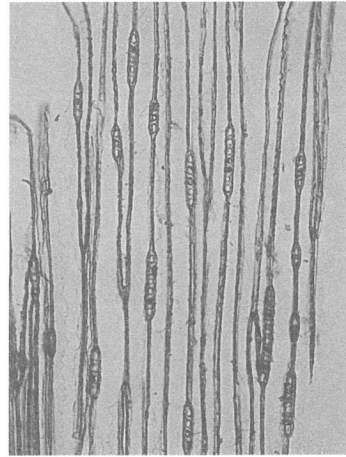
榛名平遺跡出土木材の顕微鏡写真 Ⅲ



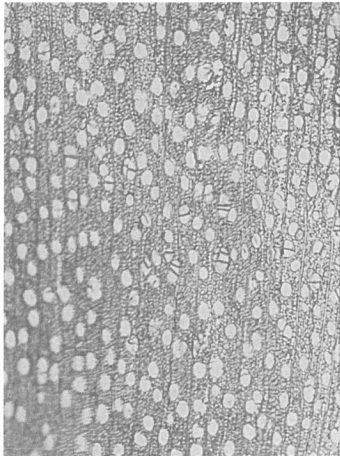
横断面 ————— : 0.5mm  
7. 26 NHN J-カー19 泥炭層



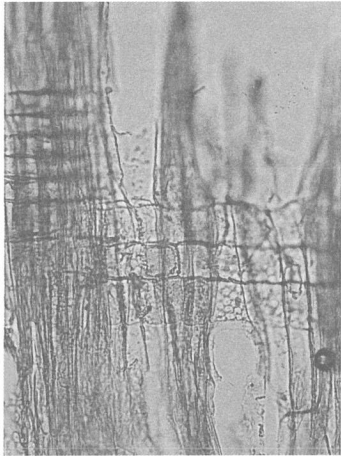
放射断面 ————— : 0.05mm  
サワラ



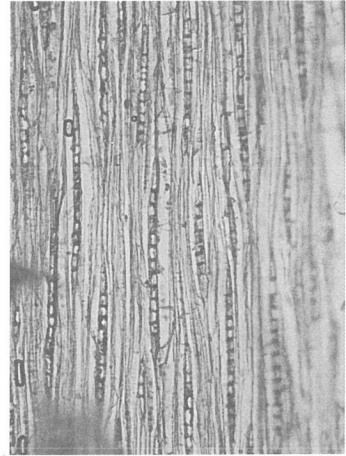
接線断面 ————— : 0.2mm



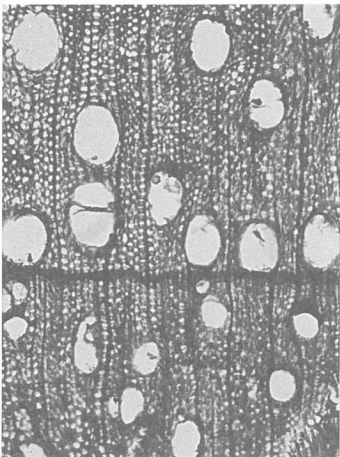
横断面 ————— : 0.5mm  
8. 190 NHN J-キー19 泥炭層



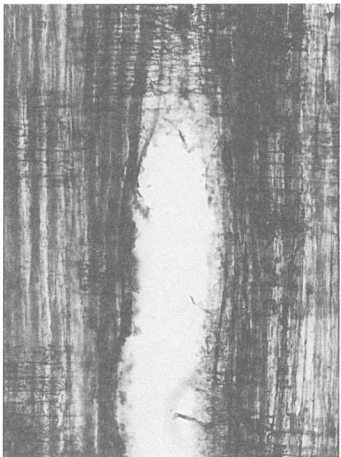
放射断面 ————— : 0.1mm  
ヤナギ属



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm  
9. II M77 5号井戸裏側 漆椀



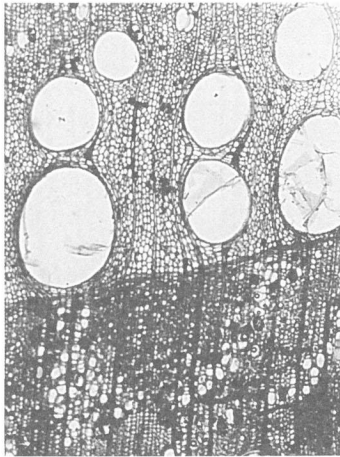
放射断面 ————— : 0.2mm  
クルミ属



接線断面 ————— : 0.2mm



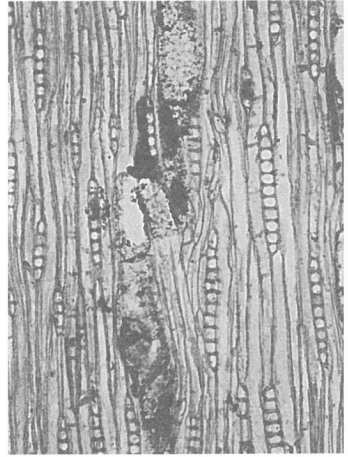
榛名平遺跡出土木材の顕微鏡写真 IV



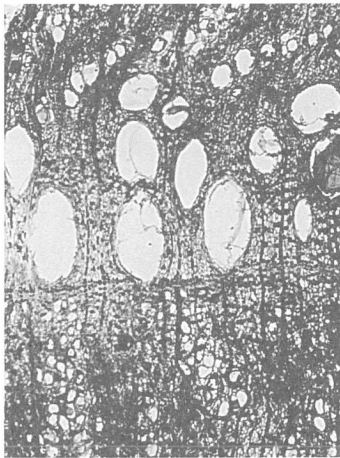
横断面 ————— : 0.5mm  
10. 杭18 クリ



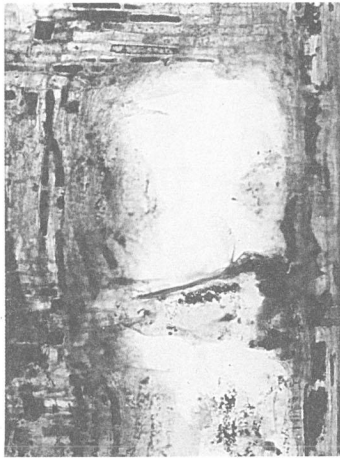
放射断面 ————— : 0.2mm



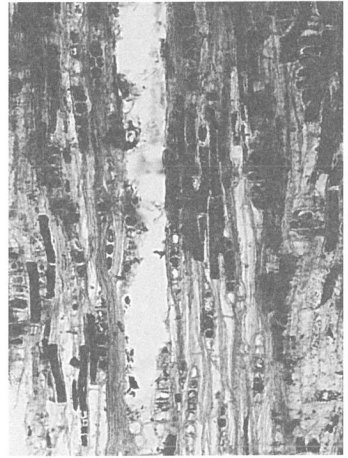
接線断面 ————— : 0.2mm



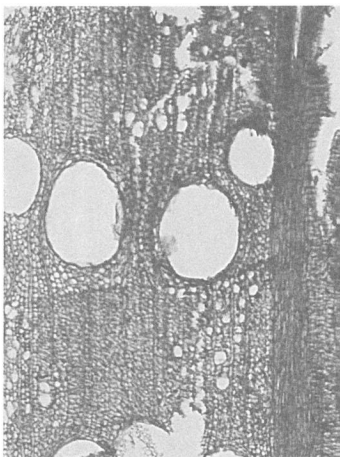
横断面 ————— : 0.5mm  
11. 杭6-1 クリ



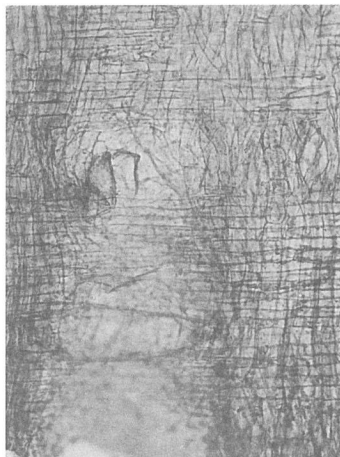
放射断面 ————— : 0.2mm



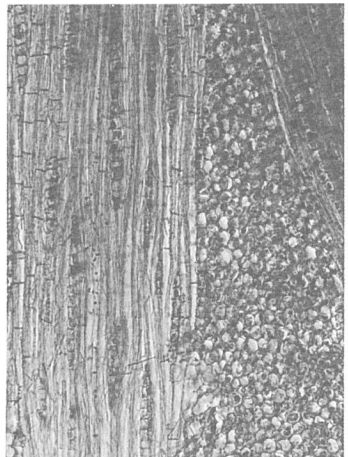
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm  
12. 171 NHN II M57 コナラ属コナラ節

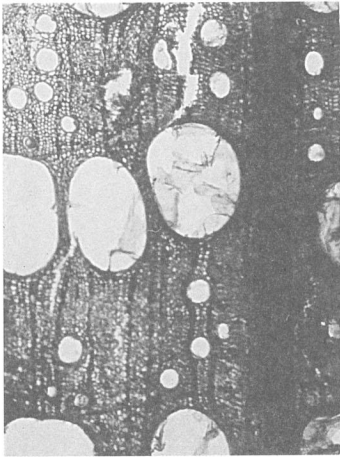


放射断面 ————— : 0.2mm



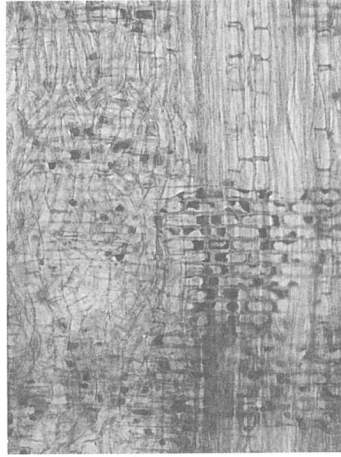
接線断面 ————— : 0.2mm

榛名平遺跡出土木材の顕微鏡写真 V

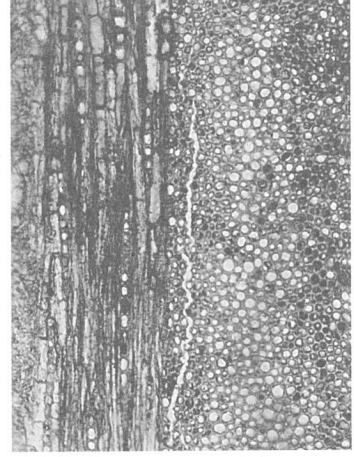


横断面 ————— : 0.5mm

13. 201 NHN N-ター22 コナラ属クスギ節



放射断面 ————— : 0.2mm

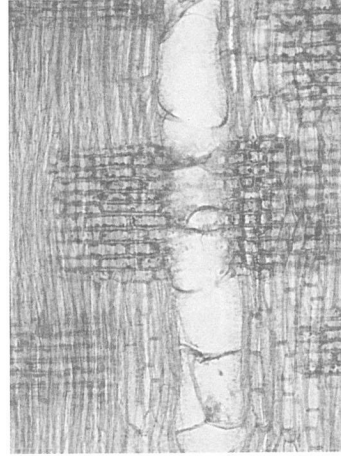


接線断面 ————— : 0.2mm

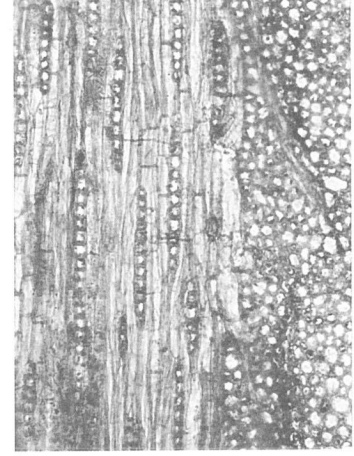


横断面 ————— : 0.5mm

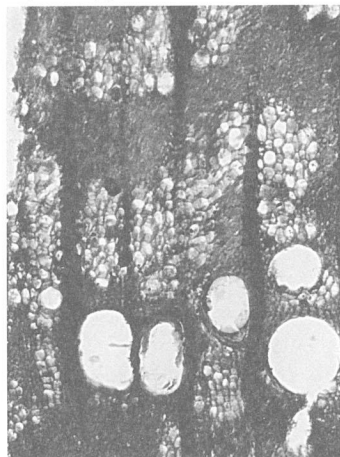
14. II 杭10 II M77 コナラ属クスギ節



放射断面 ————— : 0.2mm

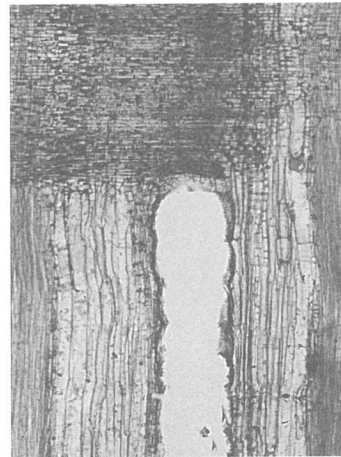


接線断面 ————— : 0.2mm

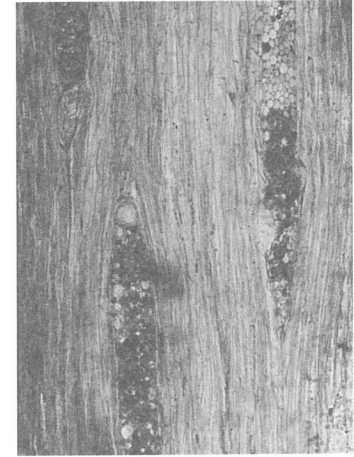


横断面 ————— : 0.5mm

15. J-カー19 No.2 漆碗 ケヤキ

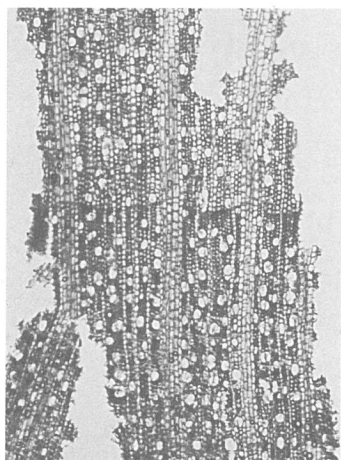


放射断面 ————— : 0.5mm



接線断面 ————— : 0.2mm

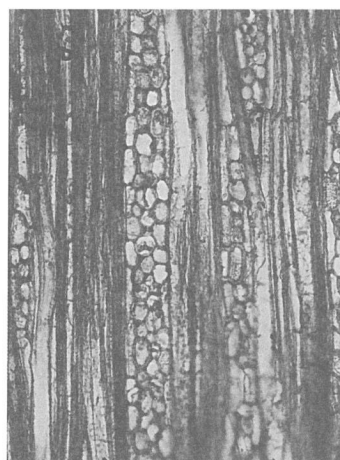
榛名平遺跡出土木材の顕微鏡写真 IV



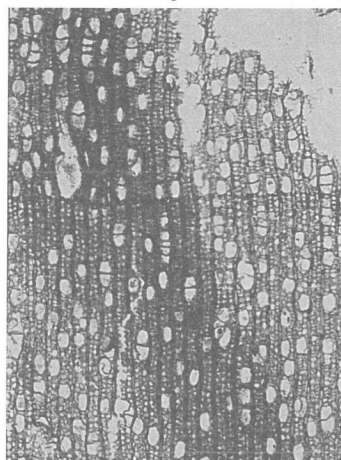
横断面 ————— : 0.5mm  
16. 174 NHN J-エー18 泥炭層



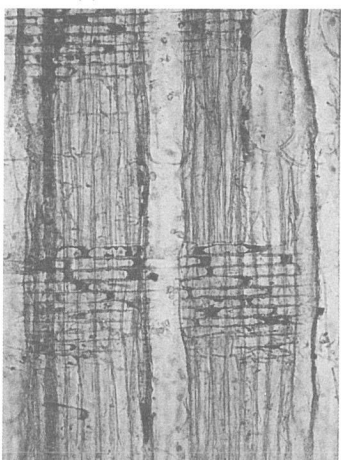
放射断面 ————— : 0.2mm  
ウツギ属



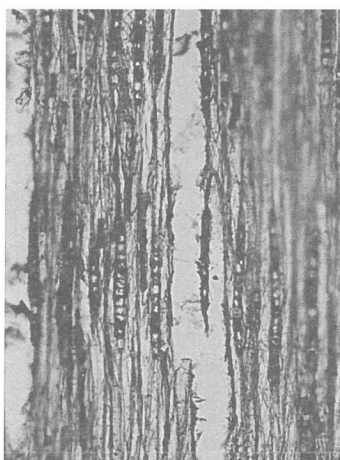
接線断面 ————— : 0.2mm



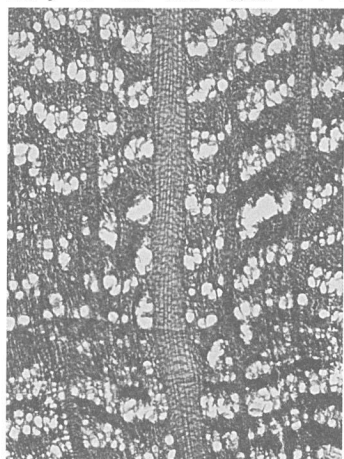
横断面 ————— : 0.5mm  
17. J-カー19 No.3 漆碗 トチノキ



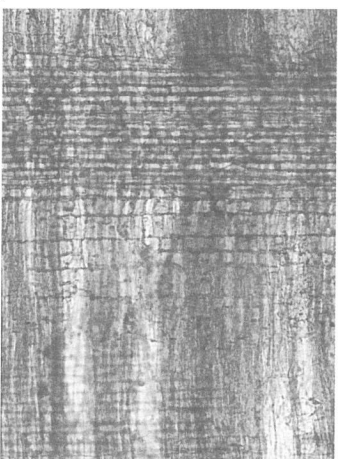
放射断面 ————— : 0.2mm



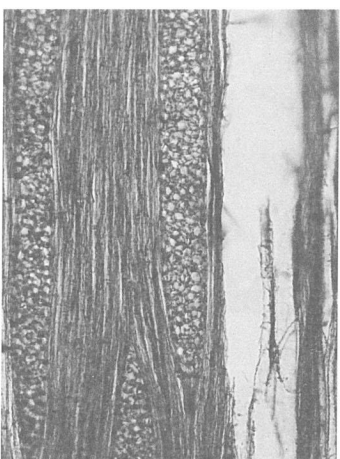
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm  
18. 193 NHN J-クー20 泥炭層



放射断面 ————— : 0.2mm  
ウコギ属



接線断面 ————— : 0.2mm

## II. 榛名平遺跡における種実同定

### 1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また、出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

### 2. 試料

試料はⅡD92、ⅡD125、ⅡTa30の三遺構の12試料である。

### 3. 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

### 4. 結果

#### (1) 分類群

草本5が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に形態的特徴を記す。

#### 〔草本〕

オオムギ *Hordeum vulgare* L. 果実 (炭化) イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

コムギ *Triticum aestivum* L. 果実 (炭化) イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。比較的四角い形を呈し、短い。

イネ *Oryza sativa* L. 果実 (炭化) イネ科

炭化している。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。

ヒエ *Echinochloa utilis* Vigna 果実 (炭化) イネ科

炭化している。類円形を呈し、胚の部分がくぼむ。

ササゲ属 *Vigna* 種子 (炭化) マメ科

黒色で炭化し楕円形を呈す。へそは縦に細長い。ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲな

どの栽培植物が含まれるが、現状の研究では識別は困難である。

## (2) 種実群集の特徴

ⅡD92ではイネ果実が多く、ヒエとササゲ属が混じる。ⅡD125はイネ果実がほとんどである。Ta30ではオオムギ果実とササゲ属種子が多く、コムギとイネが混じる。いずれも多量であり、イネとヒエは総計3万個以上にもなり、オオムギとササゲ属は3千個前後にもなる。

## 5. 考察

同定されたのはオオムギ、コムギ、イネ、ヒエ、ササゲ属の種実であり、いずれも栽培植物で炭化している。遺構ごとに偏りもみられ、種類ごとに火を受けて炭化したものが遺構内に堆積したとみられる。中世におけるオオムギ、コムギ、ササゲ属などの畑作物の出土例は増加しており、中世における畑作の盛行が示唆される。

## 参考文献

- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p. 276-283.
- 吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p. 2-14.
- 佐藤敏也 (1988) 弥生のイネ. 弥生文化の研究第2巻生業, 雄山閣出版株式会社, p. 97-111.
- 金原正明・粉川昭平 (1992) 箸尾遺跡10・11次調査の花粉分析・種実同定. 奈良県遺跡調査概報 1991年度箸尾遺跡第10・11次調査概報, 橿原考古学研究所, p. 30-38.



表1 榛名平遺跡Ⅱ区出土の炭化種実

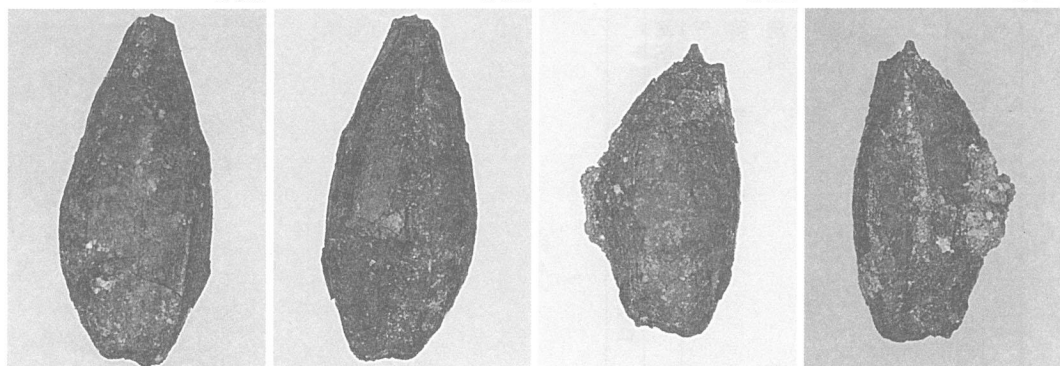
※数量は重量比で算出

分類群		ⅡD92						ⅡD125		ⅡTa30				
学名	和名	部位	Ⅱ区-①	Ⅱ区-②	Ⅱ区-③	Ⅱ区-④	No.1	No.2	No.3	①	②	③		
Herb	草本													
<i>Hordeum vulgare</i> L.	オオムギ	果実								1	2190	1020	86	
<i>Triticum aestivum</i> L.	コムギ	果実									360	16	20	
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	5000	1170	2	4020	465	1270		31600	65	55	1	
<i>Echinochloa utilis</i>	ヒエ	果実			230				25750					
<i>Vigna</i>	ササゲ属	種子(完形)					4	1	20					
		種子(半形)							6					
Total	合計		5000	1170	232	4020	469	1271	25776	31600	66	4870	1382	327
備考			DNA③ DNA① DNA②						DNA④ 炭が多い		炭が多い			

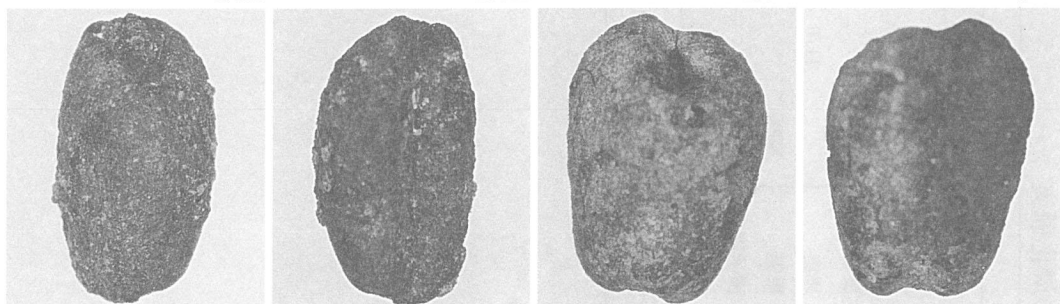
榛名平遺跡の種実 I



1 オオムギ果実 1.0mm 2 同左裏 1.0mm 3 オオムギ果実 1.0mm 4 同左裏 1.0mm



5 オオムギ果実 1.0mm 6 同左裏 1.0mm 7 オオムギ果実 1.0mm 8 同左裏 1.0mm

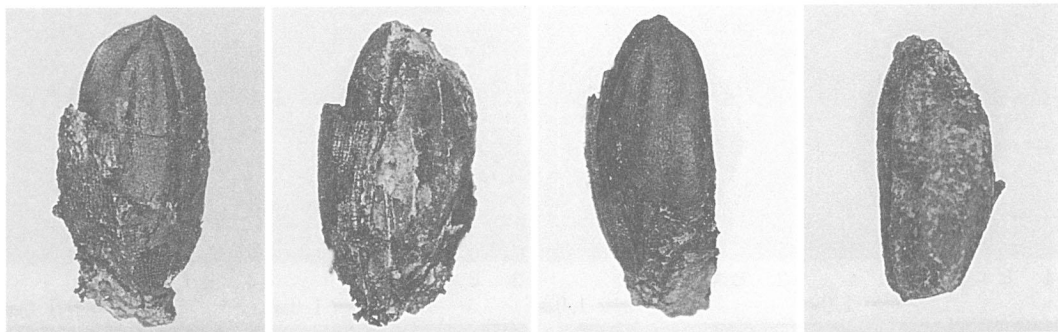


9 コムギ果実 1.0mm 10 同左裏 1.0mm 11 コムギ果実 1.0mm 12 同左裏 1.0mm

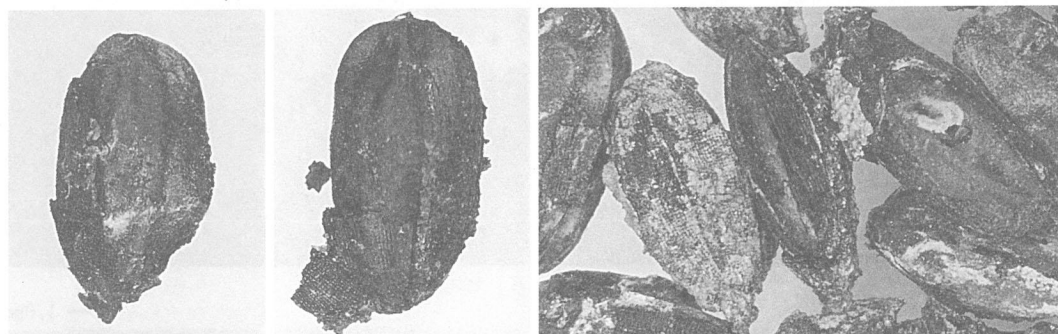


13 コムギ果実 1.0mm 14 同左裏 1.0mm 15 コムギ果実 0.5mm 16 同左裏 0.5mm

榛名平遺跡の種実 II



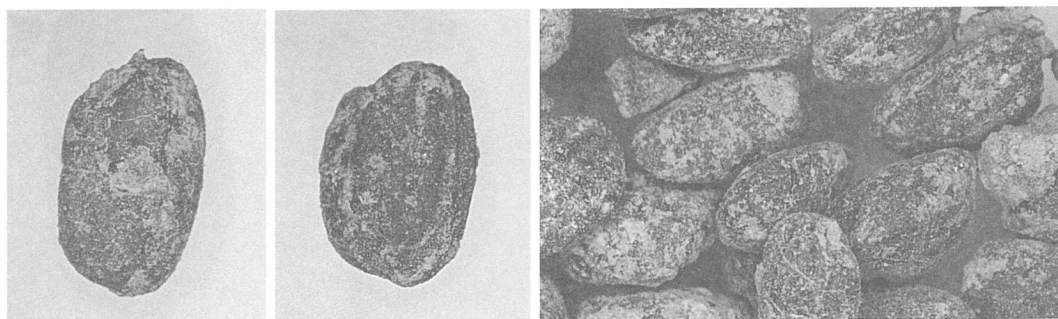
1 II D92 II 区 イネ果実(穎) 2 II D92 II 区 イネ果実(穎) 3 II D92 II 区 イネ果実(穎) 4 II D92 II 区 イネ果実(穎)  
 1.0mm 1.0mm 1.0mm 1.0mm



5 II D92 II 区 イネ果実(穎) 6 II D92 II 区 イネ果実(穎) 7 II D92 II 区 イネ果実(穎)  
 1.0mm 1.0mm 1.0mm

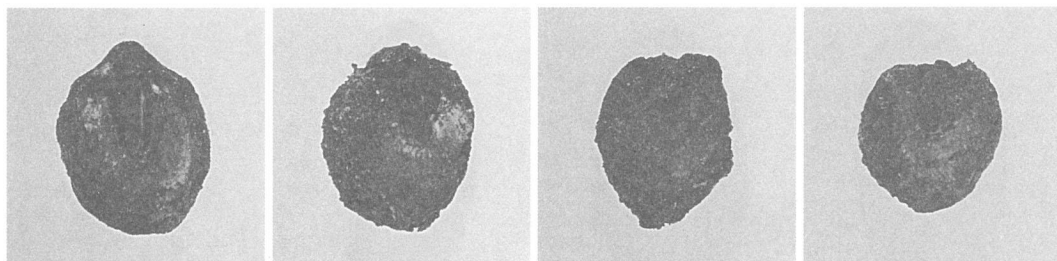


8 II D125 イネ果実 9 II D125 イネ果実 10 II D125 イネ果実 11 II D125 イネ果実  
 1.0mm 1.0mm 1.0mm 1.0mm

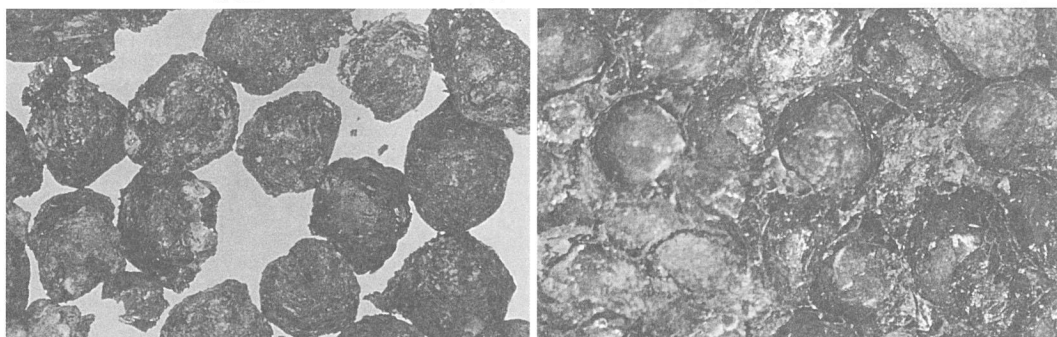


12 II D125 イネ果実 13 II D125 イネ果実 14 II D125 イネ果実  
 1.0mm 1.0mm 1.0mm

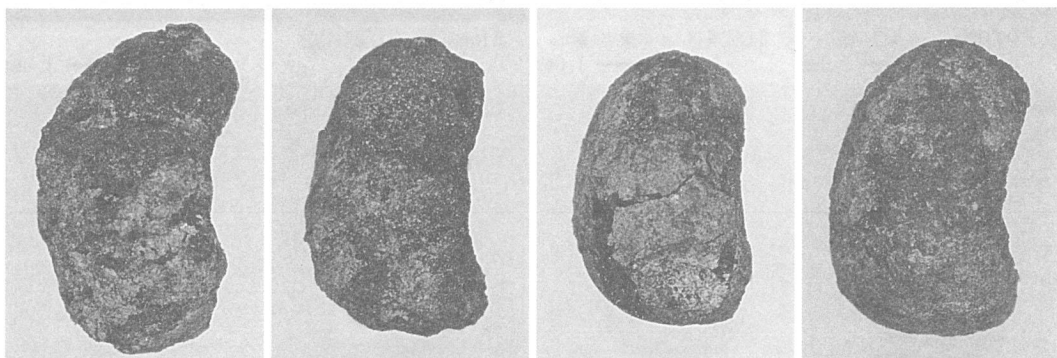
榛名平遺跡の種実 III



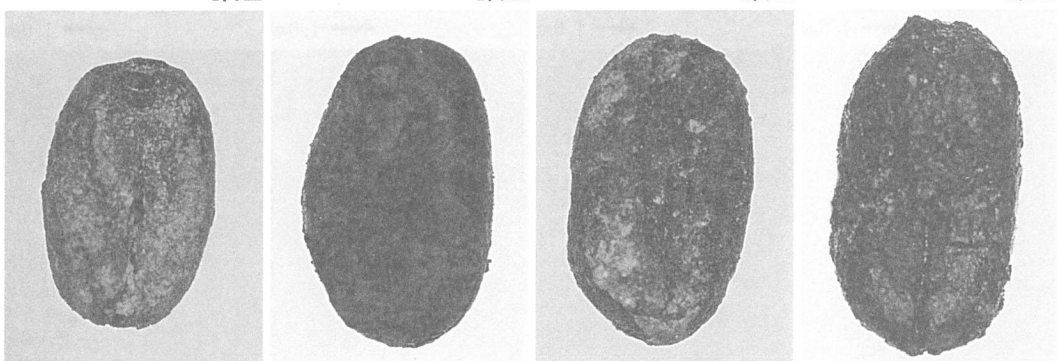
1 ヒエ果実 1.0mm 2 ヒエ果実 1.0mm 3 ヒエ果実 1.0mm 4 ヒエ果実 1.0mm



5 ヒエ果実 1.0mm 6 ヒエ果実 1.0mm



7 ササゲ属種子 1.0mm 8 ササゲ属種子 1.0mm 9 ササゲ属種子 1.0mm 10 ササゲ属種子 1.0mm



11 ササゲ属種子 1.0mm 12 ササゲ属種子 1.0mm 13 ササゲ属種子 1.0mm 14 ササゲ属種子 1.0mm

### Ⅲ. 榛名平遺跡出土炭化米の DNA 分析

静岡大学 佐藤洋一郎

#### 1. はじめに

DNA (デオキシリボ核酸) はあらゆる生物のほとんどの細胞内において、いわゆる遺伝子の本体をなし生命活動の設計図ともなっている物質である。最近の生命科学の発達によって遺体から DNA を取り出すことも可能になり、ミイラ、昆虫化石などからの DNA 抽出の報告例もある。

さて、ここ1, 2年、日本の弥生時代から近世にかけての遺跡から出土した炭化米の DNA 分析から、40%を超える高い頻度で熱帯ジャポニカ品種が混ざっていることがわかってきた (佐藤ら、1999; 第16回文化財科学会報、p8-9)。熱帯ジャポニカは近世の遺跡からも出土しているが、頻度は時代が新しくなるにつれて低くなっていくようである。ただし中世以降の分析事例が少なく、低下がある時期に急速におきたものかそれとも漸減してきたものかなど詳しいことは不明である。そこで本遺跡の出土炭化米中にも同じように熱帯ジャポニカがあるかどうか、あるとすればその割合に違いがあるか否かは興味をひくところである。

#### 2. 試料と方法

今回分析に供したイネ種子は玄米状態で炭化の状態が進んでいたが、定法の通り1粒ずつからの抽出を試みた。分析に供したのは8粒の種子で、これら8粒についてはデジタルカメラで写真撮影を行い、その映像に基づいて玄米の長さおよび幅を測定した。これによっていわゆる短粒、長粒の調査を行った。またサンプルのすべてから DNA 抽出を行った。DNA 抽出は炭化米からの DNA 抽出の定法 (アルカリ SDS 法に修正を加えたもの) によった。

抽出された DNA は、以下に示す4つのプライマー (DNA の一部分を増幅する時、その増幅開始点と終点を決めるための短い DNA 断片) を用いて増幅を行った。ここで使用したプライマーは以下の4種類である。

- 1) インディカかジャポニカかを判定するプライマー
- 2) 葉緑体 DNA にあって種の判別に用いられる PS-ID 領域を増幅するプライマー
- 3) ジャポニカのうち、温帯ジャポニカか熱帯ジャポニカかを判定するプライマー CMNB-20
- 4) 同じく温帯-熱帯ジャポニカを判定するプライマー CMNB-22

### 3. 所見

今回のサンプルからは1)、3) および4) のプライマーによる増幅には成功したが、2) のプライマーではDNAは増幅されなかった。なお、鑑定にもちいたサンプルすべてがジャポニカの反応を示し、これらがすべてジャポニカに属するものと推定された。

プライマー CMNB-20およびCMNB-22による増幅の結果を図1に示した。これによると、8のサンプル中、温帯ジャポニカの反応を示したものはみられなかったが、サンプル1およびサンプル3が熱帯型に固有のバンドを持っていた。よって今回の結果から、本遺跡で栽培されていたイネのおよそ25%程度が熱帯ジャポニカであったと考えるのが自然である。なお今回の分析で温帯ジャポニカと判定されるものが検出されなかったが、このことは必ずしも温帯ジャポニカがなかったことを意味するわけではない。したがって長野県下でも中世には熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカが混在していたのであろう。なお本遺跡出土の玄米の長さとの幅の比は中世のものとしてはやや大きい(細長い)値を示した(長幅比1.54から2.09)。熱帯ジャポニカと判定されたものは、長幅比が2.09のもの(一番細長かった個体)および3番目に細長かった個体であった。よって本遺跡出土の種子がやや細長い方に偏った理由の一つは熱帯ジャポニカが比較的多く含まれていたことによるものと思われる。

### 文献

佐藤洋一郎(1999) 古代米の遺伝的特性(1) - 2つの japonica の混在 - 日本文化財科学会第16回大会研究 要旨集, P8-9.

表1 榛名平遺跡出土の炭化米のDNA分析

サンプル	DNA分析	
1	J	Tr
2	J	
3	J	Tr
4	J	
5	J	
6	J	
7	J	
8	J	

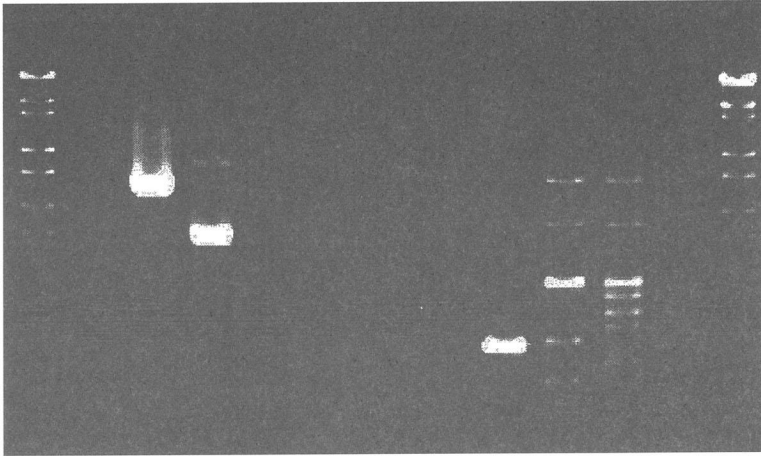
J: ジャポニカ, Tr: 熱帯型

表2 玄米のサイズおよび形状

	長さ (mm)	幅 (mm)	長幅比
1	5.2	2.5	2.09
2	4.7	2.7	1.74
3	5.2	2.8	1.84
4	5.9	3.2	1.86
5	5.2	2.8	1.84
6	5.6	3.1	1.80
7	4.8	3.1	1.54
8	4.5	2.5	1.82

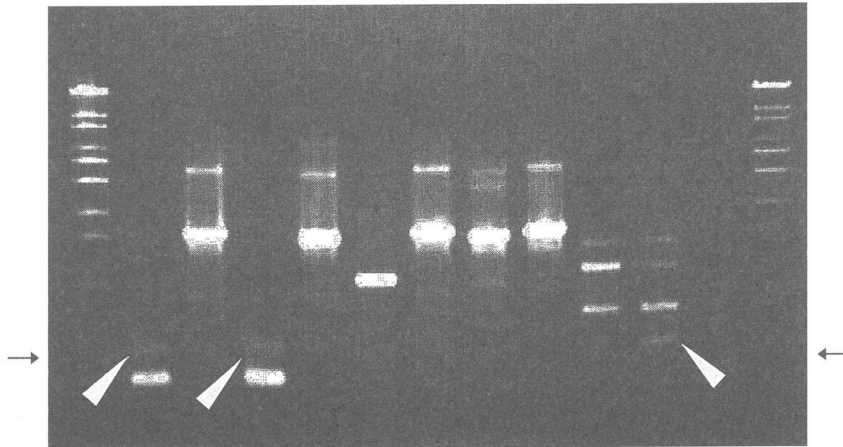
プライマーCMNB-20

M 1 2 3 4 5 6 7 8 Tm Tr N.C.M



プライマーCMNB-22

M 1 2 3 4 5 6 7 8 Tm Tr N.C.M



Tr) 熱帯ジャポニカ

Tm) 温帯ジャポニカ

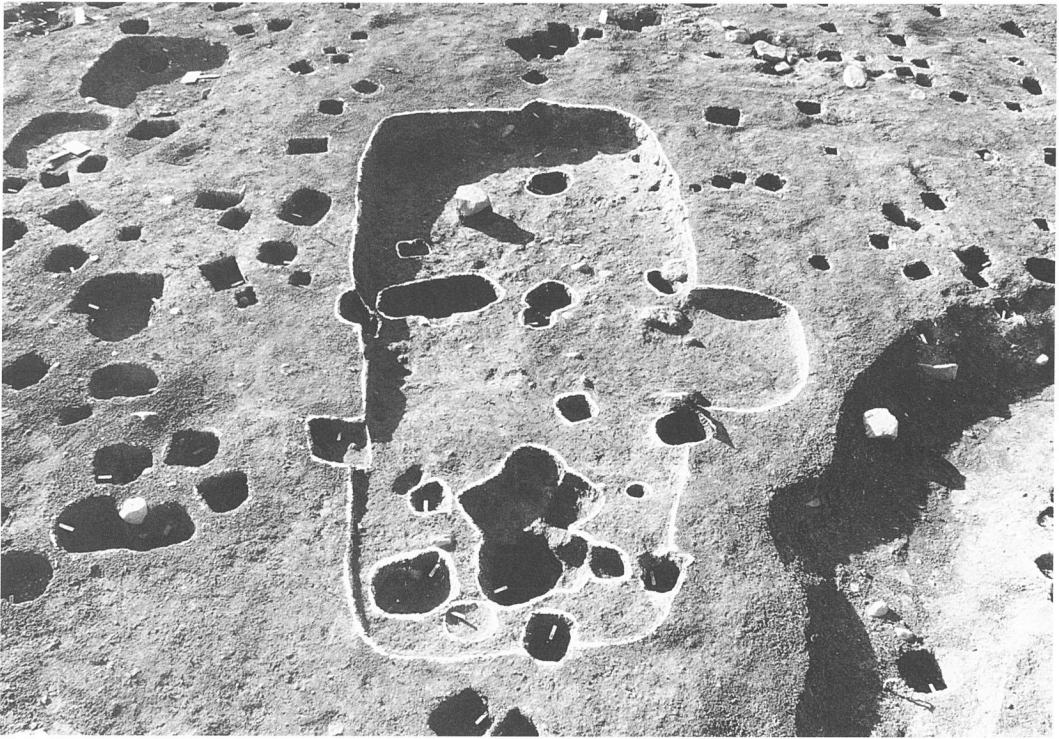
N.C.) ネガティブ・コントロール

M) マーカ

図1 榛名平遺跡出土の炭化米の泳動写真



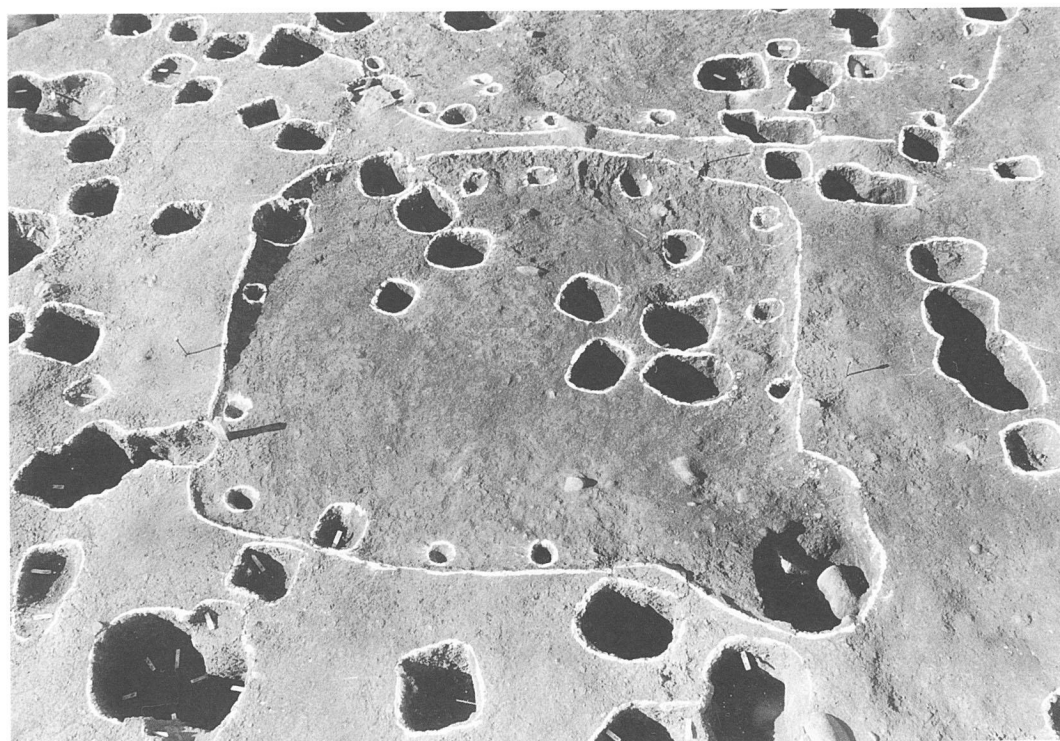
# 版 图



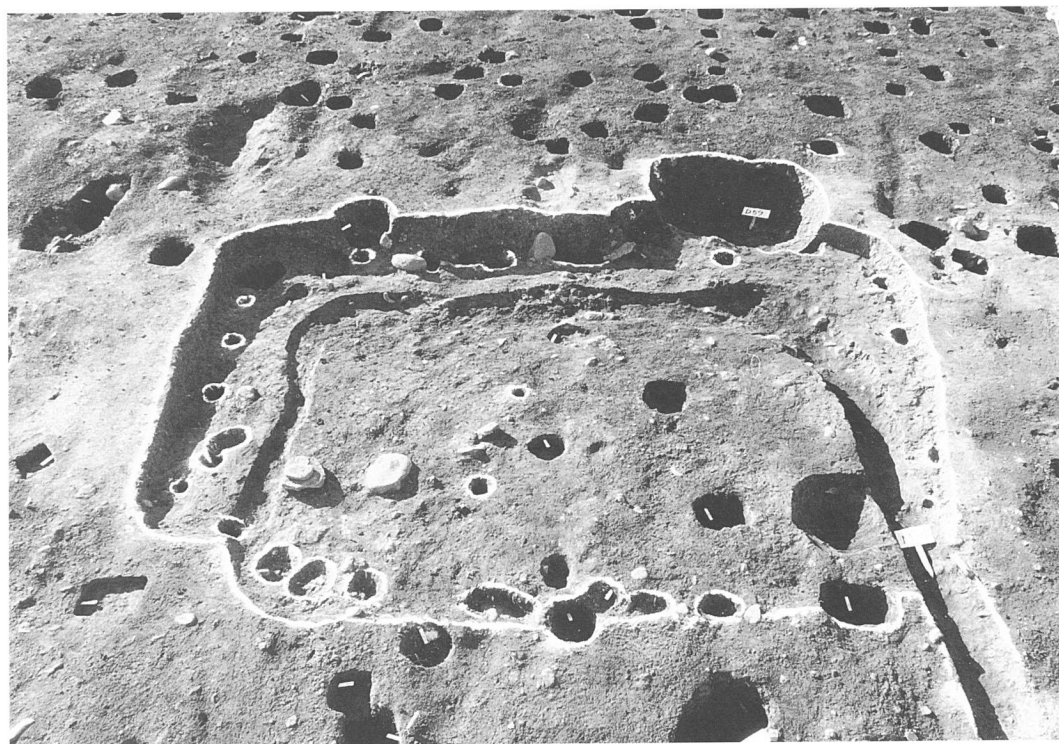
① II Ta 3 号竖穴状遺構全景(東より)



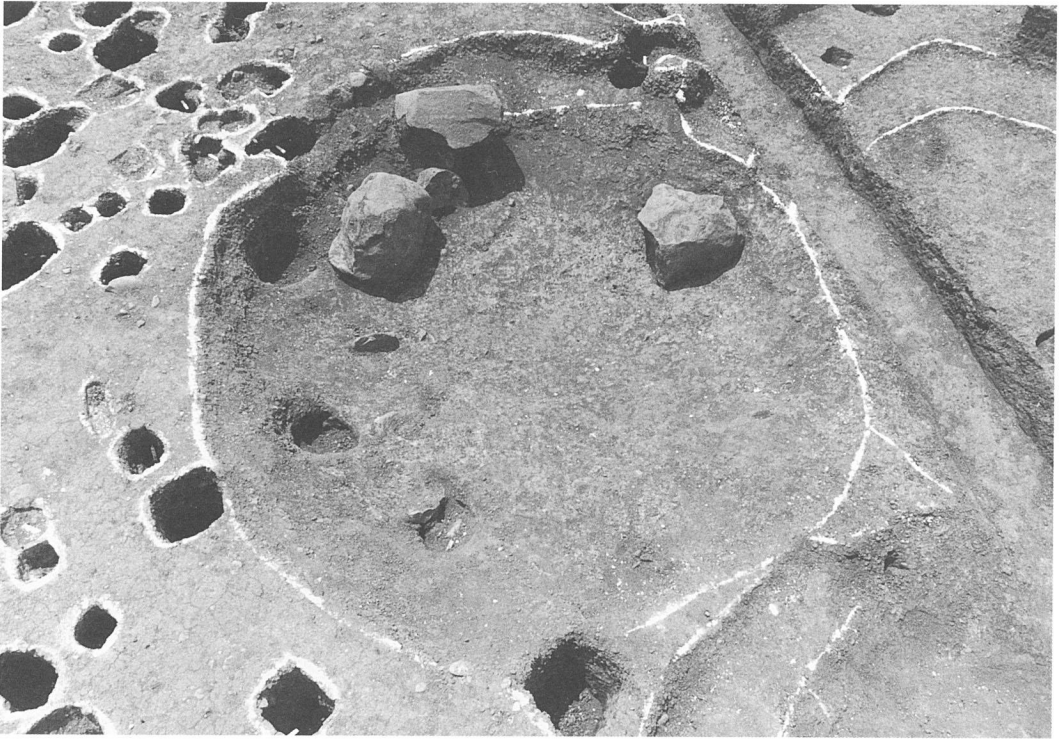
② II Ta 4 号竖穴状遺構全景(東より)



① II Ta 5 号竖穴状遺構全景(東より)



② II Ta 7 号竖穴状遺構全景(東より)



① II Ta 8 号竖穴状遺構全景(北より)



② II Ta 9 号竖穴状遺構全景(南より)

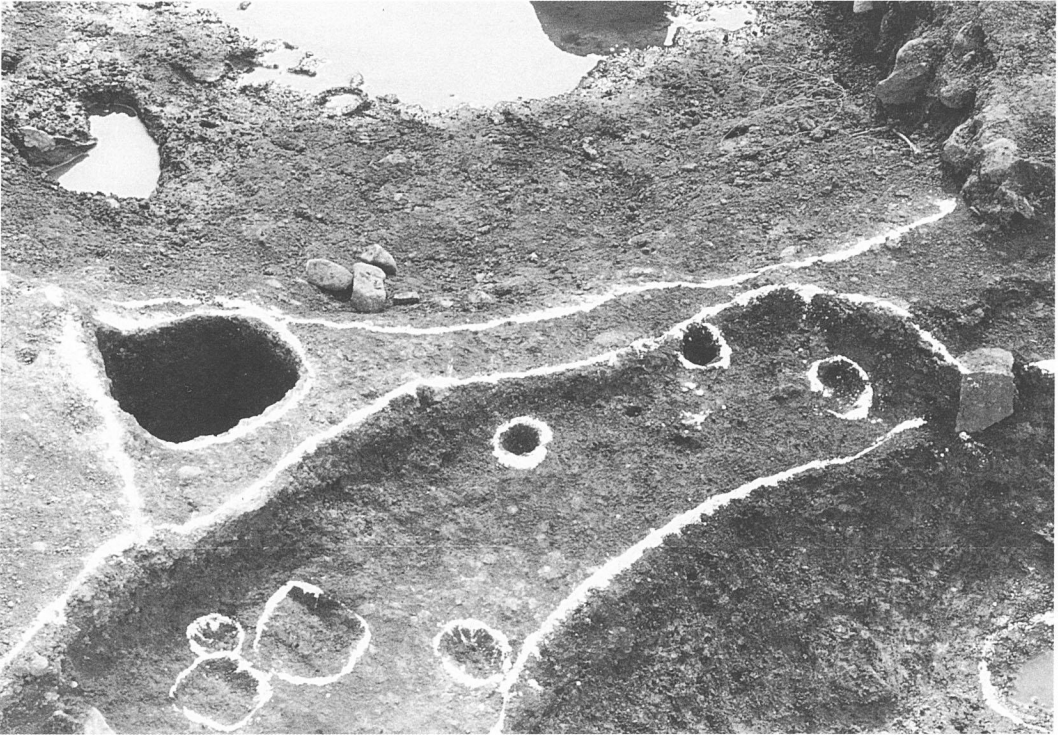




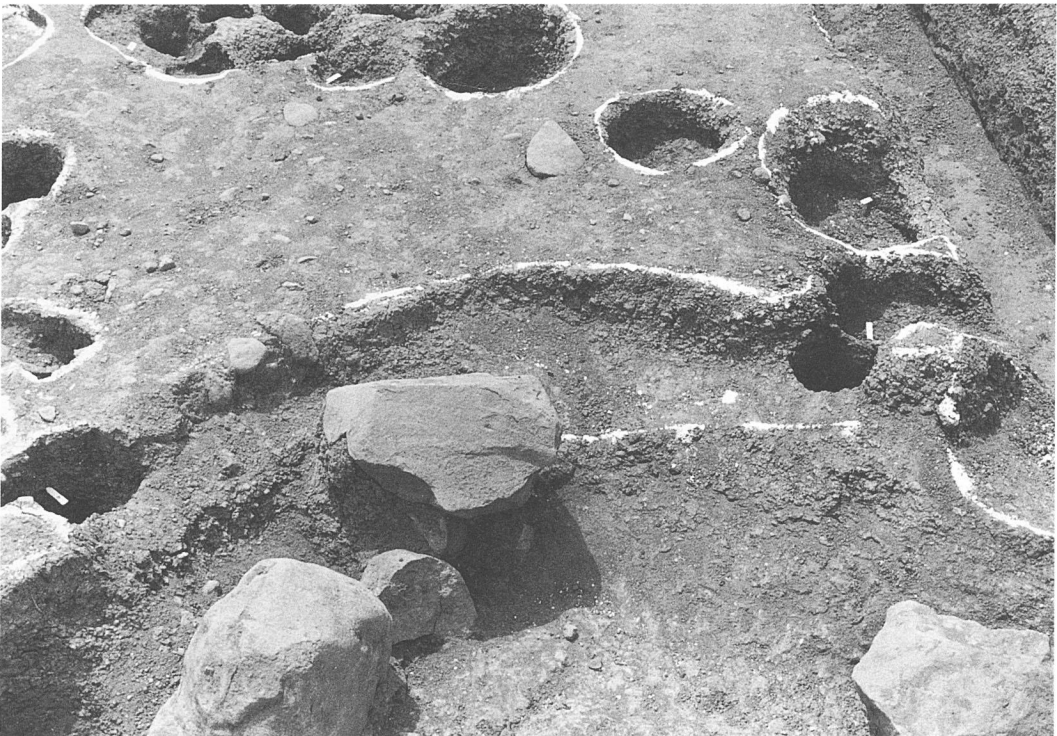
① II Ta10号竖穴状遺構全景(北より)



② II Ta11号竖穴状遺構全景(北より)



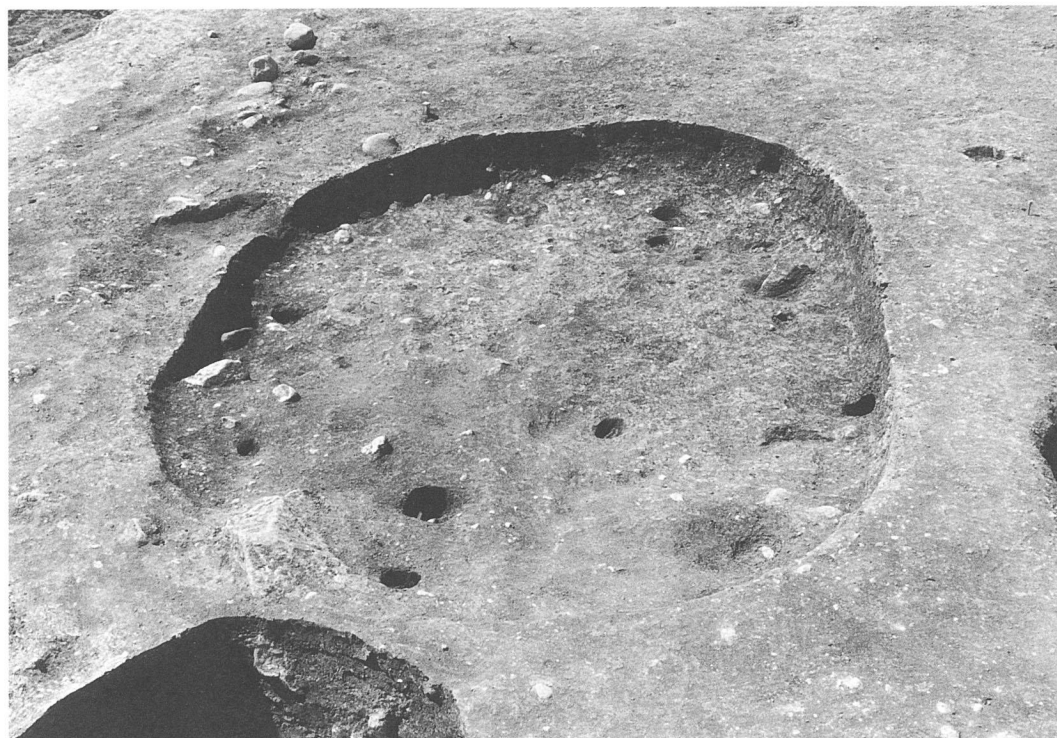
① II Ta12号竖穴状遺構全景(南より)



② II Ta13号竖穴状遺構全景(北より)



① II Ta14号竖穴状遺構全景(北より)



② II Ta15号竖穴状遺構全景(東より)





①ⅡTa16号竖穴状遺構全景(東より)

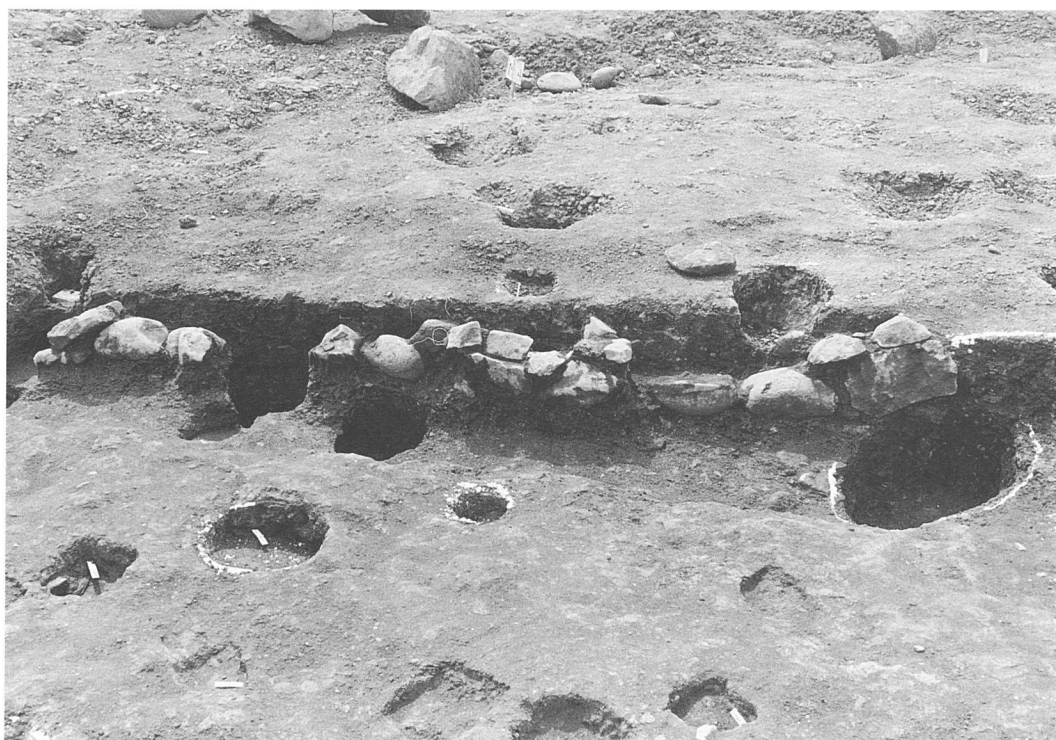


②ⅡTa16号竖穴状遺構掘り方全景(東より)

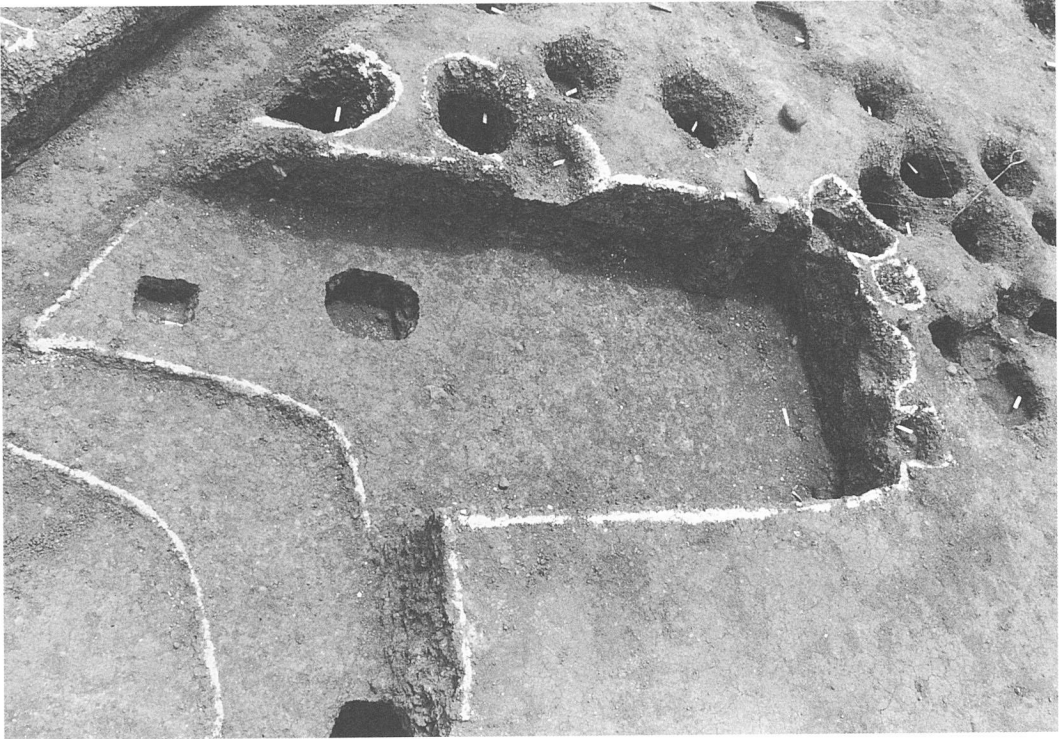




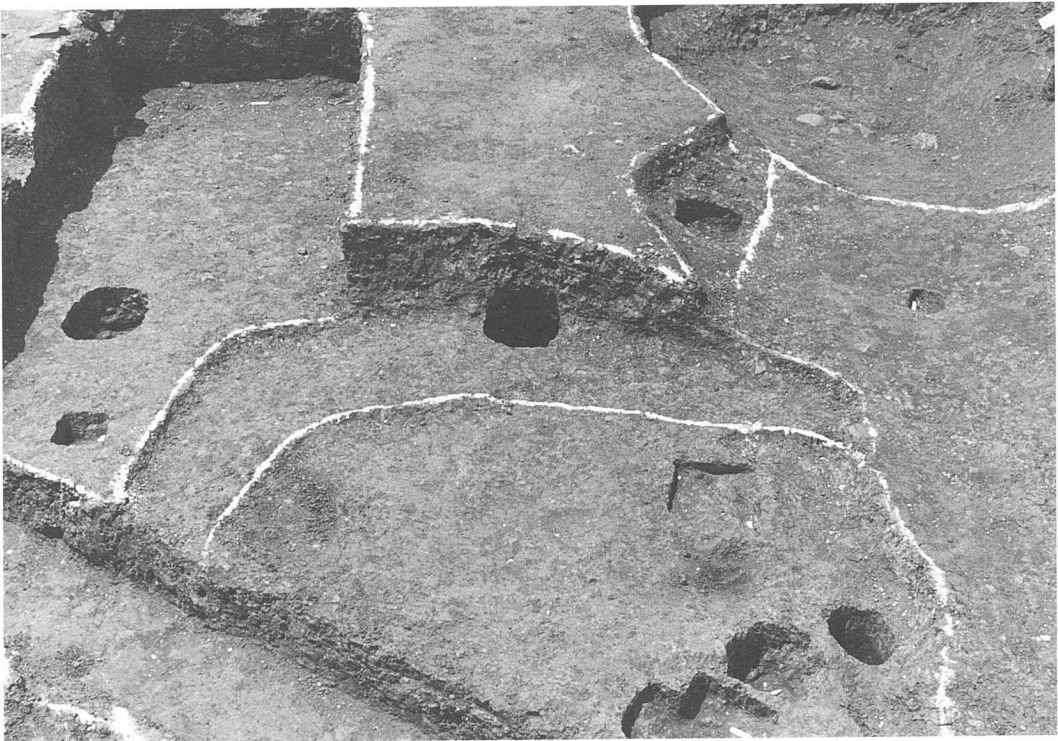
① II Ta21号竖穴状遺構全景(南より)



② II Ta21号竖穴状遺構石積み壁近景(東より)



① II Ta23号竖穴状遺構全景(北より)



② II Ta24号竖穴状遺構全景(東より)



① II Ta25号竖穴状遺構全景(南より)



② II Ta26号竖穴状遺構全景(西より)





① II Ta28号竖穴状遺構全景(南より)



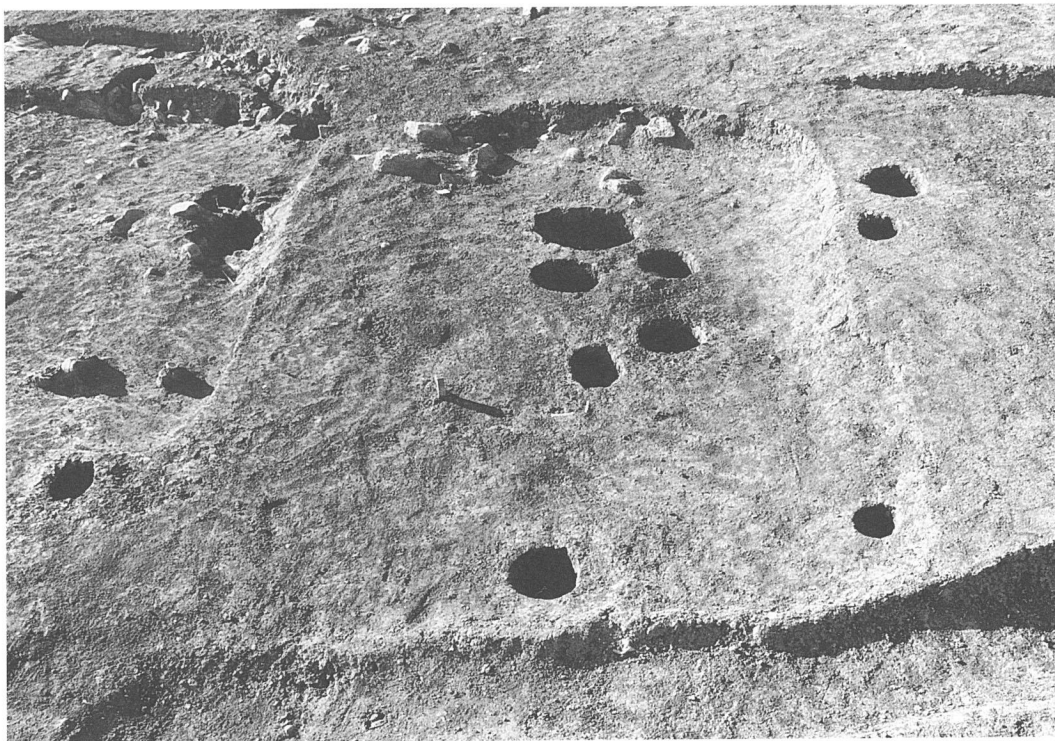
② II Ta29号竖穴状遺構全景(南より)



① II Ta30号竖穴状遺構全景(東より)



② II Ta34号竖穴状遺構全景(南より)



①ⅡTa35号竖穴状遺構全景(東より)



②ⅢTa1号竖穴状遺構全景(南より)

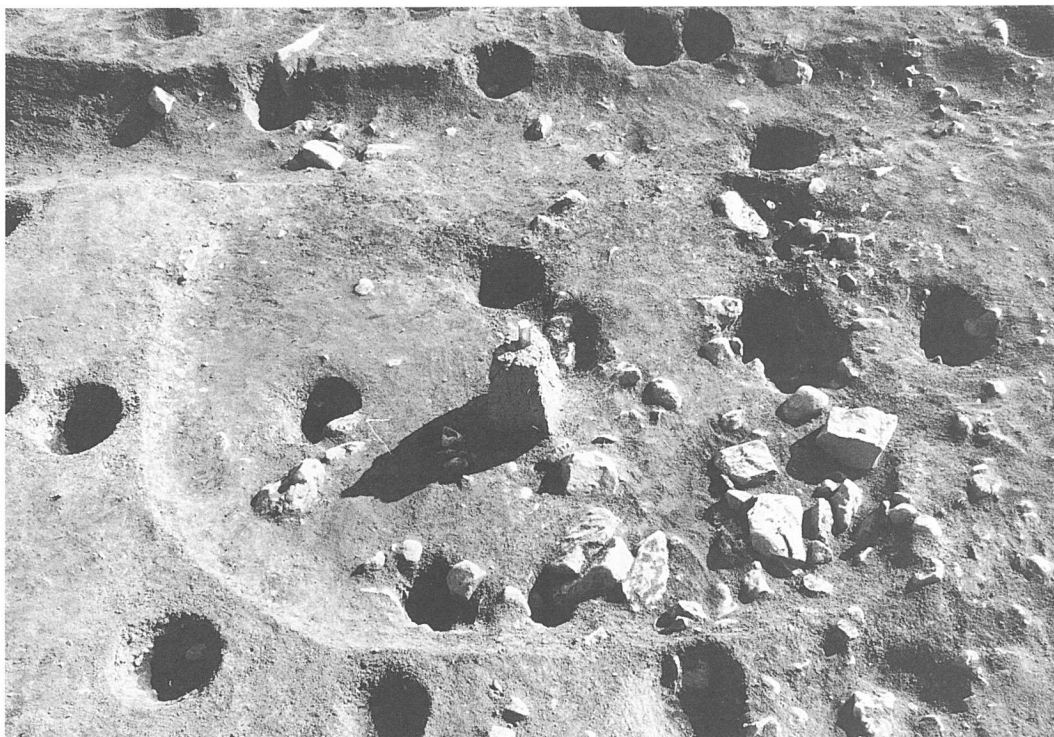




①ⅢTa 4号竖穴状遺構全景(南より)



②ⅢTa 4号竖穴状遺構礫除去後全景(南より)



① II Ta37号竖穴状遺構全景(西より)



② II区調査風景(東より)